0000778000

0000778-000

６８８－２１イ

欧亜点描

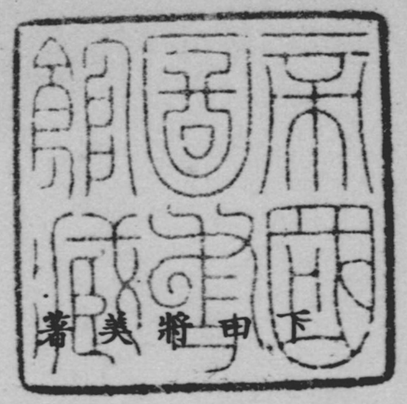
下田将美・著

一元社

昭１１

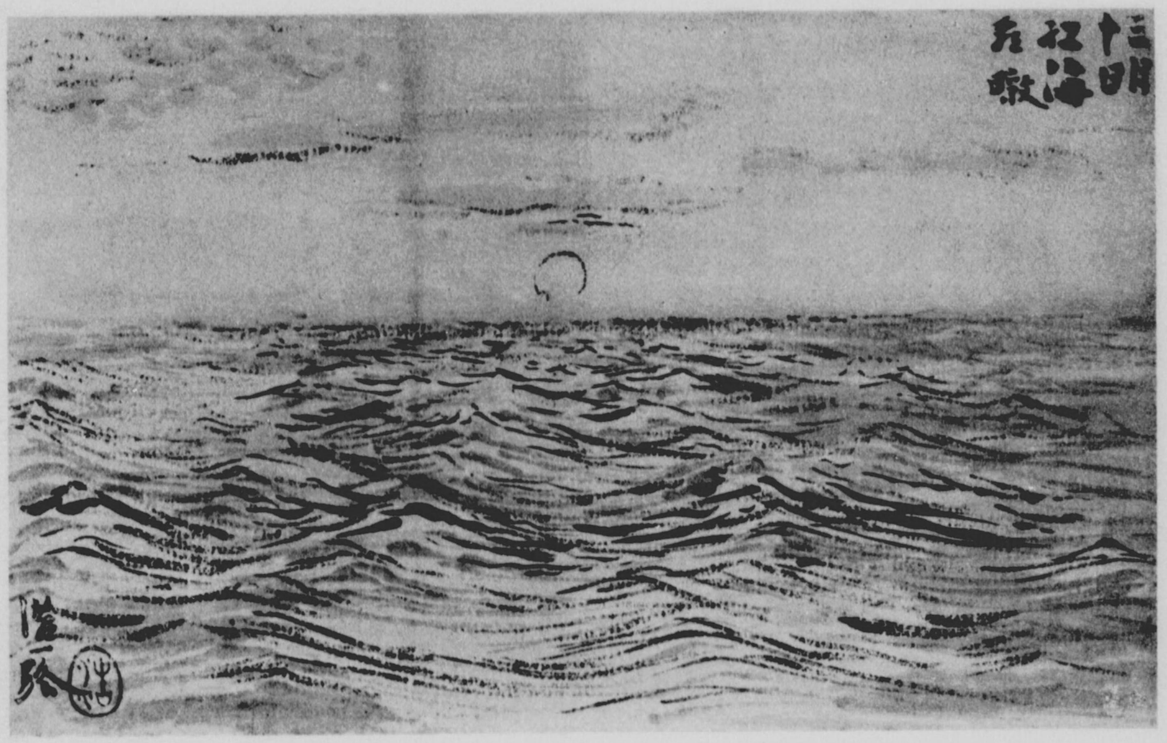
AAB

歐亞點描



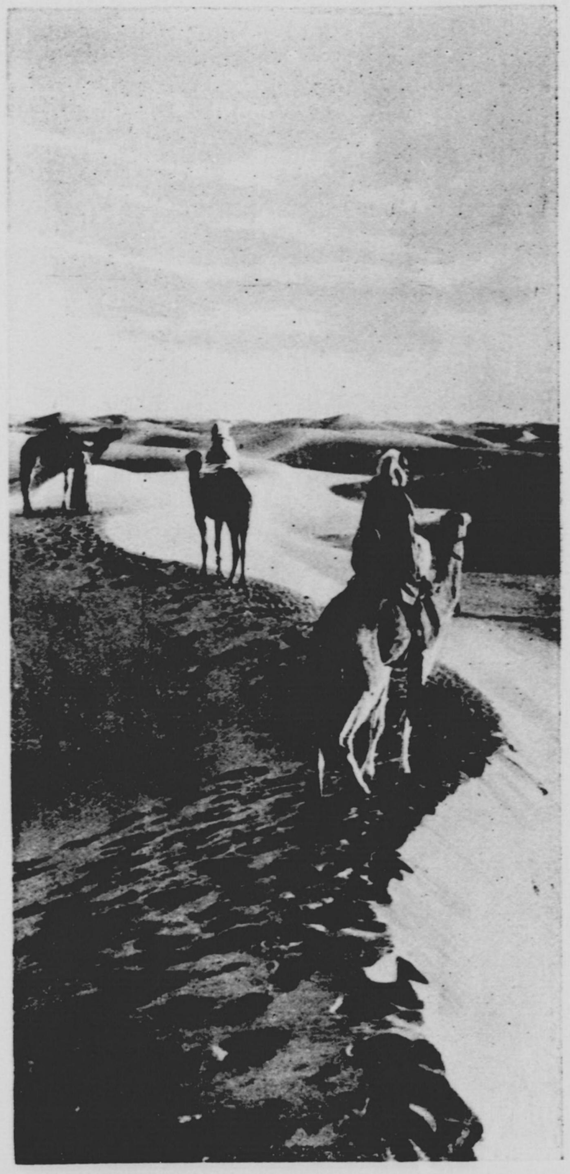
歐亞點描

一元社版

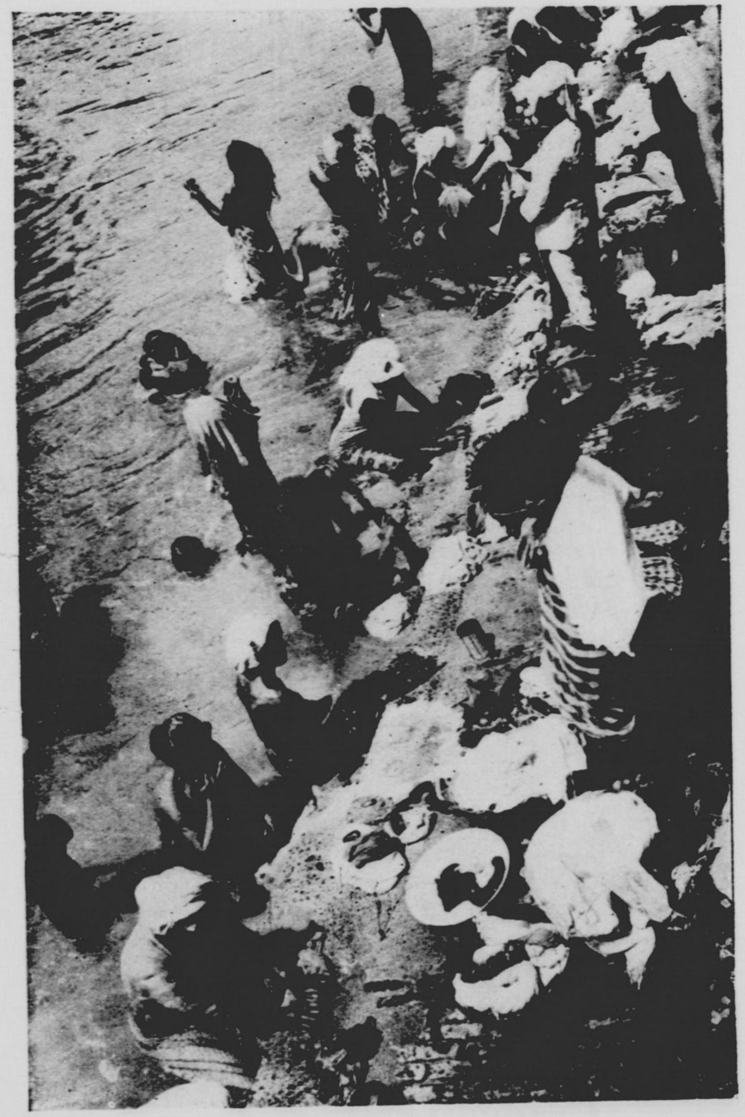

三月十日
於海
先驥
陰一路

望遠スクスマダ

娘のリガンハ



る切横を漠沙



浴水のワヤジ

街のグーラプ

688-2/1

目次

✓夕闇のバルカン　一
古都バクダッド　一五
コロンボのフエルナンド君　二七
賭博のジヤワ　三九
✓A老人の家庭　四七
白と赤　六一
マニラの牢獄見物　七九
珍魚デオロギー　九三
苦熱のペルシヤ灣　一〇七
シリア沙漠を横切る　一二三
土耳古雜信　一三九
沈默の塔　一六一
✓ナチス清黨事件直後の伯林　一七五
ジヤガタラ文の舊港　一九九
世界的二選手を偲ぶ　二一七
鰐を喰ふ　二二九
三百年前の日本地圖　二四五
ダマスクへ　二六三
密輸入物語　二七九
窮極を想ふ　二九九
後記　三二七

目次畢

夕闇のバルカン

近藤浩一路

裝

I

ブダペストに着いた翌日は、朝から煙のやうな柔かい雨が降りとめてゐた。豫定を狂はすこの出來ぬ旅であるが、私たちは永い熱帶地の旅行に、無用の長物としてスートケースの奥に押しこんでしまつた雨外套を、久しぶりで引出して身にまとつた。市内を見物するための四臺の自動車は、ホテルの前に並んで私たちを待つてゐた。

田園都市のやうに美しいブダペストの町は、車の走るにしたがつて狹霧の中から、夢のやうな詩の國の風光を浮びあがらせた。ダニューヴの川水はほの白く、動くとも見えぬ靜けさで流れてゐた。セント・ゲレート丘から見おろす町は、大觀の繪のやうに、森や、塔の先や、鐵橋の姿も半分だけ霧の海の上に浮びあがらせてゐた。默つて眺めてをれば平和そのものゝやうな美しい繪である。

私の前の椅子にクック社がつけた案内人が腰かけてゐた。粗末な雨外套をきた背の高い若い男であるが、眼の鋭い、キリツと結んだ唇に理智のひらめきの濃い、普通の案内人の型とはどこか違つた感じの男であつた。私は最初からこの男に妙に心をひかれてゐた。

いはゆる名所の前を通る時には案内人は一通りの説明をした。だが、それはホンの一通りの

説明で、すぐに私にいろ〳〵話しかけた。話はバルカンの外交と政治ばかりだつた。滿洲事變が起つた時、ドイツをはじめ歐洲諸國のすべてと、バルカンの國々はことゞ〳〵く日本を非難攻擊した。その中で、わがハンガリだけは各新聞とも筆を揃へて日本に味方し、日本の行爲を是認した。ハンガリは日本を理解し尊敬してゐることを、どうかよく記憶してくれとその男は熱心に說いた。話に夢中になつて、いつか名所舊跡の說明などはお留守になつてしまつてゐた。私はこんな案內人に今まで會つたことがなかつた。正體のつかめなかつたその時は、たゞ妙な男だなと思ひながら、相手の熱心にひかれて、話に引込まれてゆくのをどうすることも出來ぬばかりであつた。

雨はいつかカラリと晴れて、鮮かな六月の陽の光が、雨上りの街に、森に、道ゆく女の輕い帽子にさん〳〵とふりそゝいだ。自動車はリバーティ・スクエーアの前でとまつた。

今までの名所案內には通り一ぺんの說明しかしなかつた案內人は、今度は勢ひよく眞先に車から飛下りて案內に立つた。そこは町中につくられた小公園のやうな廣場で靑々とした並木の下には、ベンチが並んで女や子供が大勢遊んでゐる。廣場の一方にハンガリの領土喪失記念塔が立つてゐる。塔の基石の上には銅の大きな鷲が、巨大な翼を半開きにした雌伏の姿で、鋭い嘴をもつた頭を空にふりむけて何かをにらんでゐる。その鷲のひとみを追へば、塔から高く天

に伸びた長い旗竿の上に、ハンガリの國旗が半旗のまゝにかゝげられてゐる。ハンガリが歐洲大戰で失つた領土を、元どほりに回復する日までは、この旗はいつまでも半旗のまゝに殘されるのである。この廣場に來るほどのブダペストの市民は、いつも旗竿のなかばに寂しく垂れ下つてゐる國旗を見て、失はれたる領土の口惜しさを思つて、國旗が朗らかに頂上高くひるがへる日の招來を心に誓つてゐることであらう。

あたかもロンドンの無名戰士の碑の前に、いつも花輪が絕えぬやうに、こゝのロスト・テリトリーの塔の前にも花輪が飾られてゐる。だが、この花輪は黑布に萬斛の恨を染めて、かつてはハンガリであつて、今は別の國となつてゐる山に、川に、海に、哀悼の想ひをよせてゐるのである。塔の前庭は花園になつてゐる。見るとさま〳〵の美しい草花を組合せて、大戰前のハンガリの地圖が地上に描き出されてゐるが、その地圖には巧に色の變つた草花をつかつて、トリアノン條約によつて失はれた領土と、現在のハンガリの小さくも、みじめな姿との區別を一目瞭然と示してあつた。

私たちは暗然として記念塔の前に默禱した。案內の男は帽をとつて靜かに頭を垂れた。

大勢の日本人が集まつてゐるのを見て、いつかその邊に遊んでゐた子供たちや、女連や、失業者らしい男たちが私たちのそばに寄つて來たが、その中に古い軍服をきた大きな男が一人ま

じつてゐた。その男は片一方の足を太もゝから失つて松葉杖をついてゐた。明かに彼は歐洲大戰が生んだ廢兵に相違なかつた。男は肩から小さな鞄を吊つて、繪ハガキを賣つてゐた。買つて見ると、その繪ハガキは舊ハンガリの地圖で、わきについてゐる取手を動かすと、舊領が分裂してまん中に小さな現在の領土だけ殘るやうに細工が施してあつた。

日がまた急に陰つて少し風が出てきた。雨にぬれた青葉を吹きぬけて來るしめつぽい風に、繪ハガキ賣の廢兵の半ば白を交へたびんの毛がそよぎ、領土喪失記念塔の上の半旗が旗竿にまつはりながら震へるやうに動いた。何かしら冷く淋しいものが、私たちの心の中を吹きぬけてゆくのを感じた。

I

午後私たちは雨上りの郊外へ氣持のいゝドライヴをした。五百メートル以上のジャン山は、麓で車をすてて、細い山道を歩いて登つた。崖には松の木が下徑を暗くするほど立並んで、あざみの花が薄紫にいくらでも咲き續いてゐた。遠い故郷の山が、野が、私たちの心の隅によみがへつてきた。

山を下りて歸り道の車は長く續く森の中へはいつて行つた。日のさゝぬ深い木立にかこまれ

た徑を氣持よく奔りつゞける車の中に、しつとりと濕つた青葉の匂ひが、さわやかに流れこんできた。

ブダペストの郊外は日本を思ひ出させるやうな風光が多いと、私は前に腰かけてゐる案内の男に話しかけた。靜かな暗い森の中で故郷の話をすれば、たれでも感傷的にならざるを得ない。今まで自分の身の上話などには一言もふれずにゐた案内の男は、いつか、しんみりと自分自身のことを話しだした。それは國を失ひ、故郷を失つた人々の落莫たる心境の告白に滿ちてゐた。

彼は生粹のハンガリ人であるが、自分の故郷はトリアノン條約の結果、今ではルーマニアの領土になつてしまつたといつた。自分は男であるからハンガリへ逃げてきて、こんなはかない職業について身を立ててはゐるが、家族はどうにもならぬので故郷に殘してある。自分の故郷の人たちで一割くらゐはこちらへ來てゐるが、殘る九割はルーマニアの治下に止つてゐる。自分はこゝにゐても故郷の人たちのことを考へると胸がいたむ。慰めのない魂、訴へるにところのない魂、それが故郷を奪はれた人たちの姿だともいつた。

「チエコスロヴアキアでも、ルーマニアでも、いまだに毎日のやうに、殘つてゐるハンガリ人は殺されてゐるのです。こんなことは日本にゐてはとても想像もつかないでせうが、ほんとうの話です。あらゆる迫害と生命の危險にさらされながら、他國の領土になつたわが故郷

で泣いて日を送つてゐる人達の上を考へて見て下さい。」

さういつて、案内の男は悲痛なひとみをして私を見守つた。やがて一切を突き破るやうな強い言葉が男の口から出て私を驚かせた。

「われ〳〵ハンガリの國民は誓つて舊領土を回復して見せます。たとひどんな苦しさが來やうとも、必ずハンガリは大戰前の領土を取戻さずにはおきません。」

と、私はこの時になつて、この案内人は決して平凡なたゞの人間ではないのだなといふことを感じた。

話はそれからまたバルカンに對する列國の態度に、獨墺の合併問題に、小協商國の外交にと次から次へと移つて行つた。彼は雄辯でもあれば、豐富な政治知識の持主でもあつた。私はいつかクックの案内人相手でなしに、一通りの政治家でも相手にしてゐるやうな話を進めてゐる自分を見出してしまつたのである。

森を出はづれると靜かな樹の多い郊外の住宅町に入つた。次の時代を背負つて立つ少年を集めたボーイ・スカウトの一群が、日に焼けた脛を勇ましくむき出しにして行進してゐた。案内者の男はやつと思ひ出したやうに、我に返つて近所の建物の説明などを初めた。

自動車がハンガリア・ホテルの近くまで歸つて來た時に、私は何かハンガリの最近の經濟事

情を書いたい〻本はないだらうかと案内の男にきいて見た。それには實にい〻本があります。

「平和か、戰爭か」といふ本など見たことがありますかといふ答へだつた。私はまだそんな本は讀んだことがない、どこで手に入るのかときいて見た。

「では一つその本のあるところへ御案内しませう」とその男はいつた。私はホテルの途中で自動車を下りて、やはりそんな資料がほしいと希望してゐた三、四人の一行と一しよに案内者のあとについて行つた。もう商店の開店時間のすぎた夕暮のことで、どの店もあいてはゐない。それでも、私は何か特別の本屋に便宜があつて買へるところがあるのだらうくらゐに考へて、その男のあとからついて行つた。

案内者はダニューヴの川岸を前にした通から狹い横町をはいつて行つた。そこは全く裏町になつて暗い大きな石の建物が奥深く續いてゐる。妙なところだとは思つたもの〻、案内者はずんずん大またに先に歩いて行くので仕方なしについて行くと、やがて男の立止つたところには大きなビルヂングの裏口があつてエレヴェータが止つてゐた。「サアどうぞ」と案内の男はエレヴェータを指した。私たちは何か狐につま〻れたやうな氣持で、案内の男と一しよにそのビルヂングの三階に登つて行つた。

I

エレヴエータを降りて、すぐ前の扉を開けると、小さつぱりしたオフイスが現れた。タイプライターを叩いてゐた若い女が立上つた。理智的な聰明さうな顏をした美しい娘だつた。案內の男が何か小聲で二言三言さゝやくと、すぐに私たちの方を振向いて愛嬌よく笑ひながら、どうぞと次の部屋に通ずる扉をあけかゝつた。本屋にしては少しをかしい。私たちはちよつと狐につまゝれたやうな氣持で立盡した。案內の男の方を見ると、口を一文字に結んで、人が違つたやうな嚴肅な顏をしながら、やはり、どうぞと次の部屋の方を指した。私はそつちへ行くより仕方がない。

扉をあけると大きな立派な部屋があつた。眞ん中に頑丈な大机があつて、その一端に白髮の老紳士が端然と坐つてゐた。案內の男が私を紹介すると、老紳士はにこやかに笑ひながら、よくいらしつたと手を差しのべた。溫く、力强く、大きな手であつた。私たちは名刺を交換した。老紳士がくれたのを手にして見ると、元文部大臣ルカス氏であつた。私は今さらのやうに上品な、それでゐてどこかに利かぬ氣の風貌を備へた老ルカス氏と相對しながら、案內の男が何の目的で私にきのふからまつはりつき、何の目的でけふこゝへ案內して來たかを、はじめてはつ

きりと氷解させることが出來た。こゝは本屋でも何でもない、ハンガリ領土奪還運動の本部にほかならなかつたからである。

まあ坐つてくれと私たちを大机の前に請じておいて、ルカス氏はしんみりとバルカンの現狀からハンガリの窮狀を物語り出した。話が進むにつれて、この憂國の老紳士の頰には興奮の血が赤く漲り出した。澄んだ黑いひとみには悲壯な光がひらめき出した。話はそれからそれへと盡くるところなく續いた。

「ハンガリはトリアノン條約の結果全く孤立の地位に置かれてしまつた。國の四周はすべて分割して他國にとられてしまつた。ハンガリは海のない國になつたのです。あなたの國は海にかこまれた國です。海を失ふことがいかに大きな打擊だかは、よくわかつてくれることと思ひます」

ともいつた。ルカス氏は大きな地圖を持出して、私たちの目の前に展げながら話しつゞけた。

「ごらんなさい、ハンガリの誇りとしてゐた二つの立派な大學は、土地と一しよに他國にとられてしまつたのです。物質だけでなしに、ハンガリは心まで一しよに奪はれてしまつたのです。私たちの寶庫であつた鑛產物の出る土地はみな失はれて、今ではよその國の資源とな

といふルカス氏の聲はふるへてゐた。

私は四、五日前にユーゴ・スラヴィアの首都ベルグラードですばらしい新築の商業博物館を參觀した時、豐富な鑛產物が立派な標本にしてずらりとならんでゐた光景を想ひ出して、暗然とした。

「國は奪はれてもハンガリの人民は土地に止まつてゐます。どんなにみじめな慰めのない年月を彼らが過してゐるか、私はたゞあなた方の同情に訴へるばかりです。民の大部分は農夫です。忙しい收穫季までを働きつゞけて、農閑季に都會へ出てくるのが彼等のたゞ一つの樂しみだつたのですが、今ではそのたつた一つの樂しみさへ奪はれてしまひました。かういふ一切の光明を奪はれた生活が、どんなに寂しいものか、察してやつて下さい」

ルカス氏はさういつて老いの目をしばだゝかせた。默つてルカス氏の背後に立つてゐた案內の男は不意にクルリと背をむけたと思ふと、ポケツトからハンカチを出して目を拭つた。私は水のやうに冷たいものが胸の中からわき上つてくるのを感じた。いつか私自身の目にも涙がたまつて前に展げられた地圖がボーツと霞み出した。

ルカス氏は奥の方の部屋から、また一人立派な體格の中年の紳士をつれて來た。名刺を貰ふとポール・フオルスター男爵と書いてあつた。ルカス氏に代つて、今度はフオルスター氏が話

し出した。元氣のいゝ雄辯家だつた。

「民族自決などは實際は痴人の夢です。ルーマニアとの境は高い山ばかり、民族などは入りまじつて自決などどこにもありはしません。ヴエルサイユとトリアノン條約によつて生れた國も、國を失つた國も、全く不自然な狀態に置かれてあるのです。どの國も立ちゆかぬのです。國が立ちゆかずにどこに平和があります。歐洲がこの不自然な狀態から改まらぬ限り歐洲に平和は絕對に來ません。私たちは誓つて舊領土を回復して見せます」

と强い決心のひらめきが眉の間にひらめいた。

「どうか日本へ歸つたら私たちの現狀を、あの義俠心と勇氣とに滿ちてゐる國民諸君に話して下さい。私達もまた東洋の血をうけた民族です。東洋においてたゞ一つの正義の國である日本に、私たちハンガリの國民は心からの信賴と思慕の情をもつてゐることを、よく覺えてゐて下さい」

夕闇はもうすつかり室內に立ちこめて、そろ〳〵人の顏も見えなくなつた。私たちは時のたつのも、暗くなつたのも忘れて、男らしい興奮の中にひたつてゐた。

ハンガリの前途に輝かしい日が來るやうにと、心からの慰撫の言葉を殘して、ルカス氏やフオルスター氏と堅い握手をかはして外に出た。

外はもうすつかり夜になつて、ダニューヴの川波には木犀の花のやうな美しい對岸の灯がキラ〳〵と映つてゐた。

「どうもいろ〳〵有難う」と私は心からの禮を案内の男にした。案内の男はこの時になつて初めて名刺をくれた。名刺の表にはナショナル・ユニチー・パーチー幹部S博士と記してあつた。

古都バクダッド

I

バグダッドは現代文明と全くかけはなれて、昔ながらのアラビヤの色と、臭ひと、獵奇の姿を、そのまゝに殘してゐる唯一の都であるかも知れない。

古代文化の源泉としてのバビロンの歴史は舊約の昔に遡る。さらに遠くを想へば、こゝは紀元前四千年、山地々方から移住して來た民が、豐穣なチグリス、ユーフラテスの二つの川の惠みをうけて、大きな集團生活を營んだ當時から、すでに文化は最も進んだものであつたといはれてゐる。メソポタミアとエジプト、この二つの地方が人類最古の文化の中心地であつたことは疑ふべくもない。だが星霜六千年、人は治亂興亡の幾多の悲喜劇を重ね、自然は沃野を沙漠と化して、ネブカトネザーが、バビロンに榮華を誇つた夢の跡は、徒らにエレミア記の神の豫言を現實化せしめたにすぎない。かうして昔のメソポタミアは今はアラブ語のイラク國とかはり首都のバグダッドは沙漠の中に横はる都會として、現代文明から最も遠ざかつた姿を旅人に見せてゐるのである。

インドのカラチを出帆してから六日目の夕暮、私達を載せたビー・アイのヴアレラ號はペルシャ灣を縱斷してバズラ港に碇を下ろした。ビー・アイ航路の終點であつてイラク國への東洋

からの入口である。バズラの名がやゝ一般的に人に知られるやうになつたのは歐洲大戰が起つてからのことである。一九一四年トルコは聯合國に宣戰を布告した。英軍はその十一月にバズラを占領し、こゝからインド兵を上陸させた。慘憺たる行軍難が前途に待つてゐた。蟻のはふやうな進軍をつゞけ一年たつた翌年の十一月、テシフオンの激戰で敗れた英軍はカットに退却して、またその翌年の四月迄止つてゐるうちに、進退谷まつて土軍に降服してしまつた。勇將スタンレー・モードが代つて攻め、やつとカットを奪還し、續いて長驅して英軍、インド軍がバグダッドを占領したのは一九一七年の三月のことであつた。約三年の長日月を費してバズラからバグダッドまで行き得た勘定になるのである。今日、汽車で行けば僅かに一晝夜の道程にすぎないところが、いかに土軍の抵抗が激しかつたにせよ三年もかゝるとは念が入りすぎてゐるやうにも考へられる。しかし實際にバズラからバグダッドまで、平和の今日汽車で旅をして見ても、決して樂ではない。こゝを戰ひつゝ行く荒凉たる沙漠の炎熱を思ふと、三年も無理はないと感じてくる。

人間ばなれのした百十何度といふ炎熱のペルシヤ灣を通りぬけて、身も魂もとろけるやうな疲勞を感じてゐた私たちは、バズラに上陸して驛前のレスト・ハウスに一休みしたあとで、すぐにマキル驛から午後九時の汽車に乘りこんだ。夜は幾分か氣溫は下つてしのぎよくはなるが

それでもムシ〳〵と暑い。

汽車は大きな車であつた。寢臺車に入ると、煽風機が二つかゝつてゐて、窓は三重になつてゐる。うす暗い電燈の光りで寢床を見ると、枕も、カヴアも黃色い埃で一ぱいになつてゐる。それは全く室內の光景ではなくて、風の日の紅塵の街に見る光景である。よく見れば窓のふちにも、柵にも、埃と土は生地の見えぬほどにつもつてゐる。これはえらい汽車だと思ひながら、疲れてゐるので埃をはたいて、ともかくも寢臺の中へもぐりこんだ。

ろくに寢られない、夢ともうつつともつかぬ一夜が明けた。

起き上つて來た同室のM君を見ると、私は思はず吹き出した。眞黑な髮をしたM君は一夜にして白髮の老人に化してゐた。寢てゐる間に三重のガラス窓から吹きこんでくる沙漠の砂が頭につもつてしまつてゐたのである。

客車は一つ〳〵獨立して、他の車との交通は遮斷されてゐるので、食堂車へは停車場へついたすきをねらつて、急いで飛下りてかけつけねばならない。どこかの驛にとまつた。私は大急ぎで車を下りた。カツと暑い陽がまともに全身を襲つてきた。五分とは立つてゐられぬ酷熱の地獄である。

水は危險で飲めぬので、大きなエビアンの瓶をむやみに空けながら、まづい朝飯をボソ〳〵

と食つた。開ければ熱風が舞ひこむので、固くしめ切つたガラス窓を通して外を眺める。何といふ荒涼落莫たる風光なのであらう。たゞ一面の灰白色の荒野、草さへもろくにない、からびた切つた水氣のないすさまじい死の原である。ところ〴〵に廢墟に似た石の家が立つて、羊の群がかたまつてゐる。こんなところにでも住めば人間は住めるものかと不思議に思はれるばかりである。

汽車は熱風の沙漠をまる一日奔りつゞけた。動けば暑い。遠慮なしに車内に舞ひこむ埃で、戸外と全く同じになつてゐる座席に私たちはぐつたりと伸びてゐるよりほかはなかつた。さうして一晝夜をすぎた夜の十時にやつとバグダッドについた。

Ⅰ

バグダッドは、「平和の都」と呼ばれてゐる。往昔、文化花やかにこゝに芽生えて、四方の國々から集まる路が、すべてこゝの門への到達を競つた時代には、豪奢な城門と城壁とが町を圍んで立つてゐたらしい。「サマルカンドへの黄金の道」もこゝに通じ、聖都メッカへの順禮の道もこゝの門から出發した。しかし幾千年の歳月は今のバグダッドをたゞ古めかしい、アラビヤン・ナイトの面影を止めた舊都として旅人の感傷を誘ふてゐるにすぎない。人かはり、國

移つて、たゞチグリスの河だけが昔ながらの姿に、濁つた水を悠々と流してゐる。

バグダッドは馬糞と埃にまみれた臭い都會である。人口三十萬、イラク全人口の約十分ノ一がこゝに集中されて、ムハメダンが大部分を占めてゐるが、穀物や、獸皮、果實、棉花等の主な産物をこゝから出すのも、近年すばらしい勢ひで進出しだした日本品はじめ、海外からの物資を入れるのも、商業の實權はユダヤ人の手に納められてゐる。實利に生くるユダヤ人と、回教の天下を誇るアラブ人とが入りまじつて、この臭い、舊い都をいよ〴〵エキゾチックないろに染め出してゐるのである。

實際この都會は一種異樣のにほひに滿ちてゐる。支那の裏街を歩いた經驗のある人は、たまらない臭さを思ひ起すであらうが、支那街のにほひはどこまでも脂臭い。こゝの臭ひは馬糞と埃との入りまじつたカサ〴〵したいがらつぽいにほひである。バグダッドの町は馬車の天下である。チャラ〴〵と鳴る鈴を首につけた二頭立ての馬車が日本のタクシーの代りをして、大通り小通りを無暗に驅け廻つてゐる。町を一歩出れば、近郊はすぐに沙漠である。らくだがあらゆるものを運ぶ役をつとめ、小さな驢馬が人をのせてゆく。かうした馬や、驢馬や、らくだの糞が百度以上の日に照らされてすぐに乾燥する。沙漠を越えて四六時にバグダッドの町を吹きぬけてゆく熱風が、人も、家も、容赦なく獸糞と埃のうづまく中にまきこんでしまふのである。

バグダッドが臭い都であるのは當然だといつていゝ。

私達はバグダッドへついた翌日市中を見學して、公園のそばにある英國が建てた慈善病院へ行つて見た。さすがにこゝには椰子の木や柳ばかりの沙漠風景とは違つていろ〳〵の草や木が久々で私たちの目を樂しませてくれた。公園のそちこちには夾竹桃の花が血のやうに紅く、花園にはカンナや、葵や、ひまはりの花が黄に赤に咲き亂れてゐた。だが、かうした花の咲く公園を通りぬけて、その一角にある慈善病院の前に出た時、私たちは暗然として目を見張らされた。病院の戸口に診察を待つて長く連なる列をなしてゐる人たちは、すべて眼を病むものばかりであつた。兩眼を失つたもの、片目のつぶれたものゝ夥しい群衆、それはあまりにもみじめな光景であつた。町を歩いてもバグダッドの市民は十人の中の六人までは目が滿足でない。赤くただれた目、つぶれた目。元來アラブ人はなか〳〵立派な顏附をしてゐる。美少年が非常に多い。そのとゝのつた、いゝ顏の少年が多くは目をただらしてゐる。悲慘の極である。こゝの病院に來るものは、堪へられぬものだけが集まつてゐるのであらう。大きくいへばバグダッドはすべて目に惱んでゐるのである。それもこれも獸糞と埃にまみれた沙漠の町の惱みでなくて何であらう。

この異樣な臭氣に滿ちたバグダッドに住む人は、昔ながらのアラブの風俗をそのまゝに殘し

ていかにも現代ばなれのした世界を旅するものに見せてくれる。ムハメダンの男は、頭の上に奇妙な釜敷のやうなものをのせて、手拭に似た廣い頭巾を風に靡かせて歩いてゐる。女は全身に黑衣をまとつてただ目だけを人に見せてゐる。行きずりに、すれ違つても、すつぽりと頭からかぶつた頭巾の、黑一色の中から僅かにのぞいてゐる目を見るだけでは老女なのか娘なのか美しいのか醜いのか、全く見當もつかない。美しい女には不滿であらうが、醜い女ならこれほどいゝカムフラージュはない。

ムハメダンの古い寺院の壁によりかゝる黑衣の女等、果物を路上にならべて、道行く人たちに何か呼びかけながら手をふつてゐる物賣、小さな驢馬の上に大男が足が地をするほどにふみまたがつて、洋傘をさしてゆく姿、すべてがアラビヤン・ナイトの挿繪をそのまゝに再現したやうな獵奇色にみちてゐる。シンバッド・ザ・セーラーやバグダッドの盜賊が、今でもそこらに滿ちてゐるやうな氣持がしてくる。だが、バグダッドがいかにもバグダッドらしい色と、にほひを十二分に備へてゐるのは市場の光景である。私たちは自動車を町の一角にすてゝ、市場の人ごみの中をもまれて行つた。

I

バグダッドの市街を眞ん中から貫いて流れるチグリス川は、隅田川ほどの大きさで、隅田川と同じやうに濁つた水がどんよりと動いてゐる。グフアと呼ばれる禪僧の鐵鉢に似たお椀型の舟が浮いてゐる。川には長い木橋がかゝつてゐるが、いづれも船橋で、何百となく浮かべ連らねた舟を繋ぐ橋上をゆけば、足許はいつもユラ〳〵と搖れる。自動車で通れば橋錢をとられる。この橋を渡つて、法王の冠のやうな丸く光るドームを、中空高く聳えさせたムハメダンのモスクを、遙か向うに望みながら、ごみ〳〵した汚ない町をゆきつくしたところで自動車を下りると、そこが市場の入口であつた。

市場は日本の公設市場風景を思ひ切つて大きくしたものと考へれば間違ひはない。大通りから横に入つた一角、心齋橋筋をさらに幅廣く、そして不潔と無秩序と惡臭の中に投げこんだ世界、兩側からテントを張つて全く日のさゝぬ薄暗い道に一歩踏みこんだが最後、芋を洗ふやうな人ごみの中にまきこまれてしまふ。

何といふ雜多な店の連續であらう。ペルシヤ絨氈の美しい模樣が惜しげもなく掛け連ねられてゐる店、梅や杏やトマトなどを山のやうに積み上げた果物店、穀物の店、寶石の店、シリアが誇る一代の美貌、アクナトンの妻クイーン、ネフレツト・イチの花のやうな頸を腕を飾つたであらうやうな、ルビーや、エメラルドやギラ〳〵と怪しく光るオパールが、いくらでも並べ

てある。羊の皮を賣つてゐる店がある。こゝはまた殺風景に今殺してはいで來たばかりらしい血のたれる皮を土間の上に積み上げて、何ともいへぬ生臭い臭ひの中に、ユダヤ人らしい男が手まねをしながら怒鳴り立てゝゐる。

はゞ二尺もあらう大きなせんべいを燒きながら賣つてゐる男もある。往來に坐つて山のやうに積んだ煙草を一本々々卷煙草に作り上げて賣る者もある。言葉通り喧々ごう〳〵、玩具箱を引くり返したやうな種々雜多な色と臭ひに滿ちた暗い市場の中を、イラク人、インド人、アラビヤ人もアルメニア人も入りまじつて歩いてゐる。こゝの名物のコーヒー賣がチンドン屋のやうな變つた風體をして、手にもつた小さい茶碗をカチ〳〵いはせながら人ごみをぬつていく。驚くべきことにはこの人ごみの中を平氣で驢馬にのつていく男がある。たくましいアラビヤ馬に騎して堂々と乘りこんでくる男もある。馬も人も平氣なら、雜踏の人達も氣にもしない。馬の尻を押つけられて危ふく避けるムハメダンの、目ばかり出した黑衣の女を、店番しながら大きなパイプで悠々と煙をはいてゐる老爺がニヤ〳〵笑ひながら眺めてゐる。不思議なる亂雜の美であり、醜怪な雰圍氣がかもし出す千夜一夜の世界のまぼろしに似た現實である。

一町もあらうと思はれる長い暗い市場を通りぬけると、カツと烈しい日のさす通りに出る。溫度は百十四度、いかに熱帶の旅に馴れた私達でも、さすがに堪へられぬ暑さであるが、こ

に住む人達には何でもないことなのであらう。往來の少しばかりの日陰を見つけて大入道のやうな赤ぐろい顔をした男が道ばたで床屋にひげをそらせてゐる。いかにも心地よささうな、のんびりした口を半開きにウト〳〵してゐるその男の顔を見ると、こゝにも住めば都の平安があることをしみじみと思はせられる。

待たせておいた自動車に大急ぎで乘らうとして、ふと市場の角の雜貨店を見ると、ショーウインドーにセルロイドの人形やら化粧道具やらが飾つてある。それは一目で私達の頭に來る見覺えのある品に相違なかつた。私は乘ることを止めて、もう一度その飾窓に近づいて見た、疑ひもなく、そこには日本製のセルロイドの裸人形が並んでゐた。齒ブラシが並んでゐた。櫛が鏡が並んでゐた。私は日本人がたゞの一人もゐないこのアラビヤン・ナイトの都會の眞ん中に沙漠の熱風を超え勇敢にも移り住んで、にこやかにほゝ笑んでゐる裸人形を眺めてゐるうちに、何ともいへぬ心强さと、悲壯な氣持が胸の底からわき上つてくるのを抑へることが出來なかつた。

コロンボのフエルナンド君

I

私達の一行がパリに落着いたのは、七月ももう半ばをすぎたころであつた。苦しい熱風のイラク、シリアから、近東、バルカンの國々を經て歐洲に入つてからは、誰もホッとした氣持になつてゐた。三ケ月の旅の疲れも急に出てこゝに來てからは何をする氣もなくなつてゐた。

暑中のパリは割合にひつそりと靜まり返つてゐた。今年はどこも異常な暑さで歐洲全土は旱魃に苦しんでゐた。ロンドンのトラフアルガル・スクエーアの噴水はとめられて、ネルソンは高い塔の上から、ひからびた池を見下ろしてゐた。市内では芝生に水をうつことを禁ぜられた。パリはセーヌ河の水がかれて魚が浮いて流れた。その魚をとるべからずといふ禁令が出た。かういふ暑い夏に氣の利いた人間はたいがい都會を去つて、涼しい海に山に逃れ去つたあとだつた。光と影との、くつきりと濃い諧調を描きだす鈴懸の並木に、早い落葉が風に舞つて、眞夏のだるい靜けさが、街全體を眠氣の中に誘ひこんでゐた。疲れて休むことを欲してゐた旅の終りの私達には、靜かな寂しいパリが却つて氣安かつた。皆豚のやうによく眠つた。

さうした或る日の朝、私はセイロンのコロンボから一通の電報を受けとつた。差出人は輸入商協會で、一行が歸途コロンボに立よる時、大歡迎會と懇談會とを催す計畫を立てたから、是

非出席して貰ひたいといふ文面であつた。私はコロンボの輸入商協會といふのが、どんな性質とどんなメンバを持つ會か、その時にはまるで知らなかつた。行く先き〳〵であまり多くの會合に實は疲れ果てゝゐた私達だつた。それに一行はパリを最後に半分は米國廻りでわかれ去る豫定なので、人も少し、コロンボはキヤンデイ行きが計畫されてゐたので、時間が都合がつかぬからと丁寧な斷りの電報をうつた。

數日の後、私達はパリを去つてマルセーユに行つた。筥崎丸に乘船して見ると、そこにまたコロンボからの電報が待つてゐた。都合もあらうが官民共に熱望してゐる會合だから是非出席してくれといふのだつた。私はそれならば船中でゆつくり考へて都合をつけて見やうかと思つてゐた。船はナポリについた。上陸してヴエスビアスの火山を見物して歸るとまたコロンボからの電報だつた。返事を打たうと思つてゐるうちにスエズについた。そこにもまたコロンボ輸入商協會の熱心な電報が待つてゐた。こゝまで熱心な勸說をうけて斷れるものではない。私は何を犧牲にしても、輸入商協會とはどんな性質のものであるにしても、ともかくもその好意をうけやうと決心した。全部の出席は困難だが、實業關係のメンバ、四、五人でもいゝのなら喜んで會合に出ると感謝の返電を打つた。

八月六日の午近くに私達はコロンボに上陸した。出迎へてくれた東棉の廣瀨君に案內されて

一先づ同君のオフイスに落着きながら一切の事情をきいて見ると、私はこの會に出てきてよかつたとしみじみ感じ出した。

コロンボ輸入商協會といふのはこゝでの最も有力な財人を集め、しかも資格を嚴重にして會員は四十何人に限定してある。メンバには代議士になつてゐるものが多いので、經濟の最有力團體であつて、同時に民意を代表してセイロンの政治を動かす有力な團結を作つてゐる。この團體は日本への最上の好意を持つてゐる。五月七日英本國が植民地への割當制度を强制して邦品への壓迫を斷行すると、他の屬領、植民地はいづれもこれに從つたのに、セイロンだけは頑としてこれを承認せず、三ケ月のながきにわたつて反抗しつゞけた。しびれを切らした英本國が勅令とも見るべき特殊なオーダー・イン・カウンシルをもつて割當强行を命じたのが八月一日であつた。セイロンは反英運動にわき立つた。英品ボイコットが決議され日本とともに立てといふ空氣が漲り出した。その五日目に私達はこゝに上陸したので、けふの會合は、セイロン人と日本人と公式に多數集まつて懇談する未曾有の出來事だといふのである。英國人の市長も出るし、黑木領事も出席する。何しろ日本と結ばうといふ火の熱をもつたセイロン人の心からの歡待の會合であるし、コロンボ初まつて以來の出來事だからといふ廣瀨君の言葉であつた。

私は豫想もしなかつた意味をもつ會合に心を躍らせながら、グランド・ホテルの廣間で開か

れた歡迎會に出席した。さうして、そこで初めて輸入商協會の會長であり、セイロンの衆望を負つた名士で、日本びいきのわがフエルナンド君に會つたのである。

I

グランド・ホテルの階上の廣間には立派な宴會場がつくられて、控室には南國らしい籐椅子の凉しげに配置された中に、四、五十人のセイロンの財人達が、カクテールの杯を嘗めながら、私達を待つてゐた。

こちらが輸入商協會の會長フエルナンド君と紹介されて、初めて握手をかはした。肥つた溫顏の物靜かな中年の紳士であつた。ケンブリッヂを出て歐洲の生活をながく續けて來たといふだけに、英國流の教養の深い匂ひが立居の間にも氣持よくこちらに感ぜられてきた。

宴會が初まつた。私の右には黑木領事が坐り、左にはフエルナンド君、その隣にコロンボ市長ムルフイー氏が座をしめた。特に心をこめて趣向をこらしてくれたらしい日本畫のついたメニューを手にしながら、ずらりと並んだ會員を見ると、トルコ帽をかぶつたものと被らぬものとが入りまじつて、英國人らしいのは市長の他には一人二人ゐるかゐないかにすぎなかつた。デザート・コースに入つた。フエルナンド君が立上つて挨拶をはじめると、それまで食卓に一

緒についてゐたセイロン・デーリー・ニュース、オブザーヴアー、インデペンデントその他の新聞記者諸君は原稿紙を取出して斜にかまへ出した。速記者らしい人が鉛筆を澤山前に置いて用意を初めるのもあつた。大勢であるだけに何か物々しいやうな感じがしてきた。

われ等の天皇陛下への乾杯と、英國皇帝陛下への乾杯がすんだあとで、フエルナンド君は物靜かな調子で歡迎の辭をのべ出した。實は一通りの外交辭令の交換を豫期してゐた私は、フエルナンド君の演說がだん〳〵永くなるとともに、聲も高く、調子も張つて、鋭く變つてきたのに驚かされた。

「コロンボの市民は日本に對して滿腔の感謝の念を禁じがたいものであります。過去數年の世界的不況によつて、わが市民は慘憺たる打擊をうけて來ました。しかもこの大きな打擊にもかゝはらず、吾等は日本からの綿製品をはじめ安くて良い品物の供給を受けたことによつて救はれて來たのであります」

とフエルナンド君は、いかにセイロンの貧しい人達や、勞働階級が、邦品によつてその生活苦を緩和されたかを力說した。

「日本とセイロンとは過去數世紀にわたる密接な關係をもつて來ました。私は今でも、まだ子供の時分にわれらのアジアの兄弟である小さき日本が、大國ロシアを擊破したといふ報道

をきいて狂喜した當時の感激を忘れることが出來ません。歐洲大戰の當時、極東への通商路を安全ならしめ、東半球の平和を保たしめたのも日本海軍の力でありました」

とフエルナンド君が述べると、嵐のやうな拍手がテーブル全體から起つた。フエルナンド君は日本產業の進歩を說いた。現在の世界經濟の傾向を物語つた。さうして日本へ來朝して歡迎をうけた濠洲使節におよぼした末に

「濠洲は日本に對して賣る方が多くて買ふことの少い國であります。しかるにセイロンはその反對であります。私はかやうに多く買つてをるセイロン、しかもその國民が日本に對して滿腔の好感と友情をもつてをるセイロンに對して日本がも少しセイロンを理解し、セイロン、日本双方の共榮を計るやうに考へていたゞきたいのであります。」

といつた。私は謹聽した。セイロンもまた日本に經濟使節を送ることの必要を認めて輸入商協會は使節を送る豫定になつてゐるとも發表した。

熱を帶びたフエルナンド君の演說は私をひきずつて行つた。最近の英國の割當强制にふれたあとで

「私は一人の哲人めいた古い友達をもつてゐます。その男の生涯は波瀾をきはめた苦難の連續ではありましたが、彼はどんな苦しいことがあつても、なにごとも神の最大の惠みであり、

私にとつて最もよいことなのだと叫びつゞけてをりました。現在の暗澹たる狀態に對しても、私は同じ彼の言葉を思はざるを得ません。たとひいかなることが來やうとも、セイロンと日本と相結んで、進んでゆくならば、それは結局兩國にとつて最もよいことになるのを信じて疑はぬのであります」

と結んだ時、私はテーブルの一同と一緒に心からの拍手を送つたのであつた。

Ⅱ

私は立上つて感謝の言葉をのべた。セイロンの人たちが日本と日本品について完全な理解をもつてくれるのが何よりも有難いと率直に禮をいふた。たとひ日本品に對してどんな壓迫が來やうとも、われ〳〵は單に日本のためのみでなく、セイロンのためにもベストを盡す覺悟であるといふたら、みなして拍手してくれた。

私はそれで會は濟んだのだと思つてゐた。ところが私のあとからすぐに協會のセクレタリーでありフエルナンド君の片腕であるレヤル君が立上つて滔々と演說を初めた。すばらしい雄辯で强い演說だつた。割當がきまらうと、きまるまいと、われ〳〵は日本品から離れることは出來ない。われらが日本品を愛するのは對日好感のためだけではない、大衆の要望する品を安く、

しかもよいものを供給してくれるからにほかならないと卓を叩いて主張した。レヤル君が大拳手のうちに座につくと、また一人立上り、それがすむとまた立上る人があつた。會は丸で演說會にかはつた。だん〳〵いふことが激しくなつてきた。われ〳〵が割當に反對するのは、物が高くては買へぬからだ。引續く不況で貧しい大衆は安く供給してくれる市場だけが有難いのである。われ〳〵は好んで反英に奔るのではない。それは純然たる經濟問題だ。われ〳〵の反抗はわれらの罪ではないのである、と聲を張り上げて叫び出した。英人である市長のムルフイー氏は默々としてきいてゐた。並んでゐる記者諸君は夢中になつて演說の速記に忙しかつた。

私はいゝ會に出たと思つた。セイロンの聲を僞らず聞き得た感激は大きかつた。宴が果てるとレヤル君は會が特に東邦の珍客に贈るために用意したといふ見事な花の首飾りをくれた。それは大きな白菊の花を束ねたもので、わざ〳〵百マイルもの遠くから取りよせた高價なものであるといふ。清楚な花の一聯を首にかけると、故郷の秋を偲ばせるほのかな香が全身を包んだ。しみ〴〵とした嬉しい人の情が、涼しく心の中を吹きぬけて行つた。

私の家へ來てくれないか、お茶でも差上げたいからといふフエルナンド君の好意に甘えて一しよに自動車を驅つた。南國の强い光を受けて、夾竹桃や猿すべりの花が血のやうに紅く咲いてゐるヴイクトリア公園を通りぬけて、ちよつと途中で市長を訪問し、博物館をのぞいた。博

物館の陳列窓にはセイロンの古代の刀劍類が並べてあつた。それにはフエルナンド家所藏と札がついてフエルナンド君が昔からの名家の出であることを物語つてゐた。

靜かな深い木立の立並んだ住宅街にフエルナンド君の邸が建つてゐた。名家らしい立派な住居で、廣い前庭をとつた玄關の前には、白と紅の蘭の花が群がつて咲きほこつてゐた。氣持のいゝ應接間に入ると、物靜かな上品な夫人に伴はれて、二人の男の子が元氣よくはいつてきた。二人とも胸に、わが練習艦隊が入港した時につけたのだといふ、日章旗と軍艦旗を組合せた襟章をつけて、手に軍艦旗の小旗をふりながら少年らしい無邪氣さで握手の手をさしのべた。こゝにも日本に對する好意の表現が、私の心をうつのであつた。

「この子供は是非日本で教育するつもりです。精神の教育は日本をのぞいては他に學ぶべきものはありません」

とフエルナンド君はニコ〳〵しながらいつた。

香の高い茶を喫しながら、私たちは日本を語り、東洋を語つた。

コロンボから百マイルほどはなれたポロナラワといふところに、今から八世紀ほど前に建てられた古い傳說の碑がある。その碑の表にはセイロンの將來が豫言してある。それによると、セイロンは容易に獨りでは立てず、いろ〳〵の人たちに支配される。まづダーク・ピープルが

これを支配し、ついでジャイアントが百五十年支配し、それからスモール・アイズのものが支配すると記してあるさうである。不思議なことにこの八百年も前にたてられた碑面の豫言はそつくり當つてゐる。ダーク・ピープルはポルトガル人、次の巨人は英人、その巨人の支配する百五十年はこゝ一、二年でくるさうである。それなら次に代る眼の小さいものとは、誰が考へても日本人に違ひないといふのが、セイロン人一般の信仰であるさうだ。碑面の豫言は目の小さいものゝ支配を記したゞけで終つてゐる。だから目の小さいものゝ支配の下にセイロンは獨りで立つ輝かしい時を迎へ得るのだといふのが、これもセイロン人の一般の信仰になつてゐるのだといふ。

「面白い話ですね」と私は紅茶をのむことも忘れてきゝほれた。フエルナンド君は相變らずニコ〳〵しながら物靜かに語りつゞけた。どこから流れこむのか、床しい蘭の香の匂ひが部屋一ぱいに、ほがらかな親しみを漂はせてゐた。

賭博のジャワ

I

スラバヤもバタヴィアもジヤワの町は熱帶の陽をうけてあくまでも朗らかに明るい。光と影とのけじめが、くつきりと際立つて、地上に落ちるものゝ影は墨のやうに濃い。

二頭の水牛に曳かせた大きな車に、マンゴスチンや、バナナや、パインナツプルなどを山のやうに積んでゆく。水牛もノロ〳〵と歩くし、水牛を追ふ半裸の土人も眠さうに歩いていく。道ばたのマリーパンの丸い花が、月見草のやうに黃色く咲亂れてゐる垣を背にして、地上にあぐらをかいた果物賣が、うまさうな南國の木の實の數々をならべてゐる。サロンの更紗模樣が美しい女達が、頭に素燒の水がめをのせて通る。南國の夜の灯を神祕的に見せる電燈のシエードを澤山かついでいく男がある。シエードは小さなたらひほどにも大きく、紅に、薄紫に目のさめるやうな美しい彩りを見せてゐる。すべてかうした街の風景が、はつきりした光と影との交錯の中に浮び出してゐる姿は、南國獨特の美しい情趣である。

私はジヤワのはつきりした光と影を愛した。さうしてよく街を歩いた。だが、この明るい町にたゞ一つむやみにうるさいものがあつた。それは繁華な通りにきまつて群がつてゐる富籤の立賣であつた。街のヨタ者らしいもの、ルンペンのやゝ出世したらしいもの、さうした薄氣味

の餘りよくない男たちが、街を通れば、うるさいほど寄つてきて富籤を買へといふのである。實際それはうるさい存在であつた。

だが、聞いて見るとジャワ人にとつては、これはうるさい存在どころか生活の唯一の刺戟ともいつてよいほどのもので、誰もかれも夢中になつてゐるものらしかつた。この富籤は毎月一回、バタヴィアで抽籤する。一枚が十ギルダで、一等は十萬ギルダ當る。二等が五萬ギルダ、三等が二萬五千ギルダで、百ギルダの當りまである。一等が當れば二十餘圓のもとで、邦貨に換算すれば二十二、三萬圓にならうといふのであるから、ちよつと大きい。勿論官許の富籤であつて、ジャワ全島をあげて住民の血をわき立たせてあることを知らず、籤は毎月、全部賣切れる。地方の村などでは一人で一枚買ふことが出來ぬために、四分ノ一づゝ出し合つて一枚買ふ講のやうなものさへ出來てゐるところが多いさうである。

賭博心理を助長するかず〳〵の悲喜劇の話も盛んに傳はつてゐる。ソローはスラバヤから自動車で半日ほどの靜かな涼しい山地の町である。こゝには昔の王樣が殘されてゐて、古風な王宮もあり、古いジャワ人形に面影を止めてゐるその昔の武士も、一刀を腰にさして王宮のまはりを徘徊してゐる。そのソローの王樣があるとき富籤を偶然買ふと運よく當つた。二十二人とかの愛妾を擁して、御勝手元甚だ豐ならぬ王樣は、こゝに思はぬ財源を發見して悅んだあげく、

自來毎月熱心な富籤ファンとなつて根よく買つてゐたが、柳の下にどぜうは一度ゐたきりで大分損を重ねてゐるといふ話もある。

日本人で二萬五千ギルダの當り札を得た幸運な齒醫者があつた。すつかり有頂天になつたその人は、もうこんなところに出稼ぎをしてゐる必要はないと、凱旋將軍のやうな氣持で日本に歸つたが、さて日本に歸つて見ると急に他の女が美しく見えて、自分の女房が醜くなり、家庭爭議が昂じた結果、元も子もまた〳〵く間に失つて、槿花一朝の幸運兒が、天下の不運兒にかはつたといふ話もある。

悲劇の方は忘れられて、ぬれ手で粟のうまい話の方が羨まれるのが、射倖心理である。ジャワは今なほ富籤の大流行である。私はバタヴィヤやスラバヤの街を歩いて富籤を賣る店や、群がる立賣の多いのを眺めながら、十ギルダで十萬ギルダの誘惑はなるほど無理もないことだと微苦笑を禁じ得なかつた。ところが二週間近くジャワの各地を旅して行くうちに、こゝには、ひとり十萬ギルダの富籤だけでなしに、あらゆる賭博が土民の間に行はれてゐることを見せつけられた。賭博國ジャワの一面は私の心を重く暗くして行つた。

I

スラバヤにはいろ〳〵な大きな市場がある。雜貨市場、陶磁器市場、果物市場等々。そのいづれに行つて見ても大勢人が集まつてゐる。その集まる人を相手にして、さま〴〵の物賣りが出てゐる。赤や青や毒々しい色をした冷めたい飲物を賣るもの、パン、菓子の類を賣るもの、芭蕉の葉につゝんだ食べ物を賣るもの、喧々ごう〳〵たる市場の中はこれらの物賣りのために歩くのをさまたげられて、一層混雜させられる。私はある日、スラバヤの郊外に出やうとする川岸の大きな果物市場に行つて見た。南國の實りを豐に盛つたバナナや、マンゴーやマンゴスチンや、ドリアンなどの目のさめるやうな新鮮な色と、むせるばかりの芳烈な匂ひとを滿喫しつゝも、あまりの混雜に頭の痛むのを覺えて、急いで外に逃れ出た。

日覆ひのある內部と違つて、外は烈しいギラ〳〵する陽光の世界であつた。それでも木陰に立つと、椰子の並木を通つてくる川風が涼しく吹きすぎて行つた。私はホツとした氣持で暫くそこに立つてゐた。すると市場から少し離れた道の片側に、大勢の人が一かたまりになつてがや〳〵と騒いでゐるのを發見した。群集の眞ん中には鳩を一羽手にもつた男が立つてゐた。その男も皆の目も遙か向ふの空の方を一心に眺めてゐた。涼しい風がまた一渡り椰子の並木を搖がせて吹きすぎて行つた。するとどこかの中空からまた鳩が一羽舞下つてきて、眞ん中に立つた男の手の上に羽ばたきをしながら止まつた。群衆はそれを見ると歡呼の聲をあげて、今舞ひ下

りた鳩を取りかこんで、何か叫び出した。見てゐても私には何のことか一向わからなかつた。「アレも賭ですよ」と案內のアルメニア人が教へてくれた。何でも雌鳩を手元に置いて、雄鳩を何羽か遠くへ連れて行つて、放つ。雌鳩戀しさから競爭して一生懸命に飛び戻つてくる。どの鳩が一着になるかで賭が成立する。何のことはない空中の鳩の長距離競走の賭なのである。今見たのは、その第一着の鳩が歸つてきた時の群衆の歡呼にほかならなかつたのである。

街頭の富籤賣りから鳩の競走まで、何と賭ずきな住民たちであることかと感心させられた私は、まだ〳〵いろんな賭があると聞かされて驚いた。一行中の二、三人の人は夕方から郊外にドライヴをして鬪鷄を見て來た。どうして大變なものですよ、訓練がつんでゐると見えて、すばらしく强い鷄が多いし、賭する人の目もすわつてゐますと皆口をそろへて話してゐた。

支那で今日も行はれてゐるこほろぎを喧嘩させる賭も、こゝでは盛んに行はれてゐる。何もかも賭である。

刺激の少い生活、しかも地道にあるいても大して金の儲かるあてのない貧しい生活、かういふ生活を背景にして賭が流行するのは、一面から見たら無理のないことであるかも知れぬ。

今日のジャワの土民の生活は疲れ果てゝゐる。打續く產業の不振は、土民の生活を石にひしがれた雜草のやうに頼りないものにしてしまつた。自動車の運轉手は私にこぼしてかういつた。

「砂糖の景氣のいゝ今から五年前には、タクシーも一時間二十五ギルダになりました。だから私達も一足二十五ギルダもする絹の靴下をはいて、女の子にも大したもて方をしたものです。それがこのごろではガソリン代はその時より高くなつて、タクシー料金は一時間たつた三ギルダになつたのですが、それでも乘り手がありません」と。

税は遠慮なしに重く、一日に二十セントか三十セントしかとれない貧しい土民の勞働者にも、一年に一人當り三ギルダの人頭税がふりかゝつてくる。生活が暗く、頼りないものになるのは當然である。

私はジャワに漲る賭博熱をいゝの悪いのと批評する前に、まづその背景をなす土民の悲惨な生活を思つて暗然とした。

A老人の家庭

I

午後四時三十分、クロイドン行きの汽車は辷るやうに靜かに、ヴイクトリア、ステーションの構内から發車した。一等はガラ明きで私一人しか乘つてゐない。樂々とクツションの上にからだを伸ばしながら、私は小供のやうな心跳りをもつて、これから訪ねて行かうとするA老人とその一家の人々の上を想つた。

想ひ出は十三年前に遡る。私はA氏の家に二年間暮した。ロンドンに着いてから不愉快な猶太人の主婦の經營してゐる日本人の大勢ゐる下宿屋に愛憎をつかした私は、緣あつてA氏の所に、家庭の人として置いて貰ふやうになつてから、初めて落付いた勉强が出來るやうになつた。A氏夫妻とオリフといふ十一、二の可愛らしい女の子との靜かな家庭で、誰もかれも親切で氣持がよかつた。私は小さいオリフと一所に、A氏のことをダツディと呼び、夫人をマザーと呼んで、夜も晝も全く家庭の一員としての生活を送つた。夏になると一家中で涼しいアイル、オブ、ワイトに避暑をした。クリスマス、イブにはオリフの友達の可愛らしい女の子達と一所に、童心の昔にかへつて他愛もない遊戯の夕も過した。日曜の午後は家中でサレーの丘にハイキングをした。二年の後ロンドンを去つてアメリカに渡る時には私達はお互に涙を流した。それ以來

いつか知らぬ間に十三年といふ永い年月が流れ去つてしまつたのだ。さうして私の身境にもいろ〳〵の變化が起つた。東京を去つて大阪に移るやうにもなつた。客心漸く衰へて、鏡中に白を見出すやうになつては、人を見る心も違つて來れば、世の中を眺める目もいつか變つてきたが、ロンドンでのA氏の家庭で過した年月はいつまでも懐しい思ひ出として心の隅にかはらず持つてゐた。しかし私自身の變つた以上に世の中はもつと大きく變つた。日本も變れば、英國も變つた。A氏も老ひたに違ひない。アノ一家が無事に暮して居ることだけは手紙でわかつてゐても、表面に見えぬ變化がどれ程かは無論わからぬ。懐しい昔の幻想を抱いて、はる〳〵と十三年ぶりで來て見て、果してどんな印象をうけることだらう。

私はロンドンに着くとすぐA氏の所へ手紙を書いた。すると折返し返事が來て、夢かとばかり驚いたといかにも懐しさうに書いてきた。金曜の午後に來てくれないか、オリフは六時過ぎでなければ歸らぬが、私はいつでも一日中ゐるから勝手な時に來てくれ、晩食は必ず昔のやうに皆と一所に食べてくれるやうにとも書いてあつた。私にはロイヤル、エキスチエーンジに勤めてゐる筈のA氏が、一日中家に居るといふのがわからなかつたが、或はもう老年でやめたのかも知れぬと考へて、指定の日の午後、ヴイクトリア、ステーションから、かうして汽車に乘つたのであつた。

汽車は急行ではないので一つ一つの驛にとまつて行つた。これから訪ねるA氏の家の思ひ出をそれからそれへと辿りながら窓越しに動いてゆく景色を眺めた。今にも泣き出しさうだつた空はとう〳〵雨になつて、暮れるに早いロンドンの郊外は一面に灰色に塗りつぶされてゐた。美くしい並木に圍まれた廣い牧場、全く同じ構造でいくつも立並んだ小住宅の裏庭の花園、十三年前に毎日のやうに見た汽車の窓からの風光が、そのまゝに記憶を再現して、目の前をすぎて行つた。懐しさが油のやうに心一ぱいに擴がつた。

三十分足らずでノーベリーに着いた。汽車を下りた私は、以前とは違つてすつかり廣くなつたプラットホームと、いやに大きく立派になつた改札口を通つて外に出た。そこは一寸した廣場になつてゐてハイヤーの自動車が四五臺並んで客を待つてゐた。私は一寸狐につまゝれたやうな氣がして思はず立すくんだ。十三年前のノーベリーにはハイヤーの自動車などはどこを探しても一臺もなかつた。それが今では見違へるやうな近代的の街の光景を見せてゐる。

私は大通りをコツ〳〵と歩るき出した。以前の記憶とはおよそ縁の遠い新らしい大きな建物がずつと立並んでゐた。阪神國道に立並ぶガソリンスタンドと同じやうなモダーンな建物、立派な活動寫眞館、すばらしい大きな書店、コオペラチブ、ソサイエチーの堂々たる建築——すべて以前になかつた新らしいものが兀として立並んでゐる。大した變化である。ロンドンの街

が僅かにキングス、ウエーに見なれない新らしさを見せた位で、あとはどこへ行つても昔の通りの姿を保つてゐるのに安心したやうな氣持でゐた私は、ノーベリーへ來て、郊外の變化のおそろしさに全く驚かされてしまつた。それはもう郊外の村ではなくて立派な現代的の町への變貌に他ならなかつた。

一二町歩るいて右へ曲れば靜かな住宅の立並んだ小徑があつて、その中程にA氏の家があるはずであつた。だが、いつまで歩るいてもその小徑が見當らなかつた。私は向ふから買物籠を手にした近所の奥さんらしいのが來るのを見かけて、尋ねるアベニューの道をきいて見た。その奥さんはにべもなく知らないと答へてサツサと行きすぎた。私は少し途法に暮れてしまつた。また少し歩るいてから小路小路を見て廻ると、尋ねる小徑が、こゝばかりは昔の通りに靜かに雨の中に長い楡の並木を見せてゐた。さつきの奥さんに聞いた所からさう遠くもないのに、何故知らないと云つたのだらう。以前はこの村で私の顔馴染でないものは無い位に大がいは見知つたものばかりで、皆親切だつた。年がたてば住む人も違ふ。村の氣風も違つてくる。私は何だか心細くうら淋しいやうな氣持がしてきた。

雨は夕暮の空から蕭々と降りつゞいた。外套を着てこなかつた私は、首をちゞめながら、大急ぎで小徑の補道を曲つて行つた。

I

門口の呼鈴を押すと待ちかまへてゞもゐたやうな足音の氣配がして、扉が内からあいた。

「よう來てくれた。けふは待ちつゞけてゐたのだ」

とA氏が悦しさうに固く手を握りしめた。あたゝかい手であつた。A夫人も夫のうしろから昔の通りのやさしい笑顔を見せてゐた。

客間に入つて改めて久しぶりの挨拶をしたあとで、しみ〴〵と眺めると部屋は昔の通り少しも變らないが人の姿はかはつた。A氏はもうすつかり老人になつて髪などはあらかた白く變つてゐる。二年前に大病をして勤めも止めてしまひ永い間病院生活をした。此頃ではすつかり病氣はよくなつたが眼がわるくなつてしまつたと、しみ〴〵と語るA氏のからだ全體に爭へない衰へが見えてゐた。嘗て一所に山を十里も歩るいて、歸りに酒場でウヰスキーをなめながら、マクドナルドを罵り、ロイドジョーヂをけなしつけた當年の面影はもうすつかりなくなつてゐた。私は懐しい昔のまゝの長椅子によつて、昔の通りの調子で語り合ひながら、心の片隅に人生流轉の冷めたく暗いものを感じてゐた。窓ガラスから見る小庭の黄色い花の上に夕暮の雨が、音もなく降つてゐるのが見えた。

夫人だけは元の通りに元氣がよかつた。

「きのふの新聞に、あなたの寫眞とホテルのレセツプションでなすつた演說のことが出てゐましたが、オリフが寫眞だけで見て、いきなりミスター、シモダだと發見して敎へましたよ。十三年前とちつとも變りませんね。白髪なんか少しもないぢやありませんか」と私の顏を見ながら笑ひかけた。私は撫然として頭をかいた。

そのうちにオリフが外から歸つてきた。雨外套をぬぐとすぐに客間にとびこんで悅しさうな黃色い聲をあげた。私はびつくりして立上つた。目の前に立つて笑つてゐるのは母親よりもずつと丈の高くなつた健康さうな立派な娘だつた。

「もう二十五になつて私より二インチも高いんです」と夫人が目を細くして笑つた。

私の腕にブラ下つてはチョコレートを買つて貰ふのを樂しみにしてゐた小さな女の子、人の勉强してゐる部屋に入つてきては、膝の上に腰をかけて化物のやうな自由畫をノートに描いてゐた子供、そのオリフと今桃色の派手な着物をきて、胸に成熟した女の乳のふくらみを見せてゐる此娘とが同一人だとはどうしても考へられない。A氏の衰へを見てもそれ程に感じなかつた十三年の時のへだゝりを、私は今度こそはつきりと見せつけられたやうな氣がした。二十五になつてと母親に云はれたオリフは、最初のうちは少しテレたやうな顏をしてゐたが、すぐに

はしやぎ出して小さい時の話をしやべり出した。おかしなもので、少し話をしてゐるうちに二十五の若い娘は十二三の女の子と少しも違はない感じになつてきた。今ではロンドンのある大きな自動車會社の事務所に勤めてゐるのださうだが、同じ所につとめてゐる若い男と、今かゝつてゐるロシヤ舞踏を三度も見に行つたなどゝ面白さうに話し出した。私は久しぶりでのんびりした氣持になつてきた。

夕飯の仕度が出來て食堂に入つて見ると、私の好きなダッフオーディルの花が思ひきり澤山活けて食卓の上に置いてあつた。昔を忘れずにゐてくれる夫人の細かい心遣ひが、しみ〴〵とこちらの胸に通つてきた。ラム酒とエールに御馳走の鷄を食べながら、私は永い忙しない旅の途中で家庭を取もどした安易な氣持になつてゐた。

食事がすむと私達は昔さうであつたと同じやうに、客間に引返して雜談の時を過した。私とA氏は長椅子によつて煙草をふかし出した。夫人とオリフとは刺繍の作りかけのものを持つて仲間に加はつた。明るいシェードをつけた電燈が、昔のまゝの壁間のロンドン塔のエッチングを、眠さうに三十分毎に音樂を奏する古い置時計を、マントルピースの上の支那の花瓶を、柔らかい光の中に浮き出させてゐた。

A氏は昔から政治談が大好きだつた。お互に煙草をのみながら別れてからの共通の友達の消

息や、私の經てきた旅の話などをして居るうちに、いつか話は時局談になつてしまつてゐた。永い病で衰への見えてゐるA氏は、好きな話になると見違へるやうに元氣になつて、頻りに紫の煙を部屋中にこもらせ出した。A氏は散々にヒットラーをこき下ろした末に、米國も英國もすべてを引くるめて世も末だと云ひ出した。

「私はもう世の中がわからなくなつてきた。將來は全く未知だ。何もかも變つてきたが、皆惡るく變つてしまつてゐる。こゝなども君の居た頃は實に靜かないゝ所だつたが、もう靜かどころか實にいやな所に變つてしまつた。私はオリフが結婚でもしたら、どつかもつと靜かな所に移るつもりでゐる。實際こんな所にはもう住んで居られやしない。結婚と云へば今の世の中の惱みは無用なものが多すぎると思ふね、その中でも教育と小供が多すぎる。これが一番いけないことなのだ。皆が本當に高い教育を受けるのならいゝが、皆が少しばかり智識が出來るものだから世の中が間違つてくる。ツー、マッチ、エヂユケーションとツー、メネー、チルドレン。これが今の世界の惱みのもとだと私は考へる。オリフだつて結婚するのはいゝけれど小供でも澤山生むんだつたら私は心から悲しくなるね」

とA氏はオリフがもう小供も十人も生んだやうな苦々しい大げさな表情をした。

「町の風俗だつて君何といふことなんだ。ロンドンを歩るいて君はどんな氣持がした。若い

女が唇と爪を眞紅にして、あれは何といふ醜態なんだらう。私はオリフには絶對に口紅なんかつけさせないことにしてゐる」

しきりに紅い糸で草花模樣の刺繍かなんかしてゐたオリフは、母親と顏を見合せてクスリと笑つた。少し興奮氣味のA氏は青白かつた頰を赤くして、盛んに今の若い女と男を罵りつゞけた。

「日本だつて此頃はロンドンと同じですよ」と私は云つた。

「いけないな。どうしてこんないやな世の中になつてしまつたんだらう。このノーベリーだつて今では君のゐた頃とは違つて、社會主義的の傾向がどこもかしこも強くなつてきて、住んでゐてもたまらなくなつてくる。それで稅ばかり無暗に重いんだ、一體、私達のやうな靜かな、保守を樂しむものはどこへ行つて住んだら平和でゐられるのだらう」

さう云つたA氏は心から淋しさうな顏をして大きな溜息をついた。私は時勢から遠く取のこされて、いら〳〵した日夜を送つてゐるこの衰へた老人を見て、どう慰めの言葉も出なかつた。さうしてまた、古い傳統に生きて親代々の大きな時計などを大事に守つて生きてゐる英國の家庭の中には、こうした悲しみと、どう癒しやうもない惱ましさを抱いて、現代を見てゐる人達が澤山ゐるのではないかと考へた。

窓ガラスを通して見る外はすつかり黑い夜になつて、時々雷がキラ〳〵と光つてゐた。

Ⅲ

古い置時計が眠さうに十時を打つた。汽車の時間が迫つたので私は立上つた。A氏一家の人は頻りに名殘を惜しがつたが、私も時間をしばられた旅であつた、さうゆつくりもしてゐられなかつた。

玄關へ出て見るとひどい雨の音がきこえた。夫人はA氏の雨外套を持つてきて、辭退するのを無理に私に着せた。狼が衣をきたやうに手のさきまで袖が來るのに、夫人はすつかり良く合ふと云つて手を叩いた。すべてが好意から生れた愛嬌であつた。私は少しばかり感傷的な氣持になつて、これも借りた洋傘をさしかけながら、夫人とオリフとに代る〳〵固い握手をした。恐らくはもう此人達を見るのもこれが最後であらう。

外へ出るとA氏がどうしても停車場まで見送るのだと云つて、嚴重に雨の用意をしたいでたちで跡を追つてきた。病氣上りの身體で、まして雨の降る中を、そんな無理をしないやうにといくら辭退しても承知しないので、私は仕方なしに並んで雨の中を歩るき出した。

小徑を曲つて大通りに出ると、舗道の雨が往來の自動車のヘッドライトで鏡のやうに光つて

見えた。五六分も歩るくと活動寫眞館の前に出た。これも私がA氏の家に居た頃には無かつたもので、すばらしくモダーンな建物がまるで晝間のやうに往來一ぱいに光の浪を漂はせてゐた。

「私は活動寫眞は大嫌ひだから、こんな所へも來たことがない。活動も古典ものだけはいゝ。いつかダンテのものをロンドンで見たことがあるが、それだけは本當によかつた。こゝらあたりでは見るも恥しいやうなものばかりだ。もうこゝも駄目だ、早く引越してしまはふ」

とA老人は自分がまだこゝに住んでゐるのが、私に對して大きな恥辱でゞもあるやうにぶつ〳〵と口小言を云つてゐた。

停車場につくと大して待つ間もなく汽車が入つて來た。夜も遲くなつた郊外の雨の停車場では、乘るものは私一人だけだつた。

私は窓から半身出してA老人と固く握手した。

「ではお大事に、また會ひませう」と私は云つた。

「本當にもう一度會ひたい。今度は滯在が短くてどうにもならないが、是非もう一度來てくれないか、私の生きてゐるうちに」

A老人の聲はしんから淋しさうだつた。私はやせてガサ〳〵の大きな手を固く握りしめながら

水のやうにひやゝかなものが、心をしみ透つて行くのを感じた。

汽車は動き出した。窓から首を出して雨にぬれ乍らプラットホームを見ると、二人分の傘と外套をかゝえて、片手でハンケチを千切れる程ふつてゐるA老人の姿が見るまに小さくなつて無限の夜の闇の中に溶けこんで行つてしまつた。

白と赤

I

食堂から歸つて狹い客車の自分の坐席に腰を下ろすと、ガラス窓越しに外は一面の闇となつて何も見えなくなつてゐた。昨日の夜イスタンブールを出た此國際列車は、丸一日靜かなバルカンの野を奔りつゞけて、今もブルガリアの平原を西へ西へと奔りつゞけてゐるのである。

私はポケットから小さな香水の瓶をとり出して見た。ムハメットの寺院の塔に似た木製の外箱には燒繪で花模樣が美くしく描かれて、紅や青の素朴な色彩がほどこしてある。これは晝間ブルガリアの首府ソフィアに四十五分間の長い停車をしてゐた間に、驛の賣店で買つたものであつた。塔の丸屋根に似た首の所をねぢつて明けると中から小さな細長いガラス瓶が出てきた。電燈にすかして見ると黃金色をした美くしい液が光を吸つて澄み切つてゐる。鼻に近づけるとほんのりとすばらしい良い匂ひがする。それは化學的に作られた人工の匂ひではない。野に咲く薔薇の自然のまゝの匂ひである。ブルガリアの丘は、野は、夏になると一面の薔薇の花で彩られる。その花を摘んでしぼつた匂ひの精がこの小さな瓶の中に集まつてゐるのである。私はなすこともない永い汽車の中の無聊さから、寶石のやうな小さい香水の瓶を愛撫しつゝ、自然の薔薇の花の香を懷しんだ。けふの晝間通つた沿道の野には向日葵の花がゴッホの繪

白と赤

色く大きく澤山に咲いてゐた。これも油をしぼるし、種は牛の飼料にするのだといふ。畑には牛が耕作につかはれてゐた。夏草を刈つた丘には、白地に紅や青の美しい刺繍をした着物をきた百姓の娘たちが、長い柄のついた三叉で器用に草の束を牛車の上に積みこんでゐた。すべてが長閑な一幅の繪であつた。私は香水の花の香をかぎながら、日の當るバルカンの野に住む娘達の健康な自然兒らしい生活を想つて見た。芳烈な匂ひが誘ひ出す夢のやうな境地と、遠く國をはなれて旅をするものゝ、そこはかとなきほのかな鄕愁とが入まじつて、一抹の快い淋しさが心の中にひろがつて來た。

うれひつゝ丘に登れば花うばら

私は何といふこともなしに、蕪村の句を繰返し口づさみながら、香水の瓶を手から放さずに居た。

汽車は闇の中を、かなりの速力でどこまでも奔りつゞけて行つた。

九時四十分、ユーゴースラヴィアの首都ベルグラードのがらんとした大きな停車場の構内へ、汽車は疲れ果てたやうに汽笛を鳴らしながら靜かに入つて行つた。

私達の一行は、あき〳〵した永い車中から解放された輕い氣持で驛の表へぞろ〳〵出て行つた。クック社から萬端の用意をとゝのへて、ホテルまで送つてくれる自動車が待つてゐることゝばかり考へてゐた私は、それらしい車の影も見えぬのにまづ失望した。停車場の前は暗く、夜の風は肌寒かつた。

わざ〳〵出迎へに來てくれてゐた日本の名譽領事は品のいゝ老紳士で、自分で停車場の者を指圖して自動車の心配や、一行の荷物など、何くれとなく世話をしてくれた。私達は土地馴れないために何もかも名譽領事の好意にまかせて、默つて、寒い風の吹く、眞暗な驛の前に立ちつくして車の來るのを待つてゐた。

日本人が十二三人もまとまつて集まつてゐる光景はこゝでは相當に珍らしいらしく、夜だといふのに物好きらしい人達がいつか私達を取まいてゐた。その人垣を押わけるやうにして一人の肥つた男が私の前に出てきた。さうしてミスター、シモダですかと云ひながら手を差しのべた。實は私はその男がさつきから氣になつてならなかつたのである。停車場に汽車がついて車から降りると同時にその男は何か用ありげに私のそばについて廻つてゐた。見た所いかにも人の好ささうな四十男ではあるが、粗末な垢づいた黑服をきてみすぼらしい感を與へる。さうしてその男のうしろには二人の黃色い顏をした丈の低い男が、これも汚たない服をきてオド〳〵してついて廻つてゐる。私は最初これは日本人かなと思つた。黃色人種であることは間違ひがないからである。しかし同胞であるならば遠慮なしに話しかけたらよささうなものだのに、肥

白つた白人も二人の黄色人種の男も、いやにオヅ〳〵して私のあとを追つてゐるだけで、一向に
と名乗りを上げて來ないのである。私には全くこの正體のつかめぬ三人の男が何の目的で私につ
赤いて廻るのか見當がつかなかつた。しまひには少々薄氣味わるくさへなつた。その男が、自動
車を待つてゐる間にいよ〳〵ミスター、シモダですかと云つて前へ出てきたのである。私は今
更のやうに一寸警戒する氣持でその男の手を握つた。二人の黄色い顔をした男は啞のやうに默
りこくつて、男のうしろから私を見つめてゐた。

その男の英語は、いかにも外國人の英語らしくタド〳〵として上手でなかつた。何でも新聞
で私達の一行や、私の名を覺えて、かうしてわざ〳〵會ひに來たのだと云つた。ミスター、シ
モダといふアクセントが間延びがして、いかにも滑稽に響いた。

「何か私にご用があるのですか」と私はぢれつたくなつて聞いて見た。

男はいやにゆつくりした言葉でネチ〳〵と用を云ひ出した。きいて見るとこのベルグラード
から少しはなれた所に佛教の寺院がある。同じ佛教徒である遠來の日本人が來たのであるか
ら、是非明日はその寺院を見に來て貰ひたい。一所に連れてきた二人の男は蒙古人で、その寺
に關係のあるものであるといふことであつた。

「折角ですが私達の旅行は日程がきまつてゐて、最初計劃した以外の所へ行く餘裕はないと

思ひます。明日になつて時間の繰合せがつけばそのお寺へ參つてもいゝのですが恐らく參るこ
とは出來ないでせう、あしからず」と私は答へた。

男はいかにも殘念さうに頻りにその寺への道のりや、寺の歴史などをくど〳〵と喋り出し
た。私は少しうるさくなつた。それよりも早くホテルに落付いて一風呂入つて寛ぎたかつた。

そこへ私達の爲の自動車が四五臺やつてきた。

疲れてゐるから失禮と云つて私はすぐにその自動車に乘りこんだ。

自動車はヘツドライトに夜の塵をキラ〳〵と光らせながらすぐに奔り出した。三人の男はま
だ未練ありげに、そこにつゝ立つたまゝ私達を見送つてゐた。

I

ロイ、セヴィア、ホテルの私の部屋はカリメダン公園に面してゐた。ぐつすりと寢込んだ翌
白日の朝、起上つて窓のカーテンを引くと、薄ぐもりした空の下に公園の立木が鮮かな綠を漂は
せてゐた。もう初夏らしい白い服をきた娘達が小鳥のやうに公園の小徑を散歩してゐた。遠く
と向ふの森の上に白地に赤で線を描いた旗が、何かの目印しのやうにヒラ〳〵と朝風にひるがへ
赤つてゐる。

白　私達は午前中の豫定にしたがつて、街と名所を見て歩るいた。古いカセドラルを出て美術館
と　に入つた。いかにも小さな建物で並んでゐる繪にも大したものはなかつたが、その中でこの國
赤　の生んだ現在の彫刻家、ジヤン、メストロヴイツチの作品だけは私達の目を見張らせるに十分
だつた。巨大な若い娘の像などは、はち切れるやうな肉體に若い生命が脈をうつてゐる。胴よ
りも太い股の表現は歌麿を思ひ出させもした。

キング、ピーター街の町の眞ん中にある宮殿は私達には宮殿らしい氣持を起させなかつた。それでも兵隊が拔劍していかめしく鐵の門を護つてゐた。伯林のウンター、デン、リンデンそのまゝの大通りにある新設のコムマーシヤル、ミュージアムをゆつくりと見て外に出ると流石に疲れを感じた。もう晝に近くなつてゐた。

ホテルに着いて自動車から下りて扉をあけると、廣間に七八人の客が集まつて新聞を見たり煙草を吸つたりしてゐたが、私が中へ入るといきなりその中の二三人が立ち上つて近よつてきた。いかにも待ち構へて居たといふ恰好であつた。見るとそれは昨夜停車場で私を惱ませた太つた男と、黄色い顏をした蒙古人の連中であつた。オー、ミスター、シモダと變なアクセントの、猫なで聲を出して手を差出す太つた男の、ニヤ〳〵と笑ふ顏を見ると、私は何んとなくうんざりしてしまつた。恐らく私は苦虫をつぶしたやうな露骨に不愉快を示した表情をしてゐた

に違ひない。しかしその男は一向私の表情などには氣もつかぬやうな樣子をして、一寸の間でいゝから話をしてくれと云つた。ネチ〳〵と圖々しい調子である。疲れてゐた私はひまがないから一寸の間だけと無愛憎に云ひ切つて、仕方なしに明いてゐる大きな椅子に腰を下ろした。太つた男が私の前に腰をかけると、二人の蒙古人は啞のやうに目ばかり光らして、矢張りそのそばに並ぶのだつた。何となく無氣味ないゝ感じのしない連中であつた。

男は、また、午後から佛教の寺院を都合して見に來てくれないかと前の晩と同じやうにネチ〳〵と變な英語でくどく繰り返した。私は時間がないからとても行くことは出來ないときつぱりと斷つた。

「ではもう用はないのでせう。私はこれから食事をしなければならないから」

と私は椅子から立上つた。

白　太つた男は、いかにもあはてたやうに私をひきとめて、もう十分でいゝから時間を貸してく
と　れないかと云ひ出した。そのいかにも哀願するやうな可哀さうな調子をきくと無下にも斷りか
赤　ねる氣の弱さから私はまた元の椅子に腰を下ろした。今度は何を云ひだすつもりなのだらうと
多少の興味もわいて來ないではなかつた。

「ミスター、シモダ、實は祕密でお話しがしたいのですが、あなたの部屋へ參つてはいけな

いでせうか」といかにも人に聞かれるのを憚るやうに、あたりを見廻し乍ら、ヒソ〳〵とさゝやいた。私は何もこんな男達と私室で祕密に話をする義理などはない筈である。

「私の部屋にはまだ友人も一人居る。何もこゝで話せないやうなことなら強いて聞く必要もないのだから、止めてくれたらばいゝ」と私は面倒臭くなつて坐を立たうとした。その樣子を見て男は仕方がないといふやうに聲をひそめて要件を話し出した。聞いて見るとこの男は赤に祖國を追はれて、この國に亡命してゐる白系の露人だつた。同じ仲間が、モンゴル人に五百人白系露人は一萬人もゐて、迫害の手をのがれて移住はしてきたものゝ、こゝには食ふ道がなかつた。赤き祖國には歸れず、放浪の旅先きでは生活が出來ない。彼等は何れもその日〳〵に窮迫してゐるのだと、男は泣き出しさうな聲を出して訴へた。

「私達は何とかして生活の糧がほしいのです。誰れかに救つて貰ひたいのです。幸ひ私は新聞であなたのことを知りました。バルカンに進出しやうとする、あなた方の經濟的の使命から考へて、調査、研究がお進みになれば、何れこの國にも日本は通商上の何等かの機關を設けられることにもなり、代表の方が來て新らしく仕事をお初めになることになるのだらうと思ひます。さういふ時には、是非私達のことを御考へ下さい。何でもいゝのです、どんな仕事でもいゝのです。何にでもいゝから使つていたゞきたいのです。うち明けて申し上げると一萬人の移

住してゐる露人の中には學問や技術のある者が非常に多いのですけれども、どうにもその力を使ふ道がないのです。もし日本で私達にこゝでやれる仕事を與へて下さるなら、食へるだけの給與で、必ず立派な仕事をなしとげることだけは御受合ひ出來ると信じてゐます」

さう云つた男の顏には泣き出しさうな訴への中に、眞劍なものがはつきりと現はれてゐた。私は矢張りいつか男の言葉に動かされて、聞き入つてゐる私自身にきがついた。彼等の苦るしい立場はよくわかつた。國を去つて三巴遠きを思へば、懷鄕の涙は遊子の袂に滿つるといふ。況して歸るに國なき亡命の人々が、異鄕にあつて、見ず知らずの異國の客に哀れみを乞はねばならぬ心境を考へると同情の念に堪えなかつた。しかし彼等が要求するやうなことに對しては、私には何ともはつきりした答への出來ないものであつた。私は氣の毒ではあつたが、はつきりと私の自身の旅の使命を說明した。これからユーゴースラヴィアに日本の商社が設けられる日が來るかどうかは私にもわからない。私自身、經濟の實務には關與してゐないものだから何ともいたし方がない、しかし日本へ歸つてから、何かそのやうな企てのあることでもきいた時には、あなたから聞いたことは傳へることにするからと云つた。

男は少し失望したやうな樣子だつた。溺れる者が藁でもつかむやうに、私の口から良い保證でも受けるつもりだつたらしい彼は、いかにもがつかりしたやうな淋しさうな顏をした。私は

白と赤

氣の毒になつた。初めはいやな奴だと思つてゐたネチ〳〵した猫撫で聲も、その生活の背景を考へると寧ろ同情したくなつてきた。私はいろ〳〵と慰めてやつた。同情に餓えてゐるらしい彼は悦しさうな顏をした。

「いろ〳〵有難ふございました。御食事前を、いつまでも御邪魔をしてすみません。どうか日本へ歸られたら、困つてゐる吾々のことを同情心の深い御國の方に話して下さるやうに御願ひします」と云つてその男は立上つた。それまで依然として啞のやうに、言葉がわかるのかわからないのか、石のやうに默して私達の話を聞いてゐた二人の蒙古人も、よろしく賴みますとでもいふやうに揃つて頭を下げた。

別れ際に太つた男は私に名刺を渡した。それには、名前の下にわざ〳〵ロシア移民と自署して、裏を返すと、ハイ、コムマーシヤルインスチチユート。ベルグラード大學。と書いた上に英、佛、獨語に堪能。殊に露語並にセルビア語は完全なる達人と註が入れてあつた。

Ⅱ

晝から私は短い滯在の間に出來るだけ調べもしたいと考へて、日本の名譽領事館を訪問に出かけた。玄關を出やうとすると土地の新聞記者が七八名押しかけ話をきゝにきた。私は本當に

忙しかつた。すまないが夕方五時頃には歸れるだらうと思ふから、その時に會へたら會はふと云つて、すぐにホテルを飛び出してしまつた。

私には忙はしい一日であつた。訪問先に思つたより時間をとつて夕方ホテルに歸ると、もう時計は六時近くになつてゐた。

客間を見渡すと、五時頃までは新聞記者連が待つてゐたといふが、大がいはあきらめて歸つてしまつたさうで、たつた一人殘つてゐたのだといふ男が、私の姿を見るとつか〳〵と近よつてきた。見るからにキビ〳〵としたスマートな若い記者だつた。きちんと着こなした服がいかにもぴつたりと身について、利口さうな眼がくり〳〵とよく動いた。愛嬌よく笑ひながら差出した名刺にはAといふ名の下に、ロシア系の新聞の名が記してあつて、ニューヨークの大きな社の通信員を兼ねてゐることもわかつた。疑ひもなく彼は赤きロシアの鬪士に相違なかつた。私は晝、同じこの客間で會つて話をしたあの物あはれな白系露人の印象と較べて見て、餘りにも甚しい相違にまづ驚かされた。

白と赤

「日本とロシアと開戰すると思ひますか」

客間の椅子に向ひ合つて腰を下ろすと、いきなりAが口を開いて質問した言葉がこれだつた。聰明らしい目に一寸皮肉らしい色が浮べられてゐた。

白　「君もジヤーナリスト。僕もジヤーナリストだ。その質問は私の方からも聞きたいことだ。
と　君はどう思ふかね」と私は反問した。彼はニヤ〳〵笑つて何とも答へなかつた。
赤　Aはすぐに話題をかへていろ〳〵の質問を矢つぎ早に出した。主として最近の日本の財政經濟に關することで、軍事豫算の內容などは相當に研究してゐるらしく、陸海軍費の總豫算に對する比例などは、すべて正確に覺えてゐて質問の中にまぜてゐた。軍需工業の旺盛になると共に失業者の減退はどの程度になつたのかとか、一般工業と特殊軍需工場との勞銀の差はどんな程度かとか、仲々玄人らしい面白い質問を出した。對手が同業のものであるといふことゝ、日本に對する經濟智識がかなりに突込んだ所まで豐富に持たれてゐることゝの爲めに、私は油斷のない應答をせねばならなかつた。しかしそれだけに愉快だつた。話は無暗に多方面になつて米國のNRAや銀政策にまでとんだ。米國の財界はもつと回復するに違ひないなどゝ、いかにも米國紙の通信員らしい意見をAははいた。私も米國のことなら何とでも自由の批評が出來るので勝手な意見を喋り散らした。時はズン〳〵すぎて行つた。
「大分どうも永いこと話し合つて面白かつた。僕ばかり聞かれてゐるのでもつまらない、一つぞつちでも何かニュースを聞かせてくれないか」と私はもう切上時だと思つて話をかへた。
Aは笑ひ出した。暫く何か考へてゐたが、

「そを〳〵すばらしい話がある。荒木大將の改宗（コンヴァーション）。去年こつちの新聞は皆寫眞入りで大々的に報導したのだけれども、知つてゐますか』
とニヤ〳〵笑ひながら云つた。
「荒木大將の改宗？　それはまだ知らない。話してくれないか」
「何でも去年、荒木大將は何か非常に煩悶することがあつて、今まで信仰してゐた佛教では安心が得られず、東京のビショップ、ニコライの所へ救ひを求め、道をきゝに行つたのださうですよ。僧正がじゆん〳〵と神の道を說くと荒木大將はすつかり感激してしまつて、早速改宗して、かん〳〵のグリーク、オルソドツクスの信者となり、僧正からサバ、ダリロヴイツチといふ法名を貰つてすつかり安心立命してゐるといふことなんですがね。どうです、面白い話ぢやありませんか、一つ荒木さんに話してあげたらどうです」
と不相變、皮肉さうな顏をしてニヤ〳〵してゐる。そんなニュースが嘘八百であることを百
白　も承知の上で話してゐるのである。私はAが愉快になつてきた。
と　二人は大笑ひをして握手して別れた。いかにもキビ〳〵とした仲々いゝ男ぶりのAの後ろ姿
赤　を見送りながら、私はまた晝前に會つた白系露人の物さびしさうな、あはれな影の薄い姿を思ひ起して暗然とした。

すつかり夜になつた窓の外に、また靜かな雨が、わびしいやうなかすかな音を立てゝゐた。

IV

翌日の晩九時近くに私はブダペスト行きの寢臺車に乘りこんでゐた。

窓から首を出して發車間際の雜然たる停車場風景を眺めてゐると、汚たない着物をきた旅客達が、入れかはり立かはり、驛の賣店から大きなパンやら果物やらを買ひこんでゐる。大方明日の朝食の分を用意してゐるのであらう。こゝもまた貧しいものが多いのだといふ感がしみじみとしてきた。

時間が迫つて見送りの人達が私達の窓の前に固まつて集つた。すると誰れか急いでかけつけたらしく、人垣を押しわけて私の前に出てきたものがある。見ると例の白系露人の太つた男であつた。あひかはらずの一張羅らしいよごれ果てた黑服をきて、齒切れわるくニヤ〳〵しながら一通りの別れの挨拶をした。

汽笛が鳴つた。私は集つた一人一人と別れの握手をした。最後にもう一度近よつてきたその男と握手をすると、そろ〳〵動き出してきた汽車を追ひかけるやうにして大股に歩るきながら、小さな聲で窓に顏をよせて云つた。

「日本はロシアと何時戰爭をしますか？」

私が何にも返事をしないうちに、速力のまして來た汽車は、ふり千切るやうに、淋しい顏をした男をプラツトホームに殘して闇の中へまつしぐらに奔り出してゐた。

マニラの牢獄見物

I

マニラの歴史を遡れば、古きスペインの昔語りになる。スペイン三百年の統治の跡は、苔むしたイントラムルスの一劃に今も殘る。初めてこゝに築かれたのだといふ石壁には、幾百年の風雨に古びた壁面に葛がはつてゐる。兵營の庭に捨石代りに据えてある大砲も博物館の參考品を見るやうな感がする。

嘗てスペインがこゝを領有してゐた頃に、遠く西の果ての故國から移住して來た人々が集團を成してゐた街の一部は、今も昔のまゝに殘されてゐる。古いエッチングに描かれてゐる通りの木造の家々、往來にまで飛出してゐるやうな階上の古風なバルコニーには、ロメオとヂュリエットの影はなくて、みすぼらしい着物をきた老婆が編ものをしてゐるそばに、素燒の植木鉢にうえたフクシヤの花だけが、徒らに眞紅に咲き亂れてゐる。一七九九年に建てられたのだといふサン、オーガスチン、教會には島原の亂の殉教者を描いた壁畫が殘されてゐると云はれてゐたが、入つて見れば、古い時代の聖畫は澤山にかゝつてゐるが、その畫のかゝつてゐたといふ壁間は白く塗りつぶされて、何もなくなつてる。舊態は注意深く保存されてゐるやうに見えながらも、いつか知らぬ間に、だん〳〵に影が淡れてゆく。寺門の中の廣場には過去の歴史な

どには一向に無關心な大勢の小供達が、アカシヤの大きな樹の影に、南國のはげしく照りつける日を避けて、無心に石を蹴り合つて遊んでゐる。

ヒリツピンの昔の夢をあとに殘して郊外に出て見れば、そこには現實の土民の生活が慘めな姿で展開されてくる。マニラも海岸通りや、ルネタ公園、議事堂附近から橋を渡つて目貫きの大通りへかけての市の顏を見れば、立派な近代都市に相違ないが、一歩郊外へ車を驅れば人の住む家も、自然も、まるでかはつてくる。バナナが實る芭蕉の影に、黃色く靑く實をつけたマンゴーの木の下に、比島土人の家が立つてゐる。床を高くした浮見堂のやうな家々は何れも竹の柱に、パームの葉で屋根をふいた粗末きはまるものばかりである。十ペソもあれば立派に一軒の家が建つのだと云はれてゐる。吹けばとぶやうな土民の住宅は、私をして嘗て疲弊した奄美大島を視て廻つた時のことを想ひ起させた。土民の市場は見るからに汚たなくもあれば惡臭に滿ちてゐる。血だらけの肉や、魚などを亂雜に並べた食物の市場に、赤や靑の毒々しい單色の着物をきた比島の土民だの、支那人だのが、何かわめきながら芋をもむやうに群がつてゐる。裸の眞黑な小供達が無暗にそこらを驅け廻つてゐる。汚たない濠の中には醜惡な臭ひを漂はせる汚物が矢鱈になげこまれてゐるが、養分を十二分にとる爲か、勢よく繁殖してゐる狸藻が、水の面一ぱいに生えしげつて、これだけはあたりに似合はぬ美くしい薄紫の花を淸らかに咲かせてゐる。

どこの國の大きな都市もさうであるやうに、マニラもその外貌にすら明暗の度が甚しくかはつてゐる。もしも一歩內部的に觀察するならば、そこには悲劇の面と喜劇の面と裏表についてゐたり、美醜の矛盾が意外なところに橫はつたりしてゐる事實は隨所に發見されるに違ひない。しかしかうした幾多の文明の裏通りの中で私がいろ〳〵な意味で痛快な興味を味はつたものは、こゝで牢獄を見物したことであつた。

I

スペイン時代の舊蹟やら、土民部落やら、市場やらを見て廻つたあとで、私達の車は牢獄の前へ橫づけになつた。表から見たのでは一向に牢獄らしい感じも與へない街中の鐵門の大きな邸である。

門を入ると植込みなどもあつて牢獄といふ名から受ける陰慘な感じとはおよそ緣遠い氣持がする。案內のものについて右手の建物の中へ入つた。それはかなり大きな建物で入るとすぐ廣い階段を上るやうになつてゐた。階段の一番目につく所に大きな建札があつて「現金賣(キヤツシユオンリー)」と大きく書いてある。牢獄を見物に行つて、いきなり現金懸値無しの看板を見せつけられゝば誰れ

でも驚くに違ひない。私も最初は何のことかわからなかつた。しかしその疑問は階段を上り切ると同時にすぐに氷解してしまつた。いきなり牢屋を見せて貰ふことゝばかり考へてゐた私達の豫想とは違つて、案内されたのは囚人の製作品の陳列會場であつたのである。

そこは言葉通り立派な一流の商品陳列館そのものであつた。藤細工の豪奢な長椅子や、ひぢかけ椅子、洋服箪笥から、テーブルその他の家具製品が、いかにも客の購買慾をそゝるやうに巧みに陳列されてゐる。製作品も實に巧みな立派なものばかりである。看守なのであらう、それとも商買人で實際はあるのかも知れぬが、愛嬌のいゝ見張りの男が、何か一つ是非お買上げをと云つたやうな樣子をして吾々のあとからついてくる。陳列品には一々現金懸値無しの定價がついてゐる。

「これからすぐ日本へ歸るのだつたら、こんな椅子を土産に買つてゆくといゝのだがなあ」と私達は、すばらしい出來の藤椅子をひやかして歩るき乍ら、陳列館を一廻りして外へ出た。

今度は表面の建物へ入つた。そこはすぐに控室のやうになつてゐて、向ふにいかめしい鐵の扉がつゝ立つてゐる。正に牢獄への入口だといふ感がしてきた。右手に入場券を賣る切符賣場がある。若干の金を拂つて切符を手にした私達が一同揃つて案内人と一所に大きな表面の鐵扉の前に立つと、どこかでボタンでも押してゐるものと見えて、自働的に扉はすつと開いてきた。

中へ入ると後ろから又音もなく扉はしまつてしまつた。私達は小さな部屋の中へとぢこめられた形になつた。見るとまた前に同じやうないかめしい鐵扉が立つてゐる。又自働的にその扉があいた。吸ひこまれるやうに扉口から奥へ入ると、今度はいきなり目の前に螺線型の窮屈な鐵の階段が現はれた。恰度燈臺の中を上へあがつて行くやうな感じのする狹い階段である。私達はぐる〳〵と目まぐるしく廻りながら冷めたい手摺を傳つて上つて行つた。

狹いロからいよ〳〵上に登り切ると、私達は萬里の長城の上へでも出たやうな、コンクリート造りの長い塀の上に立つてゐた。廣い牢獄全體が目の下に見える。一人づゝでやつと歩るける位のせまい道のついた高い塀が牢獄の廣場を眞ん中から貫いてずつと向ふの方まで續いてゐるのである。

私達はヨチ〳〵と細い塀の上をあるき出した。右も左も目の下は牢獄である。

二三十間も歩るくと大きな塔の上に出た。道はそこで行どまりである。塔の上には鐘樓に似たものがあつて、その廻りを圓く歩るき廻つて四方が眺められるやうになつてゐる。

成程これなら牢獄の見物席としては申分なしである。高い所から見下ろしてゐるのであるから危險感は少しもない。それに塔は丁度牢獄の全體の中央部にあるので、一萬坪もあらうかと思はれる廣い全部が一目で遠くまで見通すことが出來る。

外國の牢獄を今までまだ見る機會をもたなかつた私は、すつかり好奇心のとりことなつて狹い塔の上を、ぐるりと廻りながら眺め入つた。牢獄はてうどパリの街がエトワールを中心にして放射狀に道がついてゐるやうに、塔を中心にして放射狀に建物が並んでゐる。獄舍には長い一棟毎に大きく番號が白で書いてある。ブリゲードから十四號までが規則正しく放射狀に並んでゐるのである。その他に別棟があつて、それにはセル、ハウスと白く書いたのが二棟、そのとなりにポツンと小さな獄舍が一つ。それにはデツス、チヤムバーと鮮やかに書き記してある。電氣椅子のある執行室なのである。不幸な同胞西島某が恐ろしい誤解から殺人の罪をきて危ふくこゝの露と消えやうとした怖るべき死の部屋である。

默つてその死刑室の一棟を眺めてゐると、いやな氣持がしてきた。あの一室の中で今まで何人のものが命をたゝれたのかと考へると、呑氣らしく見物をしてゐるのが相すまぬやうな氣もしてきた。

牢獄の內部は何分にも高い所から見下ろすのであるから少しもわからない。僅かに明いてゐる窓から青い服が時々チラ〳〵と見えるだけである。獄舍の外の廣場には二三人づゝの看守が棒を持つて呑氣さうにブラ〳〵と右や左を歩るいてゐる。聞いて見るとこの牢獄はほとんど囚人の自治制度で、あの見廻りの看守も實は優良な囚人が選まれて任についてゐるのださうであ

る。

大分どうも全體の調子が日本などで聞く話とは違ふなと思ひながら、私はもういゝ加減の所で切上げやうとした。案內の者にもう歸らうではないかといふと、彼はポケツトから時計を出して見ながら

「いや、もうぢき四時半になります。すると面白いことが初まるのです。折角見に來たのですから、もう一寸辛棒してゐて下さい」と云つた。

私は牢獄で一體どんな面白いことが初まるものか見當もつかなかつたが、案內人は頻りに四時半まで待つてゐろとすゝめるので、それなら一つ見てやれといふ氣になつて腰を据えた。氣がつくと、その面白い四時半をねらつて見物に來たのであらう、私達の他に婦人連れなどの幾組かの見物人が塔の上に集つて來てゐた。牢獄の廻りをめぐらした高い石塀の上には、それでも警備の爲であらう銃をもつた兵が、やゝに强く照りかへし出した夕方の日を浴びて、影繪のやうにおちこちしてゐるのが遠くの方に見えた。

四時半。

私達の立つてゐる塔の頂上でカーンと一つ大きく鐘が鳴つた。續いて又一つ。

するとそれが合圖のやうに遙か向ふの一つの建物のかげから、ボーイスカウトのやうな小氣の利いた服裝をした三十人ばかりの音樂隊が華やかに太鼓を叩き、クラリネットを吹きならして行進してきた。先頭に立つた白いへりをとつた青い服の男がいかにも氣取つて得意さうに指揮杖をふるひながら、一隊をひきいて一番廣い運動場の眞ん中まで出てきた。運動場は私達の目の下にあつた。

どこから出てきたのか氣もつかぬうちに、今度は五六十人の銃をもつたカーキ服の兵士らしいのが勇ましく行進してきた。樂隊の音につれて彼等はいかにも悅しさうに元氣よく、縱隊、横隊さま〳〵の隊列をなして運動場を練り廻つた。

「あれは皆囚人ですよ」

と案内人は說明した。

「あの銃を持つた兵隊も囚人なのですか」と私は驚いてきゝ直した。

「さうです、皆な囚人です。こゝでは何もかも自治制ですから、成績のいゝ囚人はあゝして音樂隊にしたり兵士にしたりしてゐるのです」

と案内人は一寸皮肉らしい笑を見せた。

勇ましいラッパの音が夕方の空氣をふるわせて、高らかに鳴り渡つた。

するとそれがまた合圖なのであらう。塔を中心に放射狀に建てられてゐる十幾つかの獄舍の中から各々六七十人づゝの囚人が、ゾロ〳〵とつながつて外へ出てきた。藤でつくつたまんぢう笠のやうなものをかぶつてゐるので顏はよく見えないが、刑の輕重によつて差別があるのであらう、獄舍によつて服がちがふ。紺の單色もあれば、藍色もあり、太い縞の服をきてゐるものもある。大勢揃つた所を見ると變化があつて一寸奇觀だ。

囚人達は皆外へ出てしまふときちんと整列して、看守が一人々々身體をさはつて檢査をする。それがすむと、音樂隊の音につれて廣場を列をなしてぐる〳〵運動し出した。誰れも彼も土をふむことが愉快さうに、一歩々々を味ふやうに歩るき廻つてゐる。

囚人の運動が一通りすんだらしい時に、一同はぴたりとまた整理した。

音樂隊が米國の國歌を奏し出した。

「どうぞ脫帽して下さい」

と案内人がまづ自分から帽をとつて不動の姿勢をした。私達も帽をとつた。

囚人も看守も、牢獄見物の男女も、すべてが姿勢を正してゐる中に、國歌吹奏裡に獄舍の屋上に高く揚げられてゐた米國々旗が、夕空をスル〳〵と降ろされて行つた。

囚人共はまたゾロ〳〵と獄舍の中へ入つて行つてしまつた。

私はもうこれで案内人のいふ面白い夕方の行事が終つたのだらうと思つた。しかしさうではなかつた。見樣によつては正にこれこそ面白いものがあとに殘つてゐたのである。それは囚人達は獄舍に歸つても、運動場には音樂隊と兵隊とが依然として居殘つて、急に今までの空氣を一變してしまふやうな華やかな派手な音樂をやり出したのである。

音樂が華やかになると兵士の一隊は銃をすてた。さうして妙な體操をやり初めたのである。妙なといふより他に私にはあの體操を形容することは出來ない。もし强ひていふならばそれは寶塚でゝも興業したらばきつと受けるに違ひないと思はれるやうなダンスに似たる體操なのである。もうそこにはカーキ色の服にふさはしい兵士らしい威嚴も何もなかつた。お互にダンスのうまさを競ふやうな樂しげな手ぶり足ぶりの面白さがあるばかりであつた。

三十分ばかりも體操を踊つて音樂隊も兵士もやつと引上げて行つた。牢獄見物の入場券を買つて入つた女達は、これで幾錢かに相當する享樂をしたといふやうな顏をして滿足らしく笑ひ合つてゐた。尤も見物も見物ではあるが囚人もまた相當なもので、見物の中に婦人がゐるのを見上げた二三人のものは、うや〳〵しく脫帽して敬意を表して見せたものもあつた。

私はすつかり馬鹿々々しくなつた。さうして成程これはいろ〳〵の意味で面白いと思つた。

そろ〳〵日がかげつてほの暗くなり出した夕方の、長い壁塀の細道を引返してゆくと、一番壁に近い一つの獄舍の中が割合によく見とほすことが出來た。ちやうど日本の忍び返しの塀のやうな目かくしがあつて、吾々見物人には內部の見えぬやうにしてはあるのであるが、一ところ大きなすきのある所からチラと見えた光景は、寢臺の前に長いテーブルがあつて、そこで二人の囚人が樂しさうにピンポンの勝負をしてゐるのであつた。

珍魚デオロギー

K君——

日本はもう、すが〳〵しい初夏の季節に入つてゐることゝ思ひます。君の庭の築山をめぐるつゝじが、紅に紫に、さぞ奇麗に咲き亂れてゐることだらうと遙かに想像してゐます。今年は蝶の採集はどうですか。日本を立つ前に會つた時、此夏はまた伯耆の大山へキマダラ、ルリツバメやウラギン、シジミを採りに行くのだと云はれてゐたから、或はもうそろ〳〵出かける用意でもしてゐるのではないかなどと考へてゐます。折角、南洋まで出かけるのだ、一つ珍らしい蝶を澤山採集してくるのだねと君に云はれて、トランクの底に捕蟲網やパラフイン紙を初めとして、一通りのものは忍ばせてきた私ではあるのですが、さて南洋をへめぐつて見ると、他の仕事が忙しくて迚も蝶を追ひかけてゐるひまがないのです。大がいの所は自動車にばかり乘つて走らせてゐるので、第一野原や山を歩るき廻る機會が殆んどないのです。これでは採集が出來る筈がないわけです。たま〳〵ひまを見て野山に出ることはあつても不思議に蝶は少い。私は日本の夏から考へて見ても、常夏の南國へ行けば隨分澤山蝶類はとんでゐることゝ考へてゐたのですが、これは間違ひでした。割合に平凡なものが僅かとんでゐるにすぎないのです。君の御期待に添ふやうな報告が一向に書けないのも、私の懈怠ばかりではなく、一つは、インドにもジヤバにも大した珍らしいものが居ないといふ本質的の問題にかゝつてゐるのです。有

名なジヤバのバイテンゾルフ植物園の門前にはいろ〳〵の物賣りが出てゐます。アモンドの實でこしらへたパイプだの、ジヤバ人形だの、さては果實の王と云はれるドリアンだの、ギラギラと寶石のやうに光る羽を利用した昆虫のピンだの、さま〴〵のものを旅人對手に賣つてゐますが、その中に蝶の標本を箱に入れて賣つてゐるものがありました。すつかり展翅した蝶を二三十種入れたものなのですが、一向に珍種はありませんでした。私達が簡單に日本で手に入れてもつてゐるものばかりです。各地の博物館でも蝶の標本室は根よく見て廻つたのですが、中南米の色彩の華麗なものと違つて、大體に於て臺灣に居るものと大差ないと云つて差支へありません。種類も少いのです。そんなわけで折角、熱帶地方の蝶をと目ざした旅の樂しみの一つは、興味の少いものとなつてしまつたのですが、たつた一つすばらしい發見をしたのはセレベス島でした。これからその話を書いて見たいと思ひます。

K君——

セレベス島へは私は無論今度が初めての旅でした。いよ〳〵明日は早朝マカツサへ着くといふ前の日に、私達をのせたジヤバ、チヤイナ、ジヤパン、ラインのジサダン號は赤道を越えました。その日の夕方マカツサ海峽にさしかゝつたのですが、暑さは相當に暑くはあつても實に靜かないゝ航海でした。舟の左舷にはセレベスの島々が近く見えてゐます。一寸見た所では瀬

戸内海の島々のやうに綠に包まれた、餘り高い山のない島ばかりですが、人間は殆んど住んでゐる氣配が見えません。時たま見殘した夢の名殘りでもあるやうにポツンと一つ白帆が岸近くに浮いてゐたり、森影から何の煙か一すぢ紫色にユラ〳〵と立昇つてゐたりするのを見ると、餘計に淋しいやうな氣がしてくる位です。恐らく何十里、何百里に一軒か二軒といふやうな落莫たる人間の生活がこゝに營まれて居るのでせう。そも〳〵彼等は何を食ひ、何を樂しみに生きてゐるのでせうか。人間といふものゝ生き方には吾々の想像もつかぬやうな單純な淋しいものもあるのだと、しみ〴〵考へさせられてしまひました。文明の都會生活をしてゐて、孤獨だの寂寥だのと、小なまいきにセンチなことを云つてゐる者共に一目見せてやりたい風光です。

やがて右舷に日が落ちかゝりました。紅に黃に紫に、美くしい南國の夕照が洋々たる波を染めて水平線に近く沈み出した時、夕風を樂しんで甲板に出てゐた人達の中から、シヤーク、シヤークといふけたゝましい聲が起りました。舷側に近よつて見ると幾十匹といふ大きな鮫が、眞黑なからだを浪の上に半分以上も乘出しては、夕潮のまに〳〵沈みつ浮きつ戯れ泳いでゐました。こんなに大きなのが、こんなに澤山群れてゐるのも珍らしいことですと、愛嬌のいゝ和蘭人の事務長が感心したやうに見とれながら云ひました。しばらく舟を追ふやうに群らがつて走つてゐた鮫はまもなく舟から離れました。見る〳〵遙かうしろに遠ざかつてゆく海上の小さ

な黒點が、全く眼界から消え去つて、あとにはもう、すつかり水平線の下に沒してしまつた太陽の、名殘の光だけがほのかに浪を染めてゐるだけでした。いかにも南洋の夕らしい氣分がした日でした。

翌日の朝早く、船はマカツサに着きました。港口には江の島のやうな小さな島が澤山海に浮いてゐて、竿のさきに椀をつけたやうな妙なかいで水の面を叩きながら土人の舟が無暗に澤山その邊を漕ぎ廻つてゐます。

上陸して見るとかなりの暑さです、土人達の腰に卷いたサロンの赤さが、目にしみるやうに強い刺戟となつて、一層暑苦しい感をそゝります。波止場から街へ出るまでの公園の道にはすがすがしいアツサムの並木が、日をさへ切つて涼しい影をつくつてゐました。和蘭人の住居なのでせう、一寸氣の利いた涼しげなバンガロー風の家が公園の一角を占めて建て連らねてあります。何といふ木か名は知りませんが、クロトンに似たものがどこの垣根にも生えてゐて、晩秋の葉鷄頭そつくりの血のやうに紅い葉を派出にもえ立たせてゐました。

K君——

君も原始的な土人の木彫が好きでしたね、私がいつか臺灣で集めて來た生蠻のパイプを見てすつかり羨しがつた君が、次の年に蝶の採集に出かけた時、花蓮港で木彫の粗野な裸人形を澤山

集めてきて得意になつてゐた樣子を今でも思ひ起します。二人で原始藝術の研究に一時夢中になつて、わざ〳〵アドルフ、バスラーとエルネスト、ブルムメルの L'art Précolombien などを取よせてあかず眺めたのもあの頃でした。今度の旅に出る時も、蝶の採集と一所に、南洋の民藝品を買つて來てくれよと君から頼まれたのを忘れはしません。マカツサに上陸してまづ第一に思ひ出したのはそのことでした。

私は街へ出ると民藝品の店を見て廻りました。街は支那街を少し西洋風にしたやうな割合に狹いもので、華商、和蘭商が入まぢつて店を並べてゐますが、賣つてゐるものを見ると織物類でも雜貨でも日本品が非常に多いのです。一時支那で日貨排斥熱が高まつた時には、こゝもその餘波を受けて華商が邦品のボイコットをやつたさうですが、安くて良い日本品を賣らねば結局は店が立たず、支那人自身がお互に祕密で神戸や新嘉坡から日本品を變形しては輸入し出して、今では華商も外商も邦品を取扱はぬ店は無いやうになつてゐるさうです。實際最近はどこへ行つても日本品ばかりで、下手をすると土產物が皆日本製であつたりすることは一向珍らしくないことです。インドなどでも、ハイドラバツトに大仕掛の土產物卸商があつて、全國の見本を集めて日本に註文し、出來たものは一手に引受けて全印度に配分してゐるのだといふ話もきゝました。こゝへ來る前に厦門で土地の繪ハガキを買ひましたが、すばらしく美事な三色版

の風景繪ハガキなので、感心して裏返して見たら日本大阪製と小さく刷つてあつたのを發見して驚いたこともあります。ですからマカツサの町で民藝品を漁りながらも私は日本からの輸入品であつてはたまらぬと考へて、氣の利いた細工ものは敬遠して本當に不細工なものや、古いものばかりに目をつけました。

流石に土人の純製作品には面白いものがありました。トラジャー屬の土人が作つた木彫の鰐は土人らしい恐怖と稚氣がそのまゝに出てゐる愉快なものでした。ブキス屬の土人が作つた土でこねた花嫁花婿は、全く臺灣の土偶そのまゝでした。調べて見れば兩者に何かの關係が見出せるかも知れません。そこの店で聞いた話ですが、君と立つ前に話し合つてゐた有名なバリー島の古い木彫人形は、古美術保護の意味で今では島外への持出し禁止になつてゐるのださうです。かへつてマカツサに來てゐるものを見つけた方が安全だらうといふことでした。

私はその店で古いバリー木彫の人形を大分見ましたが、色彩の華やかさが、年代の爲めにすつかり沈み果てゝ何とも云へない良い味を出してゐました。値段も隨分高くて日本金にして一寸いゝものは百圓近くします。手を出すのに一寸考へさせられます。イドマスの作つた怪奇な佛像などは島には無論澤山殘つてゐませうが、外國へ持出すのは容易ではないのでせう。今、現に作られてゐるバリー土人の木彫はドイツ人の指導によつて造られてゐるだけにすばらしく

新らしい表現で、面白いには面白いのですが、氣が利きすぎて、野蠻人の民藝の味などはどこを探しても見出すことは出來ません。

二三軒かうした古いものを商ふ店をひやかして歩るいてゐるうちに、私はどの店にも妙なものが澤山並んでゐるのに氣がつきました。それは竹筒に土人らしい單純な彫刻を施した一見して茶筒のやうなものなのですが、何につかふものなのだか、どうしても見當がつきかねました。茶を入れるのでもなければ、菓子を入れるのでもなささうであるし、どうにも判斷の下しやうがないので、そこの親爺にきいて見たら實に意外なことを答へました。

ジヤバにしろセレベスにしろ蘭領の國々が近年慘澹たる不況に陷つてゐて、住民の生活が疲弊の極にあることは、私も自分の專門の經濟のことですから前以て承知はしてゐました。しかし實際にその土地に來て見ると、日本で想像してゐた以上に土民が苦しんでゐるのに驚かされました。農產物の價格が下つたことが土民經濟に根本的の致命傷となつたことは申すまでもないのですが、それと共に和蘭領土の財政窮乏が重稅となつて土民に二重の苦痛を與へるやうになつて來てゐるのです。土民の收入などは近年實に僅少なものとなつてしまつてゐますが、そのあはれな食ふや食はずの土民に對して一人當り一年に三盾（ギルダー）といふ不都合千萬な人頭稅が課せられておるのです。一盾と云へば今の爲替相場では二圓二三十錢にも當るのです。こんな重い

負擔を課せられてゐる土民こそあはれなものですが、そのまた課税の方法が大變です。元來、蘭領インド邊の無智な土民に法律觀念もなければ戸籍觀念もないので、四千萬人から居る土民は戸籍簿もなければ、誰れも自分の歳も知りません。お前は今年いくつになつたのだときくと俺は知らない。いつ生れたかはおふくろだけが知つてるだらうと答へます。成程母親は自分が生んだのですから知つてゐるでせうが本人は知らないのですから驚いたものです。自分の年を知らないでは困るだらうと聞くと、年なんか知らなくとも一寸も不便はない。知つて居れば何かとくをすることがあるのかと平然として答へます。成程年を知つてゐれば儲るといふ事實もなささうです。かやうに實に徹底した無智放任の土民なのですから、人頭税をとるといつても規則立つて整理は出來ません。そこで考へた結果、一年に三盾の税を拂はせて、その領收證を保存させます。領收證がなければ未拂と見なしてどし〳〵また取立るといふ制度なのです。かうなると土民にとつては領收證は命から二番目の大切なものとなります。もし萬一領收證を紛失してしまへば、たとへ一度納めてもまたとられます。何しろ一年に三盾といふ土民にとつては容易ならぬ大金の問題ですから、領收證は年中身につけて居る必要があります。所が何分にも熱帶地方のことで土民の大部分は裸同樣の暮しをしてゐます。内ポケットに入れておくなどゝ氣のきいたことの出來ない着物です。そこで考案したのが例の竹筒で、この中に人頭税の領

收證を入れて、後世大事に肌身はなさず持つて歩くのだといふことです。

笑ひ話として聞き流すことの出來ないものがあるではありませんか。私は記念のためにその竹筒を二つ三つ買つて、うら淋しいやうな妙な氣持を抱いてその店を出ました。

K君——

肝心の蝶のセレベスを報告するつもりで、つい長々と本筋から外れたことばかり書いてしまひました。ではこれからそのことを書きます。

朝早く私達は自動車をとばせて、マカツサから廿八哩程離れたバンチマラングの瀧を見に行きました。坦々たる自動車路は理想的なドライブを樂しませてくれました。道の兩側に移りかはる風光。水田は日本のそれに極めてよく似てゐて、もしも水牛の耕すを見ず、白鷺の群れとぶを見なかつたならば、九州の田園と間違ふかも知れない程でした。竹の林の多いのも美くしく感ぜられました。はげしい程に照りつける熱帶の日の光が兩側の竹林にさへ切られて涼しい影をつくつてゐる道などは、何とも云へぬ涼しさの匂ひといふやうなものをすら感じました。名は何といふのでせうか宵待草に似た黄色い花が一ぱいに咲き亂れてゐる灌木のそばを、大きなかめを頭にのせた半裸の婦人が、更紗の模樣の美くしいサロンを風にひるがえして歩るいてゐるのも捨て難い風情でした。

瀧はうつさうたる深林の中にありました。すばらしい勢で丈餘の岩から落ちてくる幅ひろい瀧は、巨岩の多いためか眞白な飛沫の渦をまき返して、保津川の急流を瀧にしたやうな氣持を起させました。さすがに暑い熱帶もこゝまでくると寧ろ肌寒い程にかはつてしまつてゐます。

私達はしばらく瀧に見とれました。さて引返さうとして斷崖がじめ〳〵と水氣を帶びて片側に立つてゐる徑を通りかゝると、私は思ず聲をあげて立どまりました。それは君に一目でも見せたいすばらしい光景でした。何とその水氣を帶びた斷崖と、その上におほひかぶさる密林の附近はまるで標本箱を引くり返したやうな美くしい蝶の亂舞場であつたのです。ルリモンアゲハやベニモンアゲハのやうな美くしい大きな蝶はいくらでもとんでゐます。その他、フタオテフなども澤山ゐました。私は生憎く捕虫網をもつてゐませんでした。仕方なしに帽子で抑へやうとしましたが流石にさう自由にはとれません。僅かにモンキテフが二匹ほど手づかみに出來た位で、他のものはたゞ見てゐるより他はありませんでした。私はこれ程澤山の美くしい蝶が手近に澤山とび廻つてゐるのを見たこともなければ、網のないのがこれ程に惜しかつたこともありません。もしも捕虫網さへあつたなら完全な珍らしい蝶を百や二百とるのは何でもなかつたでせう。臺灣でもとても見られない珍らしい蝶が果してどれだけ居たことでせうか。今でもその時のことを考へると殘念でならぬのです。一度是非思ひ切つてマカツサまでやつて來てバ

ンデの瀧を訪れよと私は採集家諸君に大きな聲で叫びたい位です。恐らく南洋でもこの位各種の蝶の群れてゐる所は他には餘りないだらうと思ふからです。

最後に私はこゝで見た珍らしい魚のことを是非つけ加へて報告して置きたいと思ひます。この瀧を上まで登ると小さな湖水になつてゐて人が泳げるやうになつてゐます。その湖に不思議な魚が栖んでゐるのです。下唇だけが無暗に發達して大きくなつてゐる魚で、餌がくるとそれを大きな唇で受けて、そのまゝ呑みこんでしまふのです。所が何分にも杓子で餌をうけとめるといふ藝當なのですから、受け損じて下に落します。それをねらつて此魚の下にはまた澤山の小魚が群らがつて、こぼれ餌にありつかふと競爭してゐます。元來セレベスは奇妙な動物のゐる所で、木登りをする魚もゐます。變つた蛇も多いのです、極樂鳥もゐるのです。しかしこの下唇だけ發達して餌をうけとめるといふ魚は、その中でも珍らしいものなのださうです。

K君——

この珍魚は、それ自身奇妙なものではあるのですが、更に畫龍點睛の面白さはその名なのです。曰く、デオロギー。

君はこれですぐ、近頃誰れもかれも口にするイデオロギーといふ言葉を思ひ起しはしませんか。何とかのイデオロギーでなどゝ半可通をふり廻す學者ぶつた人達などは、要するに下唇だ

けつき出して何でも落ちてくる餌を受けとめて呑みこもうとする魚とどこか似てゐるとは思ひませんか。更にそのこぼれ餌のあとを追つて目の色をかへてゐる小魚の群を見て、成程流行のイデオロギー風景だなとおかしくなりはしませんか。

大分長く書いてしまひました。この邊で擱筆しませう。君の良き採集の幸を祈る。

苦熱のペルシヤ灣

I

今度の旅行に出る前に、丸の内の郵船で常務の清水君に會つて話をすると、

「ペルシヤ灣を越えて行くのか、そいつは……」と、いかにも大變なやうな、同情にたえないといふやうな、妙な顏をしたのを思ひ出す。

カラチからペルシヤ、小アジア諸國へかけての行程、これが今度の旅行の中で一番苦惱の道場であることは前以て覺悟はしてゐた。水は絶對にのまず必ずエビアンを用ひること。サラダを初め生の野菜には手をつけぬこと、果物もメロンを食すぎると不思議に腫物が出來易いので、成可く食はぬやうにすること、など〻お互に固く戒め合つて、ペルシヤ、イラクの旅の重要な心得として守つてきた。しかし暑さそのものについては、さう大して怖れもしなかつた。日本を出てから、フキリツピン、ジヤバ、インドと熱い所ばかりを經てきた旅だけに、大がいの暑さにはもう訓練を積んで來てゐる自信があつた。ボンベイでもカラチでも會ふ人ごとに、イラクの暑さはたまりませんよと云はれてはゐたもの〻、これまでの熱帶地の旅から見れば、暑いと云つても知れたものだらうと考へてゐた。この暑さを輕く見た考へこそ未經驗者の第一の錯誤であつたのである。

カラチを出帆してから三日目の朝、私達をのせたビー、アイのヴアレラ號はいよ〳〵ペルシヤ灣の入口に差しかゝつた。浪のうねりが大きい。左舷に陸影が見え出した。アラビアの突端をなしてをる、トルーシアル、オアン領の一部である。何といふ荒凉落莫たる島なのであらう。見た所たゞ一面の赤白い岩ばかり、山はそのまゝに岩膚をむき出しにして、たゞの一本の木も見えない。荒けづりの骨ばかりで出來た山と形容するより他はない。ペルシヤ灣を何十回とか航海したといふ老船長の親切でブリッヂに上つてあたりを眺める。

「この邊には水もなければ木も無いのです。だから人間も無論一人だつて居ません。あの向ふの山の影にコヴクヴアイといふ所があつて、世界で一年中一番暑い所だと云はれてゐます。いつも百三十度を降つたことがないといふのだから大變な所です」

と指す向ふの高い山も、頂上まで赤膚に禿げ上つて烈しい日がカッと照りつけてゐる。暑い。船は島を廻つていよ〳〵灣の中を進んでゆくらしい。右手に二つ三つ相當の大きさの島が現はれた。

「あれはどこの領土ですか」と私はきいて見た。

「何しろ木も水もない島です。アフリカ領でもペルシャ領でもないやうです。誰れの領土でもない無人島なのですから、とりたければ、とつてもいゝですよ」と英國人らしいユーモラス

な顏をして老船長は笑つた。

何しろ暑い。ブリッヂに立つと熱い陽が全身を包んでとても永く辛棒してはゐられない。船長はしきりに、あちらこちらの島を指して話しかけるが何としても堪え切れぬので、海圖を見せてくれと苦るしまぎれの口實をつくつて船長室に入りこんだ。やつとホッとして窓から見ると靜かに大きくうねる浪の上に時々一つ二つ帆船が浮いてゐるのが見える。どこからどこへ行く舟なのであらう。こんな人もゐない骨ばかりの島があるだけでは餘り心細すぎる。

私は印度できいた密輸入の話を思ひ出した。ペルシヤは貿易が國家の獨占であり、ソヴイエート・ロシアがバーター制に伴つて輸入權のライオン・シェーアを得てゐるので、マッチや砂糖は他の國からの輸入禁止の形になつてゐる。それを目ざして對岸のアラビア側から砂糖を始め、いろ〳〵なものが密輸入される。ひどい時には一夜に二千噸位の砂糖が處分されてしまふのだといふから相當なものである。ペルシヤ政府もこの密輸入には手を燒いて監視船を澤山出して警戒しておつたのださうであるが、對手が少し惡るすぎた。精悍無比なアラビアの漁夫達は、言葉通りに海の鷲であつた。板子一枚、下は地獄と覺悟して、からだ一つを張つてかゝつた荒仕事の度胸はまた格別で、ペルシヤの嚴重な監視船に發見されゝば、命をまとに舟もろとも乘かゝつてなぐり込みをかけた。その度びに監視船の方が負けて逃げ出すといふやうな醜態

を重ねて、どうにも仕末におへないのである。そこでペルシヤ政府は考へた末に、これまでのやうな帆船位の監視船でなしに、新たに伊太利から二百萬金ドルを投じて六隻の軍艦を購入して沿岸一帶の警備の任に當らせることにした。尤も軍艦と云つても小さなもので、二隻は九百五十噸、四隻は四百五十噸といふ極めて小型のものであるが、それでも大きい方には四インチ砲二門を備へ、小さい方には三インチ砲が二門ある。別にまた高射砲ももつてゐるといふことである。流石に砲を備へた軍艦が現はれるやうになつてからは、アラビアの密輸入船も以前のやうに力づくで押して行くことは出來なくなつた。數ケ月前には二千噸位の汽船が撃沈させられたといふ話もある。

しかしこんな話を思ひ出しながら、せまい船長室から海面を眺めてゐると、何と云つても落莫たる光景である。瀬戸内海の綠したゝる美くしい島々などを見馴れてゐる吾等の同胞に、こゝのやうな島山をいくら骨をおつて記述して見た所で、實際と想像とは恐らく雲泥の差があらう。島々は次ぎ〳〵に現はれるが、木は一本もない。赤白い岩の他には何一つ見出すことは出來ないのである。恐らく人間も何十里に一人か二人の割合にしか住んでゐないのであらう。こんな沿岸が六百哩もつゞいてゐるのでは、いくら軍艦で警備して見たところで密輸入の防ぎやうはなからうとも思はれた。

船が進むにしたがつて暑さはいよ〳〵激しくなつてきた。日が落ちて夜になつても船室にゐても身體をもちあつかふやうになつてきた。

寢苦るしい夜をすごして、明ければまた落莫たる岩山にそつて熱い海を舟は進んでゆく。しかし此頃の暑さも、あとで考へれば實はものゝ數でない暑さであつたのである。

I

ペルシヤ灣に入つてから二日目の午後、船はバズラに着く豫定であつた。それまで岩ばかりであつても、ともかくも島影を見てゐた航海が、丸でギラ〳〵と光る浪以外には何ものも見なくなつて丸一日、暑さの爲にぐつたりとした私達は、ペルシヤの重要な港であるバズラに着くといふだけでも何か慰められるやうな期待をもつてゐた。しかし船がガラ〳〵と大きな音を立てゝ碇を下ろしたのを見ると、どこにも陸地らしいものもない海の眞ん中であつた。

どこにバズラの港があるのですと船員にきくと、向ふですと指すかなたに、薄ぼんやりと水平線に接して水とも雲ともわからぬやうな一抹の長い線が見える。望遠鏡でのぞいて見ると、灰色をした帶のやうな陸地が見える。相當の洋館なども並んでゐるが木は一本も見えない。矢張りこゝも砂漠の上に建てられた街なのに相違ない。おもちやのやうな白塗りの樣式のかはつ

た船が二隻遠くの方に浮いてゐる。それが密輸人監視の軍艦なのだと船員が教へてくれた。

こゝらは淺くて六哩も沖に船がゝりせねば荷役も何も出來ぬのだといふ。成程、濁つた淺みどりの海は無暗に浪立つて激しいうねりを見せてゐる。

ヴアレラ號は牛の吼えるやうな汽笛を長く鳴らした。

だるま船のやうな大きく不恰好なはしけが四隻程こちらを目がけて進んできた。淺く浪立つ海をのり切るので舟は大搖れに搖れて、浪にのる時は腹を半分も現はし、沈めば浪に全體がかくれるかと思はれる。乘つてゐるものはたまるまい。やがて舷側に横づけになつたのを見ると、ムハメダンの一家族らしいのが七八人乘つてゐた。男は精悍なアラビヤ風の半裸體であるが、女は眞黑な衣を頭からかぶつて目ばかり出してゐる。舟酔に惱んだらしく半分死んだやうになりながらも、黑い衣をぬいて涼風に顏を吹かせやうともせぬ。浪のためにぐら〳〵搖れる舷側のはしごを上るのにも、今にも海に落ちさうになりながらも、風に吹かれる黑衣を固くにぎつて顏の現はれるのを防いでゐる。あはれなる無智のものどもよとしみ〴〵氣の毒な感がしてきた。

この一家は家をあげてどこかへ移り住むのだと見えて、女達が二三人舟に乘り移ると、殘つた男がさま〴〵の家財道具を大汗をかいて舟に運びこみ出した。ナザレのイエスが馬小屋での

誕生の名畫に、いつも描かれてゐるやうな搖かごもある。異體の知れぬ玩具が澤山釣るしてある。何の目的でどこへ移住するのか、こゝにもまた人生のしめつぽい挿話がかくされてあるのかも知れない。

人と家財と、すつかり運びこまれて船足の急に輕くなつただるま船は、木の葉のやうに上に下に一層ひどく搖れ出した。それでも船尾に腰かけた梶取は呑氣さうな顏をして、眞黑な手を鼻のさきにつき出しながら、何かわめき散らして、ハッチ口の水夫と大聲で話をしてゐた。

暑い日が、洋上に暮れて、いよ〳〵寢苦るしい夜がまたやつて來た。私達は仕方なしに夜晩くまでサルーンに立ともつて無暗にレモナードばかりのんでゐた。

翌る日の朝、起きて見ると、船はもうペルシヤ灣を縱斷し終つて河に入つてゐた。チグリス、ユーフラテスの二つの河が海に注ぐ口で合して一つになつてゐる。シヤツト・エル・アラブである。思つた程に大きくはなく、高々隅田川の二倍あるかなしである。赤く濁つた水が滿々と音もなく靜かに流れて、左岸のペルシヤ領も、右岸のアラビア領も、たゞ見る一面の平沙、川岸に沿つた所だけが、青草が生え、棗椰子が茂り、箱を伏せたやうな白土の土人の家がチラホラと見える。河を上り下りする舟は日本の和舟とよく似てゐる。殺風景ではあるが、その舟を見てゐると、利根の水鄕に居るやうな氣持にもなつてくる。

船はゆる〳〵と濁つた川を遡つてゆく。

甲板に立つと川岸の棗椰子の森を越えて、向ふは遠く一望千里の沙漠である。沙漠を越えて風が吹いてくる。まるで火の風と形容するより他のない熱い〳〵風である。熱風といふ言葉は知つてゐた。しかし實際に出會つたのはこれが初めてゞあるが、正に火を吹く風である。三分と甲板に立つて辛棒することが出來ずに私達は部屋の中へにげこんでしまつた。

川幅は時に廣くなり、また狹くなる。そのぐつと狹くなつた所にアバダンがあつた。こゝは英國のペルシヤに於る石油政策の根源地。有名なアングロ・ペルシヤン・オイル・カムパニーがある。ゆる〳〵と遡航する船の窓から眺めて見ると、よくもこんな沙漠の中に、これ程の近代的の大工場を造つたものだ驚かれるばかりの、大規模な大仕掛の工場が川岸の一劃を限つて建て連ねてある。三億圓からの巨費を投じて、遠く百哩の果てから原油をパイプで運んでくるのだといふが、すべてが大がゝりで堂々としてゐる。大きなタンクも百二三十も遠く沙漠の向ふまできのこのやうに行儀よく並んでゐる。

晝氣樓が現はした夢のやうに、沙漠の中に近代工場の異風景をチラと見せながら、船はまた靜かにシヤツト・エル・アラブの濁つた流れを遡つて行つた。川幅はまた廣くなつた。

船はガラ〳〵と大きな音を立てゝ碇を下ろした。ぐつと大きな弧線を描いて濁つた水を亂し

ながらぴたりととまつた。こゝはマホメラで積荷を下ろす爲に四五時間碇泊するのだといふことであつた。

船長がまたブリッヂに上つて風光を見ないかといふので何の氣もなしに上つて行つた。カツと日の照りつけるブリッヂに立つた時、私は思はず目が昏むやうな氣がした。暑くはあつても舟が奔つてゐるうちは、それ程とも思はなかつた熱さが、停止した舟の日向に立つと、言葉通り釜の中に立つやうな息苦しい酷熱となつてからだ全體を襲つてきた。私は意地も我慢もなくなつて大急ぎで下に降りた。

荷役はなか〳〵すまなかつた。午前十一時から午後五時まで、灼けつくやうな川の中に立往生した船の中で、私は生れてから初めての深刻きはまる酷熱の洗禮をうけて、じつと辛棒せねばならなかつたのである。ペルシヤ灣の旅のつらさを心から底からいやになる程味はされたのはその五六時間であつた。

Ⅱ

日本人の常識として私は風とは涼しいものだと思つてゐた。ところが、こゝでは風ほど暑いものはないのである。

船がマホメラにとまつてからは、ちよつとでも甲板に出て、まともに風に當れば、それは言葉通り火の風である。灼け切つた沙漠を渡つて來る風はかけ引なしの熱風そのものである。もしも內地にゐて想像しうる唯一の場合は、もえさかえる火事場の眞ん中にとびこんで、面に吹きつける火の子の風に當てられた時の感じだけであらう。だからこゝでは部屋をメめきつて少しでも風を入れないのが最上の暑さを避ける方法なのである。それと同時に出來るだけ動かずにゐるのが一番しのぎよいのである。たとへば熱すぎる湯の中に入つた場合に、一番辛棒し易いのはぢつと動かずに居ることであるのと同樣で、動けば空氣は暑いのである。私達は仕方なしに、煮える眞夏の池の水に、仰向けにあへぐ金魚のやうに、窓といふ窓をメめ切つて外の空氣から遮斷したサロンに立てこもつて、ぐつたりと身動きをせずに居るより他はなかつた。

事務長がサロンに入つてきて、今一番涼しい部屋で計つて見たらば百六度でした。甲板は百十五度、午後からはまだ三四度は上りますといふ。やり切れない。

無暗にのどがかはくので、誰れも彼もソーダ水やレモナードに氷を一ぱい入れて引きりなしにのむ。普通ならば汗が出てならぬ筈なのに、空氣が乾燥してゐる爲であらう、汗は少しも出ない。汗は出るのだが、そばから乾いてしまふらしい。口の中はカサ〳〵になつて唇の皮がむける。頭は不思議に輕くなつてかへつて朗らかな氣のするのが妙である。

便所へ行くと、ランニング・ウオーターはランニング・ホツト・ウオーターに變つてゐる。手を洗つても氣持がわるい。加藤子爵がアイス・チーを取よせてのんでゐるうちに、氷の破片を誤つて床に落したら、水は一寸も流れずにすぐに破片は消えてなくなつた。とけてなくなつたには相違ないが、流れる間もなく乾燥してしまつたのである。たばこをのまふとして鑵をとると、火のやうに熱くなつてゐる。煙草の味もカサ〳〵にかれすぎてうまくない。

S君が二三日前から風邪氣味だつたのが、少し熱が出たやうだといふ。計つて見たらよからうと體溫器を出して目盛りを見ると、いきなり九度五分に上昇してゐる。そこでわきの下に挾んで計つたらば八度に下つてゐた。どうも世の中がすべて間違つたものになつてしまつたやうで妙な氣がしてならない。

何をする勇氣もなく、ぐつたりとサロンに立こもつてゐるうちに暑さはいよ〳〵深刻さをましてくる。百八度とかになつたと誰れかゞ報告した。八十度の暑さが八十五度になつてもさう身體には感じないが、百度以上になつての一度二度の差は十度も高くなつた程身にこたへるものだといふことを新たらしく體驗した。

晝飯の鐘が鳴つた。大して食慾もないが仕方なしに下の食堂へ下りた。誰れかゞサラダを註文した。持つてきたのを見ると切立てのトマトが切口からちゞれてドス黑くしなびてゐる。小

さな食堂で料理部屋からテーブルまで、もの〻四五間しかへだ〻つてゐないのに、その短巨離を運ぶ皿の上のものが、熱さと乾燥のために、みぢめに變化を來してしまふのである。私達はしばらくは呵然としてナイフをとる氣もなしにちゞれたトマトに眺め入つたものであつた。

午後の日は恐ろしく長かつた。米國から遙に送つて來たといふ、二間もある大きな木箱入りの自動車が五つ六つあつて仲々荷役はすまない。窓からのぞくとその大きな箱を七八人の土人が網をかけたり、ウヰンチに引かけたりしてゐるが、烈々と照りつける日を浴びた甲板の上で、帽子もかぶらずに平氣で働らいてゐる。たしかに人間の出來が違ふに相違ない。

夕方になつてやつと荷役は終つた。がら〳〵と碇をあげる音がした時に私達はホッとして火事場から救ひ出されたやうな氣持がした。夕方の爲もあらう船が動き出すといくらか涼しくなつた。

午後九時、のろはれたマホメラから逃れ出た吾等のヴアレラ號は、やつとバズラに着いた。イラク國への入口の港である。

甲板に立つて見ると棧橋のあたりはすつかり夜になつた暗さの中に、濃い霧が立ちこめて、わづかに木犀の花のやうな燈火が點々と陰見する。

「どうも實にひどい霧ですね、いつも此邊はこんなに霧が深いのですか」

と私は傍にゐた船の事務員に話しかけた。

「いゝえ、霧ではありません。これは皆こまかい埃ですよ、沙漠から吹いてくる風は、埃を含んで霧よりも濃い色になるのです」

とその男はニヤリと笑つて見せた。

シリア沙漠を横切る

I

バクダッドからダマスカスまで、五百四十哩の荒涼落莫たる熱風のシリア沙漠を、二十六、七時間、晝夜自動車に乘りづめにして横斷する日がやつてきた。

バクダッドの朝は往來をかける馬車の鈴の音から明ける、前夜百度以上の寢苦しい暑さに、轉々として夢うつゝのうちに夜をすごした私達は、未明五時にとび起きて簡單な朝飯をすますと一同で外へ出た。ホテルの前にはもうナイルン自動車會社のすばらしく大きな車が横づけになつて私達を待つてゐた。箱根のフジヤの乘合ひよりももう少し大きくて、嚴丈な十六人乘りの大バスである。

荷物を屋根の上に積上げてがつちりと太い綱で縛りつけた。誰れもかれも少々緊張した顏付をして、いよ〳〵車に乘こむ。藤のひぢかけ椅子が二列に並んでゐて、腰を下ろすと、まづまづ足位はのばすことも出來るが、この恰好で一晝夜以上沙漠を乘通すのかと考へると、いさゝか心細くなつてくる。運轉手が二人乘込んで來た。一人は運轉手臺に坐をしめてハンドルを握り一人は助手の形でそばの補助椅子に腰を下ろしたが、二人とも太くたくましいまくり上げた手首に彫物を見せて岩のやうな感のする大男である。心強くもあるが何となく物騷な氣もして

くる。一人はどうやらロシア人らしい。

私達がすつかり乘込むと車は無雜作に動き出した。さすがに涼しい朝風の街をひた奔つてナイルン會社の出發點まで行くと、別の横斷自動車が二臺、もう旅客を一ぱいのせて私達の着くのを待つてゐた。途中の危險に備へたり、修繕その他で助け合つたりするために、三臺揃つて行くのださうである。沙漠横斷飛行の飛行機もそこについてゐた。横斷はイラク國からシリア國への旅なので、國境になつてゐる沙漠の眞ん中で國境檢査をする手數を省いて、パスポートや稅關檢査を、出發點のこゝで皆やつてしまふ。それも形式だけで、文句も何もなくスラ〳〵とパスしてしまつた。私達の車は私達の一行だけで全部借切りなので實に世話がない。

午前正六時、いよ〳〵私たちの車を先頭にして大型の城のやうな横斷自動車は揃つて奔り出した。こゝはまだバクダッドの郊外、ペーブされた道が坦々と續いて、兩側には柳や、桑や、棗椰子などの並木がどこまでも永く續く。涼しい風が車の中へ流れこんできた。前夜の寢不足も忘れて、いさゝかいゝ氣持になつてゐるうちに、間もなく補裝された道は絶えて道は一面の砂原になつた。もう木の影はどこにも見えない。右も左も一望千里、灰白色の平坦な砂土の原である。何といふ草か知らぬが、葉も花も何もない茨のトゲばかりのやうな小さい灌木に似たものが、丸く青くかたまつて、ところ〴〵に生えてゐる。その他には目をさへ切る何ものもな

い。

だがこゝの沙漠は日本で想像してゐたやうなサラ〳〵した砂の沙漠ではない。むしろ乾き切つた灰白色の土ばかりの廣い平野である。もしも代々木の練兵場か、城東練兵場を一面に灰白色に塗りつぶして無限に續かせたと考へたら、一番よくこゝの光景を彷彿させるに相違ない。

車は猪のやうにかなりの速力で奔る。人間が手を入れて作つた道などは、もうとうに無くなつてしまつてゐるので、廣い砂原を、前に通つた車のわだちの跡だけをたよりに、ひた奔りに奔つて行くのである。

道があつて道がないやうな廣漠たる中を、時には何十頭かのらくだを連れたアラブの隊商がゆる〳〵と通つてゐる。そんな光景を眺めてゐるとどうやら沙漠らしい氣持がしてきた。

一時間半ばかり落莫たる一物もない砂原を奔つて、やがてフェルージヤといふ所につく。こゝはユーフラテス河を前にした驛場で、旅人の爲に飲み食ひの簡單なものをとゝのへた休息場もあり、近所には、木箱に似た土と石との土人の家も相當にある。川には大きな鐵橋がかゝつてゐて、らくだに乘つたアラブの旅人がゾロ〳〵と澤山通る。らくだの背に紅や青の模樣美くしい絨氈などを敷いて、黑衣で顏をかくしたムハメダンの女達が乘つてゐるのが、あたりの風物が荒涼たるものであるだけに、目にしみるやうな强い印象を與へる。

鐵橋を渡つてから、車はユーフラテスの川に沿つて暫く奔る。こんもりした砂山にかゝると川は視野から消え、砂山を越すとまた右手に現はれる。さして大きな川ではない。水は濁つて蛇のやうにノロリと流れるとも見えず流れてゐるが、少し遠くはなるれと沙漠も川も見分けがつかぬ程に、土に似た色をした水である。それでもさすがに水の威力は驚くべきもので、川岸には青く高くのびた椰子の森があり、川岸にそつて耕されてゐる畑には、折から麥の刈入れを終つた土人達が、日のはげしく照りそめた廣野で穂を干してゐる。

時折、銃をもつた警備の兵達が、そこ〻に立つてゐる。長い川の堤の上を、頭に卷いた白布と、白い寛衣を沙漠の風になびかせながら、アラブの土人が裸馬に乘つてゆく。馬も人も、一物のさへ切るものなき白砂を蹴つて、見るまに砂煙をあとに殘して小さく遠ざかつて行く。見てゐると精悍な野武士の氣迫が感ぜられてくる。

やがて川は見えなくなつた。あとはまた見る限り荒凉落莫たる一面の平沙、草すらがない。時折、美しいるり色の羽をしたブリューバードが地上をかすめて飛ぶ以外には、動くものとては何一つない。道も全く無くなつて、自動車はたゞ長い間隔を置いて遠くにポツンと立つ標的の棒杭だけを目あてに進んでゆく。日はだん〳〵に暑くなつたが、堪えられない程ではない。車が奔るに從つて向ふに大きなトラクターが二、三臺置いてあるのが見えてきた。私はこの沙

漠の眞ん中でこんなものを見やうとは豫期しなかつた。車が近づいて見ると粗末な黑い服をきて妙なまんぢう笠をかぶつた二三十人の者が默々として道傍の土を堀つてゐた。銃を持つた兵が數人立つて監視してゐる。運轉手は、あれは囚人で沙漠の道の修理をして居るのだといふ。所もあらうに、こんな人里から遠くはなれた熱砂の中で、囚はれて勞働をしひらるゝ者、何を希望に朝を迎へ、何を慰めに夜をすごすことであらう。のろはれたる人生と題するにふさはしい沙漠の囚人の勞働よ。私は熱い沙漠を奔らせながら、何か云ひ知れぬ冷めたいものが心の隅をかすめて行くやうな氣持がした。

九時半、ラマヂといふ所につく。こゝは正にオーシスと稱すべき地なのであらう。ちよつとした部落の形をそなへて、バビロン、ホテルといふ名だけは氣の利いた旅人のための一軒の宿もある。今まで通つてきた一物もない砂原とは違つて、沙漠ながら草も生えて居るし、椰子の木や名も知らぬ灌木が澤山に生えてゐる。羊の群が青草を食んで何百となく群れてゐる。

部落の入口に立つてゐる城壁に似た門を通りぬけて、ホテルの前にとまつた自動車から、私達はホツとした氣持で降り立つた。さう永く乘つてゐたわけでもないのに相當に疲れを感じてゐた私達は、伸び〳〵と土を踏んで久しぶりの青草に眺め入つた。何といふ草か、河原蓬に似た莖に、小米櫻のやうな白い花がしほらしくべつとりと咲いてゐた。手折つて見たが何の匂も

なかつた。

ホテルのポーチに腰を下ろして、冷めたいレモン・スカッチを味ひながら、小さな庭を眺める。どこから移し植えたものか、葵の花が一面に血のやうに紅く咲き亂れてゐる。道ばたにはトマトの紅く艶々しいのを並べて賣つてゐる土人の小供もある。今から數十年前までは、ラクダの背に運命を托して、道に迷ひながら五六十日もかゝつて越すより他にこの沙漠を横ぎる道はなかつたのだといふが、時代は自動車に飛行機にあらゆる交通上の不便を征服して、こんなホテルで、粗末ながら一通りの食事も出來れば、冷めたい飲物も自由にとることが出來るやうになつたのである。

これでは一向沙漠も苦るしいことはない。ペルシヤ灣で居ても立つても辛棒の出來ぬ酷熱に苦しめられた時の方がどれ程身に應えたかわからぬ。

「さう大したこともないぢやありませんか。さう暑くもなし、樂なもんですよ」

と一行中の年寄格の人も、元氣にニコ〳〵笑ひながら、棗椰子の森を吹きぬける風を懐しんでゐた。

だが、これこそ沙漠を冒瀆した言葉だつた。こゝまでの道程は、本當の沙漠横斷行から見れば、嵐の前の靜かな前奏曲にすぎなかつたことを、私達はすぐ次に思ひ當るのだといふことを

その時は何も知らずに居たのであつた。

I

二三十分休憩してまた車に乘つた。

いまゝで綠を見てゐたゞけに、ラマヂを出てから急に一變した荒寥たる風光は前に通つた沙漠より一層すさまじく感ぜられてきた。それは氣のせいだけでもなく、たしかにすさまじい沙漠型を示してきた。見るかぎり一木一草もない。たゞ灰白の砂ばかりである。

急に風が出てきた。

これまでは烈日の下に木も草も、岩の割れ目も、くつきりと濃い紫の影を沙上に落してゐたのに、こゝへ來てからはものゝ影が一切失はれて、無氣味な單調と物凄さを加へてきた。砂をまいた風は濛々と廣い野を立こめるために、天日は砂塵にさへぎられてものゝ影を消し、何もかもどんよりとうす暗く、曇つた風光に見せてゐるためなのである。

これはと誰れもが第六感に感ずる無氣味さから、居ずまいを直すうちに、ドツとすさまじい音を立てゝ猛烈なサンド・ストームが向ふから襲ひかゝつてきた。強い風が砂煙といふよりも砂の大きな固りを、眞夏の夕立よりも激しい勢で、ドサリと自動車に叩きつけてきた。見るま

に濛々たる砂煙の中に自動車は完全に包圍されて窓からは何一つ見えなくなつてしまつた。車の奔る前の方を見ると僅かに一尺か二尺さきの土の色が見えるだけである。

私は猛烈なサンド・ストームの中にとぢこめられた心細い自動車を何と形容してよいのか適當な修辭を知らない。たとへば代々木の練兵場の眞ん中に心細くぽつんと立つ自動車を一臺置いて、空から夕立のやうに、すきまもなく黃粉でもぶつかけたと考へて見たら、少しくらひは想像もつくかも知れぬ。

窓といふ窓は悉く二重に締切つてしまつたが、そんなものは物の役には立たない。どこから入るともなく砂は吹きこんで、狹い車の中は外と同じやうに濛々たる砂塵の天地となつてしまつた。私達は生憎皆白服をきてゐたのであるが、もの〻十分とたゝぬうちに全部カーキ色の服を着た人間にかはつてしまつてゐた。膝の上を見るとおかしい程赤い土が盛上つてくる。一寸足を動かせば砂はザラリと落ちて白い服地が現はれるが、見てゐる間にまたすぐカーキ色にかはつてくる。かうなれば誰の顏ももう土で出來た顏である。この世のものとも思はれぬ乞食以上のみぢめな姿に早がはりした一同は、お互に笑ふ所ではない。息のつまつてくる苦しさにロもきけずに目を見合はして居るばかりだつた。

思ふ存分に曠野を荒れ狂つた沙漠の嵐は時に小止みする。そのすきに前面の道は五六間先き

まで辛ふじて見通せるやうになる。必死になつて前の方を油斷なく見つめてゐる運轉手は此時とばかりに速力を早くするが、すぐにまた次のストームの中に卷きこまれてしまふ。車はノロ〳〵と歩るくやうに進みながら荒れ狂ふ嵐のま〻になつてゐるより他はない。車の中はすぐにまた濛々たる砂煙に滿たされて、黃な粉でまぶした十四人が、目ばかり光らせて、ぐつたりと伸びてしまふのである。親にも子にも、ましてや女房などに斷じて見せらるべき光景ではないのである。

このサンド・ストームの眞つたゞ中で、一時半になつたから辨當を食ふ時間だと助手が云ふこんな所で辨當でもあるまいとも思つたが、早朝に出發してゐるので腹もへつてゐる。所は沙漠の眞中である。何事も運轉手や助手の云ふま〻になるより他はない。たなの上にあげて置いた四角なボール紙の箱を下ろす。箱と一所にザラリとかたまつた砂が頭の上に遠慮なしに落ちてきた。四角な箱は今朝、ホテルで人數だけこしらへてくれた辨當なのである。あけて見ると、サンドウキツチと胡瓜が二本、それにうで卵が二つ、オレンヂと棗の干したのが入つてゐた。食つて見ると空腹のせいかなか〳〵うまい。特に靑くて長い生胡瓜は今まで味はつた胡瓜の中では一番うまかつたやうな氣がした。だが口のはたを砂で眞黑にした連中が、丸ごとの胡瓜を横かぢりしてゐる圖などは、いよ〳〵女房などには見せたくない愛想のつきた恰好であ

る。紙でつくつたコップに備へつけの水槽から水を汲んで、のんでゐると底の方は細かい砂で赤くなつてゐた。

腹がへつてゐたせいか、砂まみれの辨當も殘りなく平らげて外箱をすてやうとすると、大きな字で何か印刷してある。讀んで見ると

If we please you, tell your friends.

If we don't, tell us.

と書いてある。友達に宣傳しろも、私に苦情を云へもあつたものか、こんな辨當の味などは地獄の鬼にでも話す他に對手はありやうはない。

やがてストームはをさまつて、また荒寥たる一面の平沙が遠くまで見え出した。今までは氣がつかなかつたが、他の二臺の自動車も向ふの方を砂煙を立てながら奔つてゐる。よくもこんな沙漠の嵐の中で道も迷はずに同じやうな步調がとれたものだと思ふ。

車は急に速力を加へ出した。さへ切るものゝない廣野であるからフルスピードで奔つても何の不安もない。誰れもかれもホッとして大きな安心の溜息をついてゐると今度は猛烈な暑さがヒシ〳〵と迫つてきた。世の中に二つゝことはないものである。

砂塵地獄から逃れて今度は酷熱の地獄である。私達は浪に風に自由にほんらうされる小舟の

やうに、いくぢなくぐたりとなつてしまつた。

かうして何時間奔りつゞけたことか、慾も得もなくのび切つて搖られるまゝに搖られて行く。ぼつとした頭をもてあましながら、ものうい眼で永遠の單調とも評すべき窓外の沙漠を眺めてゐると、ポツリと原の眞ん中に何かゞ横はつてゐる。ひとみをこらすと、らくだの死屍が幾年の風と暑さにさらされたのか、綺麗な白骨と化して沙上に横はつてゐるのである。骨も孤愁に泣くか。淋しい沙漠の風光である。

夕方の六時、やつとラトバに着いた。こゝはてふどダマスカスとバクダッドの眞ん中にある沙漠の中の要塞で、旅行者のために洗面の水と簡單な食事の用意もしてあるのだといふ。すつかり疲れ果てたからだを起して車から降り立つて見ると、嚴丈な石造りの城壁をめぐらした、小さい山塞に似た無氣味な建物である。門の兩わきには嚴重に武裝した兵士が立つて居るし、機關銃が二つばかり据えつけてある。物騷な氣持が何となくあたりに充滿してゐる。三臺の自動車が前後してこの要塞の前に横づけになつて、私達や、若い婦人等をつれた英人や佛人達の一行がゾロ〳〵と降りて門を入ると、どこから集つて來たのか、汚たないルンペンのやうな物騷な面がまへをした土民が八九人ばかり、いやに傍につきまとつて來てジロ〳〵と人を見る。薄氣味のわるいこと夥しい。

門の中には平屋づくりの粗末な木造の家が一棟、鍵の手なりに建てられてゐる。扉も窓も低い田舍家そつくりの粗雜此上もないものである。私達は家の粗末なのも何も一向氣にはならなかつた。先を爭ふやうにして、いきなり洗面所にあてられた土間に飛込むと、四つ五つの洗面器が置かれてある。荒くれた山賊のやうな大男のボーイが、無器用な手でバケツから水をザーッとあけてくれる。顏を一なですると見るまに洗面器の水は眞赤な色に變つてしまつた。うがひをすると咽喉から埃が出てきた。

どうやら人間らしい氣持に立戻つてスモーキング・ルームに入る。せまい部屋なので二三十人も入るともう椅子もない。その隣りが食堂になつてゐるが、テーブルも七つ八つしかないので順番を待つて代り〳〵に食ふやうになつてゐる。やつと番が來て食卓につく。こゝで飲んだレモナードの一瓶が何と天下の美味であつたことか。

同行のK君が便所へ行つて、やゝ暫くたつてから妙な顏をして歸つてきた。どうしたのかと聞いて見ると、元氣のいゝ同君が序だと思つて一寸外へ出てそこらを見て廻つて歸つてくると城塞の人は吃驚したやうな顏をして氣味のわるい話をしたといふのである。何でもこの城塞の近くの部落土民は、種屬が入りまぢつてゐて兇暴無比の氣質をもつてゐる。物を盜むことよりも、血を見ることそれ自身が大好きで、鬪爭心が強く、うつかり旅の人が一人で外へでも出ると、不意に理由もなくピストルでうち殺されることなどがある。一人でフラ〳〵外へ出てよくまあ無事だつたと云はれたのださうである。そんな話をきくと何だか尻がムズ〳〵するやうな氣がしてきた。

二時間程休息をして午後九時出發となつた。沙漠に落ちる日は早い。もう夜が更けたやうな眞暗やみの中を門を出る。自動車にのるまでの小暗い闇の中に、三四人づゝ固まつて物騷な顏をした土民がおちこちしてゐる。一言も口をきかずにジロ〳〵と眺めてゐるだけに餘計無氣味なものが、こちらに迫つてくるやうな氣がするのである。

埃だらけの大きな自動車は今度は何一つ見えぬ闇の中をまつしぐらに奔り出した。

午後十一時、突然自動車はピタリととまつた。助手も運轉手も二人とも急いで車からとび下りた。私達は何事が起つたのかとびつくりして外をのぞいた。どうしたのだといふと故障が起つたから直すのだといふ。故障はなか〳〵直らなかつた。私達は一人降り二人降り、いつか皆車の外に出てしまつてゐた。

靜かな、そして何とも云へぬ物寂びしい世界が外に待つてゐた。晝間あれ程に暑かつた沙漠も今は肌寒い程の冷めたい夜の領にかはつて、何一つ見えぬ薄暗い夜ながら、あたりの廣漠たる感はひし〳〵と感ぜられる。遙か向ふの地平線と思はれるあたりの空に、八日ばかりの血の

やうに細く赤い月が、一つかゝつてゐる。遠くから寄せるらしい風の音がきこえてきた。どことなく潮騒に似た幽玄な音である。私はすつかりいゝ氣持になつて誰にはゞかる所もなく大地の砂上に大の字になつて見た。廣漠たる天と地とを吹きぬけてゆく夜の風が冷やゝかに面上をなでゝ行つた。

やがて故障も直つて車はまた奔り出した。

まだ今夜は夜通し此沙漠を奔りつゞけて、明日も畫近くでなければ青い木や草は見ることが出來ないのである。車内の燈火は全部消して奔るので、いやでも目をつぶつて、寢られもせぬ一夜を寢たまねでもして過すより他はない。ダマスカスへつくまでは、六百哩の大きな沙漠の眞ん中で何を望み、何を想つた所で詮すべもない。まゝよと何もかもあきらめた氣持で、椅子の背に頭をもたせかけると、さつき運轉手が拭いたばかりの窓ガラスから、もう餘程中天に近くなつた八日の月が、荒凉たる夜の空に、いやにさむ〴〵と凄く光つて見えた。

土耳古雜信

I

昨日の夕方ダマスカスを發つた汽車は、けふ一日近東の野を奔りつゞけて、明日の夕暮でなければイスタンブールにはつなかい筈だ。

沿道の風光は實に美しい。高原地帶とは云へ、窓から見る山々はなだらかに圓く、あとは見る限り一面の平原だ。見はるかす青々とした天然の大牧場に、山羊や牛の群が長閑さうに草を食つてゐるのを見ると、平凡ながら繪のやうだと形容するよりない。野にはいろ〳〵の草の花が咲いてゐる。菜の花に似た草は、少し遠くから眺めるとべつとりと野の果まで黄色く塗りつぶして、日本の春を偲ばせる。紫の花、赤い花、高原であるためか、私は名も知らぬ草が多いが、摘みとりたいやうな可憐な姿をして、いくらでも咲き亂れてゐる。

汽車が通ると鴻ノ鳥が二三十羽も一時に空高く舞上る時もある。鶴に似て翼の大きい此鳥が悠々と群をなしてとんでゐる姿は、長閑な感じのするものである。かさゝぎも澤山とぶ。青草を食つてゐる牛の群の上を敏捷なこの鳥が背をかすめるやうに飛んで、向ふの花野の中に影を消す。これもまた美しい詩の領分だ。

かういふ美しい自然の中を汽車はたゆみなく奔りつゞけて、一二時間に一つ位の驛にとま

る。山間の高地の停車場であるから、すべてが捨てがたい野趣に富んでゐる。大きな湖水のそばにあつた驛では、物賣りの子供達が競爭のやうに窓際に奔りよつて、いろ〳〵の田舍らしいものをすゝめる。鉢に植ゑた紫陽花を一つ大切さうにかゝえて、いゝ花だから買へといふ子供がゐる。四五尺も勢よく伸びた莖の上に、大きな滿開の花が二つ、孔雀の羽のやうに派手に咲いてゐる。名物と見えて櫻ん坊賣りも多い。可愛らしい氣の利いた小さい籠につや〳〵としたルビーのやうな實を山のやうに盛つたのを持つてゐるものもある。櫻ん坊を十ばかりづゝ團子のやうに串にさして、兩手に持ち切れぬほど握つて走つてゐる者もある。發車時刻が來ると改札口の上にかゝつてゐる大きな鈴を、驛夫がガラン〳〵と鳴らす。すべてが野趣滿々たる光景である。汽車が奔り出すと野路に立つて見送つてゐる子供達が、一齊に手をあげて、萬歲を叫ぶ。まるで日本の田舍を旅してゐると同じやうな氣持にもなつてくる。

自然はかくまでに美しく、土民はかくまでに純情で素朴だ。しかし國としては、中東、近東は決して愉快な印象の與へられない所である。シリアのダマスカスでも、大きな一流のホテルでありながら、何を頼んでも何を買はせても一割づゝ勘定をつけ足す。一割のサービス料としてそれも結構ではあるが、郵便切手を買つても、日本へ電報をうつても一割餘計にとられるには、吾々にはどうしても腑に落ちかねる話である。シリアだけがかやうな調子なのかと考へて

ゐた私は、いよ〳〵汽車に乘つてトルコ領に入つてからは、これに輪をかけたことが次ぎ〳〵に現はれてくるのに驚かされてしまつた。

汽車の食堂に入るとメニューが置いてある。手にとつて見ると、端の方に印紙が張つてある。何のためかわからぬので聞くと、トルコでは苟も廣告の目的をもつた紙にはすべて收入印紙を張つて、國家に稅を拂はねばならぬのださうである。あらゆる廣告ビラはすべて一枚々々印紙を張らねば違法になる。食堂のメニューと雖も廣告の目的をもつた紙には相違ない。それにしても、どうも驚いた國だ。

食堂に入つてウヰスキーを一盃注文すると、百二十五フヰルスターとられた。一磅がざつと六百フヰルスターと見て、日本の金に直せば四圓が所である。一ぱい四圓のウヰスキーは、インチキカフエーにしても相當以上のものだ。全く以て驚いた國である。

汽車の中でもトルコ領に入つてからは何もかも法外に高い。小さなマツチ一つが五フヰルスターする。日本金にして一個十五錢。これこそ日本中探しても、これ程高いマツチはない。それ程高いマツチなら一層誰もかれもライターでもつかつたら、よささうなものだと思ふが、トルコの國内ではライターをつかへば六ケ月の懲役だといふ。いよ〳〵驚き入つたる國である。

明日はいよ〳〵イスタンブールにつく。土耳古の國内に入つたらどんな風であらうか、興味

もあるが、いさゝか恐ろしい氣もする。

Ⅰ

汽車はハイドラパサについた。停車場のすぐ前の埠頭から船で二十分程、入海を渡ると向ふ岸がイスタンプールである。

きのふは國境に入る前に所持金を全部申告させられた。さすがに、信用狀や、現金入りの財布まであけて見せるには及ばなかつたが、正直に分類して書きだした全部をパスポートにすつかり書き入れられてしまつた。爲替管理下にある國として、旅人はこのパスポートに記入した金額をへらして出國するのは當然だが、もし出てゆく時に餘計に金を持つてゐるのが發見されゝば、すぐに引掛るわけである。日本を出てからこゝ土耳古にくるまでは、所持金調べにはぶつからなかつたが、いよ〳〵こゝで皮切りをしたわけだ。バルカンは今では世界で有數な爲替管理、貿易管理の國だ。恐らくこの一角位、貿易を極度に制限する國がかたまつてゐる所は、他にはないのである。これから先きはドイツまで國境毎に所持金申告にぶつかつて行く。自分の持金がいくらあると、いやでも認識させられる制度も、浪費癖のありすぎる私達にはいゝ藥かも知れない。

宿のホテル、ペラハラスは立派な絨氈と良い調度を揃へた良い宿であつた。イスタンプールといふよりも、前名のコンスタンチノープルの一流旅館といふにふさはしい。だが、どこか冷めたい空氣に滿ちてゐる宿である。新鮮な味などはどこを探しても見出せない。

イスタンプールについた第一の印象は石段ばかりある都だといふことである。琉球は石原、小石原といふが、こゝも正に那覇あたりを歩いてゐるやうな氣がする。まさかに草鞋をはけまいが、さぞ靴のいたむことだらう。

Ⅱ

けふは大使館で武者小路大使から晝飯の招待をうけたが、弱つたことが出來てしまつた。着てゆく服がないのだ。昨日イスタンプールに着くと荷物は稅關にあづけて私達は着のみ着のまゝでホテルに來た。これは今度の旅のしきたりで、あとに殘つた稅關係りのものが、すぐに仕末をつけて運んで來ることになつてゐた。所がこゝイスタンプールに限つて一時間待つても、二時間待つても荷物は屆かない、皆心配しだした。樣子を見に人を出すと、その報告に、稅關が馬鹿に八釜しくて全部のトランクやスートケースを底から調べ出して文句をつけてゐるのだといふことだつた。少しばかりの見本の型などを持つてゐるものさへ、うるさく稅をとるのだ

といふさうである。そんなものはいくらでも無いから税を拂つて荷物を早く取よせたらいゝではないかといふと、いやもつと非常識なことを云ひ出してゐるのだといふ。

私達の一行は十六ミリを持つてゐるものが多かつた。私自身も珍らしい地方の風俗の面白さに、もうかれこれ二千呎以上も寫して、スートケースの中には澤山寫しずみのフヰルムが入つてゐた。税關吏はこれにも税をかけるといふのださうである。旅人に對して餘り非常識すぎる。

大體のことなら我慢しやうとした私達も流石に少々腹を立てゝ、すつたりもんだりしてゐるうちに、税關閉門の時間が來て、昨日はたう〳〵荷物が手に入らずに夜をすごしてしまつた。それが今朝になつてもまだ仕末がつかぬのであつた。

まさかに大使館で御馳走になるのに砂と埃で眞黒になつた、ノンネクタイの白服姿で出かけるわけにもゆかない。散々氣をもんだ結果、つまらない税だと思ふものまで支拂つてどうやら畫近くなつてやつと二日ぶりで自分のスートケースにお目にかゝることが出來た。

灣を一望の下に見下ろすことの出來る美くしい大使館の樓上から、大戰當時こゝに逃げこんで、そのまゝ土耳古のものになつてしまつたのだといふ獨逸の軍艦を眺めながら、土耳古といふ國はどこまでべらぼうな國なのかと苦笑せざるを得なかつた。

畫から街を見物に出かけた。ホテルの帳場へ行つて持つてゐたボンドの紙幣を、土耳古貨に

換へて貰はふとすると、こゝでは外國貨幣は一切取扱ふことを禁ぜられてゐる。面倒でも中央銀行まで行つて直接に代へて貰つてくれと云はれた。これも今までの旅になかつたことで、どこでも一流のホテルはボンド紙幣の兩替どころか、こつちを信用して居れば、クツク社のトラベラース、チエツクでもそのまゝ兩替をしてくれた所が多い。何といふ面倒な融通の利かぬ國だらうと怒つて見てもどうにもならない。仕方なしにわざ〳〵街の中の中央銀行まで出かけて兩替をした。これがまた一々手續書を出して、しかもそれに收入印紙を貼らされるのだから、何とも恐れ入る。食堂のメニューに一々收入印紙をはつて税を拂ふやり口がこゝでも同じやうに適用されてゐるわけなのだ。

やつと土貨に換へて、まづ煙草を買ひに小さな角の店に入ると、その店の子供でも書いたらしい自由畫の何かのビラが壁の上にかけてあつた。しかもそのビラの端にはちやんと印紙がはつてある。子供に書かせたビラ一つでも廣告の用をなす以上は、税を納めなければブラ下げるわけにはゆかぬといふわけらしい。いよ〳〵以て徹底した重税の國である。

街を見て廻ると、さすがに古都コンスタンチノープルの色と匂ひには捨てがたいものが多くあつた。一四〇〇年の建設にかゝつて、最初はキリスト教の教會であつたものを、土軍が奪取して回教の寺に直したのだといふソフイア寺などは、いかにも昔風の大まかな味のするいゝ寺

であつた。會堂は優に一萬人を容れると云はれてゐるが、ステインド・グラスの壯大さにも物さびた時代が染め付けられて、今こそ電燈にかはつてはゐるが、無數につり下げた燈明にオリブ油をともしたといふ昔は、さぞ床しい美くしさを見せたことだらうと思はれる。

ビザンス・ミュゼンと呼ばれる美術館などは一八四六年にシリアから持つて來てしまつたのだといふビザンチン時代のすばらしい遺物が數限りなく陳列してある。アレキサンダーの墓にほどこされてゐる彫刻などは、現代といへども遠く及ばないと思はれる精巧なもので、藝術といふものがいかに過去に於て偉大な足跡をすでに示してゐたかに驚かされるばかりである。ボードヴイル・オベリスク、金色にドームの光る寺々。すべてが、すばらしい。

すつかり古都の趣に陶醉して、夕方になつて、ホテルへ歸るために、ゴタ〳〵した街をドライブしてくると、石だゝみの阪道の兩側に、夕の買物に出かける人達を引つけやうとさま〴〵の市が、果物や魚や野菜などを山のやうに積み上げて頻りに客をよんでゐるのが見える。不思議にもこゝで賣つてゐるものは魚でも野菜でも日本によく似たものばかりである。胡瓜や茄子が並んでゐたり、小アヂや鯖などが生き〳〵とした肌を見せて行儀よく並んでゐるのなどを見ると、東京のどこかの裏街の市場を見てゐるやうな氣持もした。だが市場の前をぬけて大きな商店街や會社らしい建物の立並ぶ大通りへ出ると、不景氣の風はこゝにも深刻に吹きすさぶと

見えて、閉ざされた扉の上に貸家札のはりつけられたのが、あちこちに目につく。それもいゝが、その貸家札には何と一つ〳〵矢張り收入印紙が叮嚀にはりつけてある。成程貸家札といへども廣告の一種には相違ないのだと初めて氣がついて感心したことだつた。

IV

朝起きて窓のカーテンをひいて見ると、眼下に見下ろせる街の兩側の家には悉く國旗を出してゐる。赤地に三日月と星を白く出したトルコの旗が朝風にひらめいてゐる姿は、異國情調のゆたかな感じのする風光である。けふは何とかの祭日だといふことだ。それもいゝが、けふに限つて繪はがきを出さうとすれば、規定の切手以外に、特別に祭日の慈善切手をはらねばならぬのださうである。どこまで祟る印紙かと少し愛憎がつきる。

イスタンブールについてから一日二日の中に私はどうやら躍進トルコの現狀を內容的に考へ直さなければならぬやうな氣がしてきた。現在のトルコがケマルパシヤの獨裁政治下にあることは、日本で考へてゐたことも、現在こゝで見てゐる所も全く同じである。憲法こそ議會第一主義といふことにはなつてゐるが、政黨と云つた所でガヂに反對の立場をとつてゐた自由黨は結局壓服されて、今では國民黨が唯一の政黨だと云つて差支へない。だから政黨はあつても事

實に於てはケマルパシヤと副大統領のオスメツドパシアの思ふがまゝで、純粋の獨裁政治だと云つて然るべきものである。ある公立の病院などでは病人の寢てゐる大きな部屋の窓ガラスが一枚缺けてそこから風が自由に入つてくる。患者に有害なのはわかつてゐるので早くガラスを入れかへたらよささうなものであるが、それを病院で勝手に修繕すればお咎めを蒙る。どうしてもずつと上司のものが發見して、そこから命令が出るといふ形式にならねばガラス一枚でも面倒なことになるのださうだ。獨裁の形式化した惡弊の一つの良い例とも見る事が出來る。

しかしこゝまで徹底し、こゝまで下のものに一切口を出させぬやうにしなければ、獨裁の實効はないのかも知れない。とにもかくにもケマルパシヤの一九二四年の驚くべき大英斷で、トルコの外貌が革命的の大變化を齎したことは、外から觀てゐると痛快なまでに華やかなものであることは間違ひはない。正に外から見てゐたに違ひない私はケマルパシヤの十年の事蹟に英雄崇拜に似た驚嘆をさへ持つてゐたのであつた。外國人にはとても何が書いてあるのやら見當もつかぬ奇妙なトルコ文字は、ケマルパシヤの力で誰れにもわかる横文字に變つた。眞赤なトルコ帽や婦人の目ばかり出した服装は命令で一掃されて、イスタンブールの町を歩るけば、いはゆる洋装の婦人や、中折帽の男ばかりである。もしも昔ながらの土耳古の風俗に接したいと念ふ人があつたら、土耳古に來たら失望する。去つてシリアに行け。そこには赤いトルコ帽を

かぶつた大男が小さな驢馬にふみまたがつて、ドンキホーテのやうな恰好で大通りを乘り廻してゐるし、眞黑なかつぎをすぽりと頭からかぶつた女が、道行く人に眼ばかり美しい印象を與へて、チラリと目の前をよこぎつて行く。それ程に現在のトルコは外貌を變へ、未開國の氣分から、文化國への外見へと躍進してしまつてゐるのだ。外から見てゐるものにとつてケマルパシヤの革命が、すばらしく華やかに、すばらしく近代的色彩の濃いものとして映るのは一應無理のないことだと思ふ。

だが實地に來て見ると、此華やかな、すばらしい革命の背後には、いはゆるトルコ民衆の血と汗との容易ならぬ犧牲が拂はれてゐることを見逃すわけにはゆかない。民衆は啼かない蟬のやうに默つてゐる。しかし默つてゐることゝ、革命を讃美して平和を樂しんでゐることゝは違ふ。民衆は默つて苦しんでゐるのだ。力の前に屈して、ひどい生活をたゞ我慢してゐるのだ。彼等は疲れ果てゝゐる。

土耳古の民衆の疲弊は、田舍へ行けば支那の奥地よりも或は購買力の枯渇した點ではまさつてゐるかも知れないとさへ云はれてゐる。この疲弊はもとよりケマルパシヤの政治の爲めではない。平凡な言ひ草ではあるが世界不況の波の中にまきこまれた爲めの疲弊には違ひない。歐洲大戰前には精々入超は三千萬圓位のものだつたのが、戰後は忽ちにして倍以上にふえた。土

貨は激落した。あはてたトルコは世界で最初の爲替管理を行ひ、貿易管理を行つた。今日でこそ爲替や貿易の管理は世界的の風潮になつて來て何の不思議もないが、最初の皮切りをやつた土耳古は、その困憊さが人の注目をひいたのも無理はない。しかしこの窮狀は誰れの罪でもない、世界的の大きな流れの爲めだ。私は、だからトルコ民衆今日の疲弊を何もケマルパシヤの政治と結びつけて、徒らなる非難を加へやうとは考へない。しかしその疲弊の一部はそれに起因しておることも、これまた否定することは出來ないと思ふ。

バルカンは弱小國の寄合だ。その中でトルコは武力的に最も光つてゐる國だ。大戰には負けた國だが軍備の制限も受けておらず、今の所、師團も十八からある。兵隊は皆義務兵役で強くはあるし、まづ近隣に比なしといふ所である。この國に獨裁の威をふるふケマルパシヤとしては對外的に軍備の充實をはかる必要があると同時に、實は對內的にも武力の背景がなければならぬので、殆んどその全力を軍備にそゝいでゐる形である。國防費は全歲出の三分ノ一以上、ダーダネルス海峽といふ大きな癌をもつてゐるだけに海軍にも力を注ぎたいのだらうが、目下の所では飛行機の充實が一番の關心事らしい。一九三三年の十月廿九日はケマルパシヤの革命十周年記念日で、列國が何れもお祝に參加して國際的の祭騷ぎをしたのだが、その時ロシアは特に陸相のボルシロフを特派して、お土產に飛行機を三臺献上した。一體ケマルパシヤの革命

そのものが、ロシアの援助によつて成功したものであつて、兩國の緣は深い。この頃では單に軍事的でなしに經濟的にも甚だ密接な關係を深くして、ロシアから借款した金で綿布工場や砂糖工場の建設中であり、技師も機械もロシアから送られて、二三年後には日本の綿布などは、土耳古から一掃するのだと威張つてゐる。こんなわけでケマルパシヤ自身は共產主義ではないのだが、土國內の共產黨の壓迫や、檢擧などは成可く遠慮勝に目立たぬやうにしてゐる位である。こんな狀態の下にあつて、ロシアが革命十周年のお祭りに飛行機を献上したなどは、流石にどうも拔目のないやり方だと感心させられる。どうもケマルパシヤといふ人は餘程飛行機好きだと見えて、ちやうど今、イスタンブールにペルシヤの王樣がやつて來てゐるが、歸りにはトルコから矢張り飛行機を一臺差上ることになつてゐるのだといふことだ。バルカンや近東・中東では、贈答品は飛行機に限るものらしい。

こんな風で、土耳古は今軍備の充實に汲々としてゐる。しかし先立つものは金であり、民力は疲弊して財源には乏しい。そこでいや應なしの增稅となつて私達のやうな旅人にも、來て見ていきなり目につくやうな、到る所の印紙稅ともなつて現はれて來てゐるのである。何でもきいて見ると所得稅などは目玉のとび出る程の高率で、外國人のやうな特殊なものに對してすら收入の三割以上は、いや應なしに取り上げてしまふらしい。普通の商品やら、市民の生活の上

にかけられる税はすばらしいもので、國税、市税、營業税と云つたやうなものゝ上に、國防税だとか慈善税だとかいふやうな特別な課税負擔がある。綿布や蓄音機、皮製品などは、あらゆる税の上に別にまた國防税がかゝるのだといふ。商品にこんなものがかゝればそれは否でも消費者の上に轉嫁されてくる。國民の生活が苦しくなるのは當り前だと云つて良いだらう。

けふは夕飯を何とかいふ高臺にある料理屋で食つた。庭に食卓を出して夜の冷めたい風を樂しみながら、音樂を樂しみつゝ攝る食事は流石にいゝ氣持がした。目の下に海が一面にひろがつて、折から中天に登つた大きな月が、キラ〳〵と銀鱗のやうな光を海面におどらしてゐた。餘りのいゝ月に、そのまゝ宿に歸るのも勿體ないやうな氣持がして、暫く町を歩るき廻つて見た。石疊の舗道を歩るき乍ら、どこか活動寫眞でも見に入らうではないかと連立つた土地の友人に相談すると、いやその活動寫眞だが、實は國防税やら何やら近頃餘り税の負擔が重くなつて、とても經營が六つかしくなつたので、全市の活動寫眞館は一齊に休業してたゞの一つも開いてゐないのだといふ答へだつた。

V

見るだけのものを見、調べるだけのものを一通り調べてしまつたら、もうイスタンブールに

永く留つてゐる氣はしなくなつた。けふは夕方にこゝを去つてバルカンの中へ入つて行かふと思ふ。

最初この國へ入つた時に關税で一悶着起した時の不愉快な印象は、いつまで經つても依然として薄らがない。日本人に對して餘りいゝ感情も持つてゐないらしい空氣が自然と、こつちに反映して來るのかとも考へたが、どうもこれは列國の從來の對土政策が、大分禍してゐる所が多いやうだ。一言で云へば列國はバルカンの國々に對して、特にトルコに對しては、内はどこまでも強い所を藏しながら、外は柔かく、おだて上げておく方針をとつてゐる。これが大分に土耳古を思ひ上がらせる原因になつてゐるのではないかとも考へられる。

この列國の外柔内硬の對土方針はいろ〳〵の悲喜劇の幾幕を演じさせてゐる。誰れも知つてゐる通りにイスタンブールは今日では、トルコの首府ではない。ケマルパシヤは首府を新らしい都アンゴラにきめてしまつた。所がこのアンゴラは早く云へば荒野の中に假りに造られた町見たいなもので、イスタンブールとは問題にも比較にもならぬ落莫たる所である。しかし何と云つても今ではイスタンブールは商業の中心地に止まつて、政治の中心はこの荒野の中の町に移つてしまつてゐるわけだ。そこでケマルパシヤとしては自分が新たに定めた首府が一日も早く、すばらしい首都らしい立派な形態を備へるやうになつてくれぬと威嚴にも關するといふの

で大いにあせつてゐるが仲々さううまくは行かない。そこで此ケマルパシヤの心理を洞察した列國が、競爭的にアンゴラにすばらしい大使館を建設して、パシヤの歡心を得やうと競ひ出した。ドイツなど貧棒なくせに大使館には五百萬圓の巨費を投じた。佛蘭西も四百萬圓、英國もほゞ同額、何れにしても、新首都アンゴラの町を引立たせる豪勢な建築であることは間違ひがない。家を建てゝゐないのは、米國と日本だけ。どうも日本もこゝらで二三百萬圓も出してすばらしい豪勢な大使館でも建てゝおどかす必要がありさうだ。だが列國はかやうに競つて、すばらしい大使館をたてゝケマルパシヤの御機嫌を伺つてはゐるものゝ、誰れだとて不便きはまる落莫たる荒野の都には閉口するものと見えて、幸にもアンゴラには良い醫者がないのを良い口實にして、大使館の連中は頻繁に齒痛を起して、その療治に代る〳〵イスタンプールに出てくるのださうである。笑へない外交祕話とでもいふ所だらう。

經濟政策から見ると、列國の內硬外柔の對土方針は、もう少し念の入つたおかしなエピソートをさへ生み出してゐる。前信にも書いた通りに、トルコは世界で一番最初に爲替管理や貿易管理をやつた云はゞ貿易國家統制の發祥の地だ。そこで初めてトルコが貿易上のバーター制を實施した時に、獨と佛とは、御無理御尤とばかりに卒先してこれを承認した。佛蘭西などは御叮嚀にも、一對一のバーターで無しに、自分の方から土耳古に輸出する額を、土耳古から佛蘭

西に輸出する額より二千萬圓も少くして決めた位だつた。所がバーター制であつてトルコに物を賣つても金を受取るわけにはゆかない。代金はトルコの中央銀行に保管されて、それがトルコから買つたものゝ代金支拂に充當されるわけである。佛蘭西は二千萬圓もプレミアム附きでバーターをきめたのではあるが、賣るものだけは賣つても買ふものは何もない。そこで佛蘭西の受取勘定に屬する預金がトルコの中央銀行にたまるばかりでどうにもならない。云はゞこれ程馬鹿らしい無駄なことはないわけだから、佛蘭西としては何でもいゝからトルコから品ものを買つて、賣つてたものと双殺しやうと考へて政府は特別に調査委員をトルコに派遣して、買ひ物の研究をさせることにした。

委員はトルコにやつて來ていろ〳〵取調べて見たが、一向どうも飛びついて買ふやうなものが見當らない。やつと見付かつたのが鷄卵だつた。それはトルコから餘計に物を買つてゐる國はまづ米國とスペインで、其內でもスペインはトルコが自分の國のものを一向買つてくれぬのに業を煮やして、それまでトルコから澤山輸入してゐた鷄卵の代價を支拂はぬと云ひ出した。大手筋がこんな難題をもちかけた爲めに鷄卵の價格は暴落してきた。この有樣を見た佛蘭西の調査委員は、今から鷄卵を買へば立派に引合ふと考へて、早速これを本國に通告してやつた。この報告を受けた佛蘭西の政府は非常に悅んで、これで中央銀行の金庫の中に、焦げついて欠

伸をしてゐた金の使ひ途も出來たと、早速トルコから鷄卵輸入の手續きをしやうとして見ると何と驚いたことには佛蘭西政府自身が鷄卵は輸入禁止令を出してゐて、こいつを改正せねばどうにもならないことを發見したといふまるで笑話のやうなエピソートさへある。

こんな馬鹿らしいやうな幾多の話を生んだ列國の對土態度は、要するにロシア、ドイツ、佛蘭西といふやうな國々が、政治的に經濟的に三つ巴となつて土耳古をめぐつて互に牽制し合つてゐる爲めに、お互に力は持ちながら土耳古を壓迫することが出來ず、その力を底にひらめかしながら、表面は御世辭と懐柔で丸めやうとかゝつてゐる所に、一切の原因が有してゐるのだ。考へればバルカンは實に六つかしい謎の地帶だと思はざるを得ない。

いよ〳〵今日は夕方にイスタンブールを立つので、朝のうちにまた銀行へ行つて、手續書に印紙をはらされた上に、高い爲替率の土貨を受取つてきた。何しろこゝを出てゆくだけでも土耳古の出國税、ブルガリアの通過税、ユーゴースラビアの入國税を合せて千六百二十五フキアスター支拂はされるのだからやり切れない。日本の金にしてざつと五十圓だ。

午後ホテルに歸つて勘定書を取よせて見ると、白服のプレスが一着二百フキアスターづゝとられてゐる。私達はバクダットからダマスカスまで埃だらけのシリア沙漠を旅行して廻つたので白服は澤山汚ごしてしまつてゐた。ダマスカスのホテルで洗濯に出さうかとも思つたのであ

るが、餘りぼりすぎるホテルだつたので、イスタンブールまで持つてきてしまつたのだつた。それがこゝでプレスさせて見ると一着二百フキアスター、私は四着分出したので八百フキアスターとられてしまつた。ワイシヤツや小物を合せてざつと千フキアスターになつてゐたので日本の金にすれば三十圓以上である。洗濯代で日本なら立派な服が出來ると誰れも呆れた顏を見合せたのだつた。

どうも土耳古に長居は無用らしいと私達は大急ぎで鞄の整理に取かゝり出した。誰れもかれも日本位いゝ國はどこにも餘り無いなとしみ〴〵と感じながら。

沈默の塔

「高い塔が夕の空に聳えてゐる。

塔の上に集つてゐる鴉が、立ちさうにしては又止まる。そして啼き騒いでゐる。

鴉の群を離れて、鴉の振舞を憎んでゐるのかと思はれるやうに、鷗が二三羽きれ〳〵の啼聲をして、塔に近くなつたり遠くなつたりして飛んでゐるのである。

疲れたやうな馬が車を重げに挽いて、塔の下に來る、何物かゞ車から卸されて、塔の内に運び入れられる。

一臺の車が去れば、次の一臺の車が來る。塔の内に運び入れられる品物はなか〳〵多いのである。

己は海岸に立つて此樣子を見てゐる。汐は鈍く緩く、ぴたりぴたりと岸の石垣を洗つてゐる。

市の方から塔へ來て、塔から市の方へ歸る車が己の前を通りすぎる。どの車にも軟い鼠色の帽の鍔を下へ曲げたのを被つた男が、馭者臺に乘つて、俯向き加減になつてゐる。

不精らしく歩いて行く馬の蹄の音と、小石に觸れて鈍く軋る車輪の響とが單調に聞える。

己は塔が灰色の中に灰色で畫かれたやうになるまで、海岸に立ち盡してゐた。」

これは鷗外の「沈默の塔」の冒頭の敍景である。新らしい思想への壓迫を諷刺したこの小說

は、沈默の塔そのものゝ描寫は云はゞ枕で、この短かい數節だけに限られてゐるが、生ま〳〵しい陰慘な名文は十數年前に初めて、これを讀んだ時から深い印象をうけてゐて忘られなかつた。一度はその塔を實地に見たいものだと思つてゐた。幸ひ今度はボンベイの滯在中に塔を見る機會がやつてきた。鴎外の名文は實際の沈默の塔の光景とは大分へだゝりのあるものだつたのを發見すると共に、烏咀屬の無氣味さは一層深刻に胸にこたへてきた。

沈默の塔は孟買市外のマラバー・ヒルといふ小高い丘の上に立つてゐるパーシー屬の葬ひの塔である。およそインドの民衆程複雜な宗教や習慣の相違から、對立し抗爭してゐるものはない。ムハメダンとヒンヅーとパーシーでは、同じインドの住民とはいつても、その生活は丸で相容れぬものをお互に擁して居る。牛を食はぬもの、豚を食はぬもの、肉類も酒も用ひぬもの、お〳〵その信ずる信仰に從つて各自の律戒を守つて嚴重な生活を營んでゐる。そして彼等はお互に常に血の出るやうな爭鬪をつゞけてゐる。土民の生活にとつて宗教位强いものはない。同時に宗敵程、天地も相ゐれぬ程憎いものはないらしい。英國のインド政策はいつもこの幾つかの相爭ふものを巧みに利用して、アンチドートによつて英國へ向ける一致の力を分散させて、お互に相爭はさせる方向に轉じさせてゐる。ムハメダンもヒンヅーも奇妙な律戒を守つた生活を營んでは居るが、中でもパーシー屬は私達から見れば實に陰慘な律戒を守るものと云はなけ

ればならぬ烏咀の民である。

種屬から云へばインド人の中でパーシー屬は最も數の少いものである。何千萬といふ他の種屬に較べて彼等はインド全體に僅かに十萬人を算するにすぎない。それもその中の六萬人は孟買に集り住んでゐる。非常に智的な頭のいゝ土民ではあるけれども事火教を奉ずるがために死んでも火で燒くことをしない。土に埋めることともしない。死骸はすべて鳥の餌食として喰ひつくさせてしまふのである。マラバー・ヒルの森の中にある沈默の塔は、彼等パーシー屬のものが、死せる者を運んで鳥に食はせる葬の塔に他ならないのである。

六月初旬の孟買の朝は、やゝ涼しいのも束の間で、灼けるやうな太陽が、灣内の水の上に、花の咲く街路樹の枝に、道ゆく土人の白衣に、目もくらむやうに烈しく照りつけてくる。その激しい光の下を、影にする何ものもない街を暫く走らせてゐた自動車は、大きな石垣に添つて阪道を小高い丘に登り出した。阪道の兩側は大木の深い林がすきまもなく生え茂つて、晝ながら木下闇のうす暗い道がつゞいた。熱い國の强い光の中を通つて來たゞけに、林の道は日の光がさゝぬだけでも、ひいやりとした感を與へた。

マラバー・ヒルの阪道を登りつくした所は一寸した廣場になつてゐて、つきあたりに沈默の

塔への門が立つてゐる。私は自動車から下りて案内者と一所に門の所へ近づいた。入口には粗末な木の卓を置いて、その上に白檀の木片を澤山積んで賣つてゐる。香にしてくゆらす爲めの線香の代りのやうなものであるらしい。佛臭い陰氣な氣持がどことなく漂つてくるのが感ぜられる。門番の土人が、奥の方へ迎へに行つた案内に立つ役僧の出てくるのを待ちながら、私は門の扉にもたれて内を眺めてゐた。

門の中もゆるい勾配のだら〳〵阪になつて上の方にあるらしい建物は、木立にかくれて見えない。中腹に天をつく巨人のやうに枝を四方に張つたすばらしく大きなマラーの樹が一本立つてゐる。ねむに似た葉が青々と茂つて今が盛りの花時と見えて、毒々しい褪紅色の躑躅に似た花がべつとりとどの枝にも一面に咲き滿ちてゐる。釋尊と緣の深い樹だといふことであるが、じつと眺めてゐると、ルバイヤットの豪華版の挿畫でも見てゐるやうな、華やかなうちに、うら淋しい一脈の無常觀がにじみ出てくるのが感ぜられる。すべてインドに咲く佛に緣のある花は、いかに美くしい色に咲いてゐても、どこかに見てゐると寂滅爲樂の無常觀の匂ひが漂つてゐるやうに感ぜられるのは不思議である。

突然激しい羽ばたきが靜かなあたりの空氣をかき亂して、大きな鳥が一羽マラーの樹のいたゞきに止まつた。紅い躑躅に似た花が二つ三つポトリと落ちた。

「アレが烏咀の禿鷹ですよ。ご覽なさい、方々の樹の上に澤山とまつてゐるでせう」

案内者にさう云はれて私は寺内の木を森を見廻はした。氣がつけば誠に驚くべき鳥の數である。梢のいたゞきに二羽三羽、中には十二三羽づゝも固まり合つて止まつてゐるが、何といふ醜惡な氣味のわるい姿なのであらう。黑色の羽根はいらだゝしげに亂れて、禿げて骸骨に似たむき出しの頭部に眼ばかりは鋭く光つてゐる。正に地獄の獄吏といふにふさはしい凄さが、禿鷹の大きなからだ全體からにじみ出してゐる。

遠くの空からまた六七羽群れを爲してとんで來たかと思ふと、近くの大木の梢に揃つて止まつた。一たん止まるとじつと動かずに羽を休めて、たゞ底氣味わるく目ばかり鋭く働らかせてゐる。これが人間を毎日食つてゐる鳥なのかと思ふとその鋭く先きの曲つた嘴が、たまらなく惡感を催してくる。私は暫く鳥を眺めて立つくした。

「どうぞこちらへ」

と僧形の若い男が一人門の中からさしまねいた。こんな陰氣な所にゐるものに似合はず、割合に愛想がいゝ。

僧について石段を登つて行く。

絶對に寫眞をとつてはならぬこと、煙草をすつてはならぬことなどを道々僧はくどく念を押

した。事火教の本坊に入りこんだのであるから致し方はないとはいふものゝ、煙草のすへぬのは大きな苦痛だつた。

石段を登りつくすと上は廣い平地になつて庭園の向ふは深い森が立こめてゐる。庭園には何といふ草か知らぬが、紅や黄の花が美しく咲き亂れて、野生の孔雀が悠然とそこらを歩るき廻つてゐる。

庭園のはづれには柵があつて向ふには行けぬやうになつてゐた。案内に立つた僧は、その柵に倚りながらあれが沈默の塔ですと指した。深い森のかなたに白い大きな圓形の城に似たものが立つてゐる。兩國の國技館を白煉瓦で築き上げたやうな感じである。城壁の上に禿鷹が七八羽、造りものゝやうに靜かにとまつてゐる。

そばまで行つて内も見られるものとばかり思つてゐた私は僧の説明をきいて失望した。パーシー屬にとつては神聖なこの祭場は異教徒はもとよりのこと、パーシーであつても滅多にはそばへ近よらせぬのださうである。

「英國のプリンス・オブ・ウエールスが嘗て來觀された時にも、こゝより向ふへは御案内申さなかつたのです」

と若い僧は宗教の威嚴は、いかな權力にも屈せないのだといふやうな強い口調で昂然と云つ

た。さうして近くにある塔が普通の男女を鳥咀させる塔、遙かに木の間に隱見する小型のが、自殺したり人に殺されたりした變死者の塔だと説明して聞かせた。成程木の間を通して奥深くいくつかの塔が散在してゐるのが見える。

いくら見てゐても大して面白くもないので私は案内の僧について引返した。

花園を通りぬけると墓地になつてゐる。中年の男が一人その邊の石に腰を下ろして小型の教典を手にして大きな聲で何か經文を唱してゐた。黄色い蝶が一つ、その男の廻りを狂つたやうに飛び廻つてゐるのが、何んとなく神祕めいた妙な氣持にさせた。

寺の中へ入ると、そこに石膏で造つた沈默の塔の模型が土間に置いてあつた。傍へ近よることも禁ぜられてゐた塔もこの模型で見ると組織は一目瞭然とわかつた。外見だけでは國技館のやうな圓形の塔も、それは外壁だけのことで、塔の中はすり鉢のやうな屋根のない緩い勾配をした構造で、何のことはない球場の觀覽席のやうにすきまもなく幾筋もの輪をなしたひだが連なつてゐる。この一つのひだの上に、死人を裸にして置くのだといふ。いよ〳〵死人をこゝに運び入れると、禿鷹はちやんと知つてゐて、幾十幾百といふ鳥が外壁の上に並んで待ちかまへてゐる。裸にされた死人をそこに横たへて運搬人が塔の外へ出ると一齊に禿鷹が群がつてこれを嘴む、大がい十五分位で骨ばかりに奇麗に食はれてしまふ。骨は傍の溝から下に落ちるやう

になつてゐるのださうである。私は僧の説明をきゝながら模型を見てゐると、何だか目の前に死骸を嘴む禿鷹の様子が彷彿としていやな氣持がして來た。

「この塔の中のひだのやうなものは三段に分れてゐるでせう。上の一番大きなひだの所は男の死體を置くのです。次は女、一番小さいひだは小供を置くのです」

と僧は馴れても居るのであらう、自分達の信仰なのであるから無慘だなどゝは夢にも考へないのであらう、平氣な顔をして説明してゐるが、私にはもう聞いてゐられないやうな氣がしてきた。いたいけな小供の裸身が、いかに死體であるとは云つても、あの恐ろしい慘忍そのものやうな恰好をした貪欲な禿鷹の嘴に、さいなまれて餌食になる様子などを、慄然たる恐怖なくして想像しうるものがあるだらうか。

私はいやになつて外へ出た。

荒い羽音がして大きな禿鷹が一羽、すぐ近くの屋根に止つた。人を恐れもせぬ貪欲なこの鳥は、骸骨に似た頭を森にさへ切られた薄日に氣味わるく光らせながら、鋭い目をして私を見下ろしてゐた。石でも叩きつけてやりたいやうな衝動を感じながら、私は案内の僧について再び元の道を門の方へ引き返し出した。迷信から來る人間の行爲の果てしもない奇怪さに、憤りと憐れみとの織り交つた云ひやうもない感情が、心の底にかすのやうにこびりついてとれないも

どかしさがあつた。

だら〳〵阪を下りて門に出やうとする所に、長い回廊のやうなものがあつて、麓までつゞいてゐるのが見えた。日本の寺院にある渡り廊下を彷彿させる造り方である。

「この廊下は死人を運びこむ所です」

と案内の僧が教へてくれた。

私達から見れば無慘きはまる鳥葬の慣習も、パーシー屬から見たら神聖な儀式であつて、死ぬものにとつても、殘されたものにとつても至上至高の滿足であるのかも知れない。恐らくは奇麗に一物も殘さず鳥の餌食となるのが、極樂淨土への再生の保證にでもなることであらう。しかし、パーシー屬が死者を悲しむ情は他の民族にくらべて確かに薄いやうに見える。支那あたりは葬式の華やかさは、婚禮と好一對をなしてゐる。日本でも逝けるものへの最後の葬ひは出來るだけ立派にしてと考へるのが人情である。しかるにパーシー屬は婚禮はかなりに華やかなものだと云ふが、葬式は出會つても極めてみすぼらしいものばかりである。擔荷に似た簡單なものに佛をのせて白布を覆つたゞけ、くさ〳〵の花でも上にのせてあるのは寧ろ稀れである。その棺を四人のものがかついで、附添ふ親類や緣者も精々六七人か十人位にとゞまつてゐ

る。誰れもかれも眞白な喪服をまとつて、眞白な帽をかぶる。さうしてどういふわけからか知らぬが、二人づゝ白い布で手を結び合はせて歩るいてゆく。こうして極めてあつさりした行列が大して悲しみの何の表情もなしに街を通つて、マラバー、ヒルの不淨門の渡り廊下にまで送りつけられる。あとは四人の棺をかつぐものが、長い阪になつた廊下を登つて、沈默の塔の禿鷹の群れとぶ所まで持つて行くだけである。どうもこれでは私がパーシー屬のものは死者を悲しむ念が割合に稀薄なのではないかと疑ふのも無理だとは云へないであらう。

門まで送つてくれた案内の僧に、心ばかりの献金をして私は外へ出た。森の中で日は昏く、何となく陰氣ではあつたが、それでも私はいやな所から逃れ出たやうな氣がしてホツとした。

私はこれから二三時間の郊外のドライブを樂しんで水源地になつてゐる山の奥まで行く豫定である。あくまでも南國の樹々の茂つた深い山にたゝえられた大きな湖水には、今でも鰐がすんでゐるさうである。沈默の塔の陰慘な印象から逃れて、私は早く愉快なドライブが樂しみたかつた。

車は奔り出した。塔のつゞきの丘の上は氣持のいゝ山上の公園で海が一目に見下ろせた。南國のあくまでも明澄な空氣は、遠くの干潟に遊んでゐる豆のやうに小さな小供達まで、はつきりと輪劃を描き出して見せてゐた。かなりに廣い公園には白く塗つた氣持のいゝ腰かけが所々

に置かれて、手入れの行屆いた花園には、赤や黄の美くしい花が目もさめるやうなあざやかな色に咲きそろつてゐた。

「氣持のいゝ奇麗な公園だな」と私は自動車の運轉手に話しかけた。

「さうです、今は良い公園です。しかしこゝは水道の貯水池で、昔は水の一ぱい張つた大きな池だつたのですがね。何しろ隣りが沈默の塔で、時々人を食つたばかりの禿鷹が上を飛び廻るので、よく貯水池の中に人間の指などが落ちてゐることがあつたのです。吾々はその水をのむのですからやり切れません。そこで大きな池をすつかり土で覆つて公園にしてしまつたんです。今でもあの公園の下は水道の貯水池になつてゐるのですよ」

と英國人の運轉手は、汚たないものでもほき出すやうな顏をして苦笑ひをした。